

仙台市文化財調査報告書第62集

燕 沢 遺 跡

1984年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市山崎東土地区画整理組合

仙台市文化財調査報告書第62集

燕沢遺跡

1984年3月

仙台市教育委員会
仙台市山崎東土地区画整理組合

序

日頃、文化財行政に対しましては多大の御協力をいただき担当する仙台市教育委員会にとりましては誠に感謝にたえません。

さて、この度の燕沢・山崎西地区の区画整理事業に先だって実施してまいりました燕沢遺跡の発掘調査は関係機関並び市民各位の御協力のもとで無事完了の運びとなりました。本書はその調査の成果を大成したものです。

もともと古代にあっては、陸奥国分寺跡と国府多賀城の中間地点にあって、古瓦の散布するところでもあって、古くから平安時代の寺院あるいは関連する施設があったのではないかとの見解も示されていた所であります。今回の調査では多量の古代遺物と遺構が発見され、また仙台市域では初めての発見となった漆紙文書は特筆すべきことがらであります。

比丘尼坂、善應寺にある横穴古墳群、蒙古の碑、古街道のあった所など、原始～中世まで連續と展開された歴史を偲ぶ所として親しまれている所であります。こうした、文化遺産は市民の宝として永く後世に継承して行くことが、これから「まちづくり」に大切なことと考えます。市民各位の絶大な御協力を念願して序といたします。

昭和59年3月
仙台市教育委員会
教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は、仙台市山崎東上地区画整理事業に伴う燕沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本報告書の執筆は I ~ V(3)を佐藤裕が、V(4)~IXを渡部弘美が分担した。また、吉沢幹夫氏・庄子貞雄氏・山田一郎氏から玉稿を賜わった。編集は渡部が担当した。
3. 本書の文章・図版の方位は真北で統一してある。
4. 本書に掲載した地図は国土地理院発行の5万分の1「仙台」を使用したものである。
5. 本書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原1973)を使用した。
6. 出土遺物のうち、縄文土器・弥生土器・石製品・瓦は別項で一括して取りあつかった。
7. 本調査の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

調査要項

遺跡名称：燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号C-101）

所在地：仙台市岩切字山崎西地内

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担当職員：主事 渡部弘美 教諭 佐藤 裕

調査期間：昭和57年8月2日～12月4日

調査対象面積：約16,000m²

調査面積：約3,750m²

調査協力：仙台市山崎東上地区画整理組合 株式会社三洋設計

調査参加者：渡辺泰伸（仙台育英高等学校教諭） 森剛男 遠藤真 永野次郎 小野寺庄三郎
高野盛孝 高野斐藏 遠藤長吉 郷家米一 陣場峰男 水田禎之 相沢林三郎
石森留吉 大泉林造 佐藤徳右門 但木吉蔵 永野正（故）横田要七
眞中信三 本郷英俊 高橋幸宏 那須祐二 芳賀信行 森浩芳 但木はな子
本橋恵子 山田さつ子 山田ふさ子 小畠京子 前田芳枝 山田みよ
山田和子 松本寿一 只野宗一 宮本昌俊 岩渕信博 伊藤司 山田晃弘
吉田秀寧 斎藤三重子 高橋明美 大和田晶子 鈴木和子 笹平克子
阿部多津子 半照子 菅原恵美子 吉田康子

目 次

序文

例言

調査要項

| | |
|---------------------|----|
| I. 調査に至る経過 | 1 |
| II. 遺跡の位置と周辺の環境 | 1 |
| III. 調査の方法と経過 | 7 |
| IV. 基本層位および発見遺構 | 8 |
| V. 発見遺構と出土遺物 | 11 |
| 1) 住居跡 | 11 |
| 2) 挖立柱建物跡 | 31 |
| 3) 方形周溝遺構 | 34 |
| 4) 土壙 | 36 |
| 5) 溝跡・溝状遺構 | 40 |
| 6) ピット | 42 |
| 7) その他 | 44 |
| VI. 出土遺物について | 48 |
| 〈縄文土器〉 | 48 |
| 〈弥生土器〉 | 48 |
| 〈土師器〉 | 49 |
| 〈赤焼土器〉 | 52 |
| 〈須恵器〉 | 52 |
| 〈出土土器の組み合わせと年代について〉 | 53 |
| 〈瓦〉 | 55 |
| 〈石製品〉 | 65 |
| 〈陶磁〉 | 67 |
| 〈施釉陶器〉 | 67 |
| 〈金属製品〉 | 67 |
| VII. 発見遺構について | 67 |
| 1. 住居跡 | 67 |
| 2. 建物跡 | 70 |

| | |
|----------------------|----|
| 3. 方形周溝遺構 | 71 |
| 4. 七城 | 71 |
| VII. 墓書文字について | 71 |
| IX. まとめ | 72 |
| X. 付章 | 74 |
| 1. 10号住居跡出土の漆紙文書について | 74 |
| 2. 燕沢遺跡の灰白色火山灰 | 75 |

図・表目次

| | | | |
|-------------------|------|------------------------|----|
| 図1 燕沢遺跡と周辺の道路 | 2 | 図31 5号建物跡出土土器 | 34 |
| 図2 遺跡周辺の地形 | 4 | 図32 5号建物跡 | 34 |
| 図3 遺構全図 | 5・6 | 図33 方形周溝遺構 | 35 |
| 図4 調査区基本図 | 9・10 | 図34 方形周溝遺構出土土器・鉄釘 | 36 |
| 図5 1号住居跡 | 12 | 図35 各七塙平面図 | 37 |
| 図6 4号住居跡 | 13 | 図36 48号・55号上塙出土土器Ⅰ | 39 |
| 図7 4号住居跡出土土器 | 14 | 図37 55号・58号上塙出土土器Ⅱ | 40 |
| 図8 3号住居跡 | 15 | 図38 溝跡・溝状遺構断面図 | 41 |
| 図9 5号住居跡出土土器Ⅰ | 17 | 図39 21号溝状遺構断面図 | 42 |
| 図10 5号住居跡出土土器Ⅱ | 18 | 図40 21号溝状遺構出土土器・陶器 | 42 |
| 図11 6号住居跡 | 19 | 図41 ピット232出土土器 | 43 |
| 図12 7号住居跡 | 20 | 図42 ピット134出土土器 | 44 |
| 図13 7号住居跡出土土器 | 21 | 図43 包含層出土土器Ⅰ | 45 |
| 図14 8号住居跡 | 21 | 図44 包含層出土土器Ⅱ | 46 |
| 図15 9号住居跡 | 22 | 図45 各調査区・表探等土器 | 47 |
| 図16 10号住居跡 | 23 | 図46 出土陶文土器拓影 | 48 |
| 図17 10号住居跡出土土器Ⅰ | 24 | 図47 出土弥生土器拓影 | 48 |
| 図18 10号住居跡出土土器・鏡Ⅱ | 25 | 図48 軒平瓦・平瓦(1種) | 59 |
| 図19 11号住居跡 | 26 | 図49 平瓦(1・2種) | 60 |
| 図20 11号住居跡出土土器Ⅰ | 26 | 図50 平瓦(2種) | 61 |
| 図21 11号住居跡出土土器Ⅱ | 27 | 図51 半瓦(4種) | 62 |
| 図22 12号住居跡 | 28 | 図52 半瓦(4種)・丸瓦(2種) | 63 |
| 図23 12号住居跡出土土器Ⅰ・Ⅱ | 28 | 図53 丸瓦(2・3・4種) | 64 |
| 図24 14号住居跡 | 30 | 図54 出土石製品(石磚・剝片) | 65 |
| 図25 14号住居跡出土土器 | 30 | 図55 出土石製品(剥片・石斧・敲石・砾石) | 66 |
| 図26 1号建物跡 | 31 | 図56 住居跡・建物跡・方形周溝遺構配図 | 69 |
| 図27 1号建物跡出土土器 | 32 | 図57 墓書文字書体 | 72 |
| 図28 2号建物跡 | 32 | 表1 周辺の遺跡地名表 | 3 |
| 図29 3号建物跡 | 33 | 表2 上塙一覧 | 38 |
| 図30 4号建物跡 | 33 | 表3 溝跡・溝状遺構一覧 | 41 |

I. 調査に至る経過

燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号C-101）は仙台市の北部を東西に延びる台ノ原・小田原丘陵の東端部に位置する縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡である。特に、布目瓦が出土する所として古くから知られており、寺院又は官衙の存在が考えられてきた遺跡でもある。^(註1) 遺跡の立地する当丘陵は近年急速に宅地化が進み当遺跡地内にも及んできている。昭和56年、^(註2) 遺跡の中央部分にあたる地域で宅地造成に伴う発掘調査が行なわれ、掘立柱建物跡・土塙・溝跡が確認され、布目瓦や土器類が出土し、上記の性格をもつ遺跡である可能性が指摘されている。^(註3)

昭和54年、仙台市岩切字山崎西地内において土地区画整理が計画され、地権者 仙台市山崎東上地区画整理組合設立準備委員会 代表遠藤真氏（現仙台市山崎東上地区画整理組合）より土地区画整理計画案が提出された。開発申請地は昭和56年度発掘調査地点の北側丘陵部一帯で、瓦や土器類が散在しており、地形的な面からも掘立柱建物跡などの遺構の存在が予想された地点である。仙台市教育委員会はこれらの調査成果をふまえ同組合との協議により、開発部分の事前調査を行なうことにして昭和57年8月2日より記録保存を目的とした発掘調査を実施するに至った。

II. 遺跡の位置と周辺の環境

1. 地理的環境

燕沢遺跡は東北本線東仙台駅より北東約2kmの地点、仙台市燕沢東三丁目・岩切字山崎西に所在する。

遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山脈から分岐して延びる宮谷・七北田（仙台市東部においては台ノ原・小田原丘陵の呼称がある）丘陵が東へ張り出しており、両丘陵を七北田川が東流しながら開削し、平野部において梅川を合流して太平洋に注いでいる。七北田川は中流域の両岸に河岸段丘を発達させ、丘陵面には要害地形が見られる。また、丘陵端より太平洋に向けて広大な沖積平野を形成せしめ、当河川の周辺には自然堤防の地形もみられる。

遺跡は台ノ原・小田原丘陵の東端部、七北田川右岸の標高20~30m程の段丘面上に立地する。平野部との比高差は15~20m程である。この段丘面は南側で急傾斜の要害地形、北側は小河川が開削した谷地形がみられる緩斜面となっている。このように遺跡の立地として、平坦面が少ないため緩斜面に遺跡の広がりがみられる特徴がある。

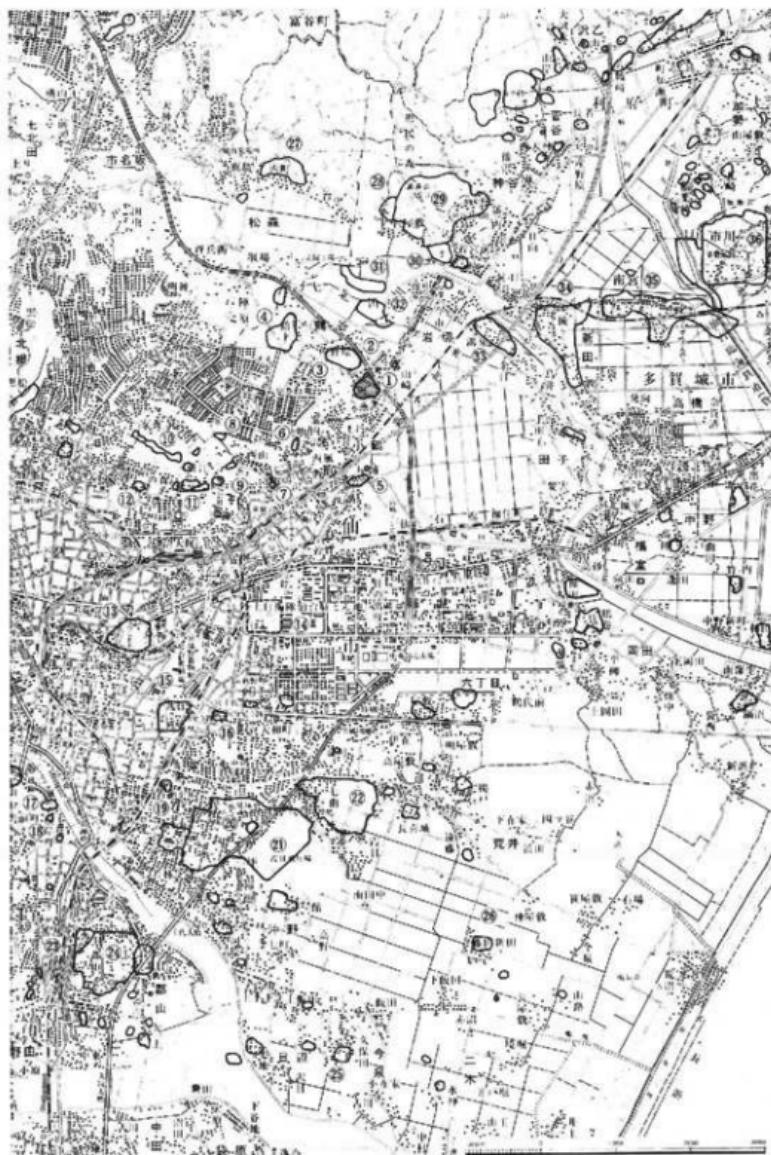


図1 焦沢遺跡と周辺の遺跡

2. 歴史的環境

燕沢遺跡周辺は良好な地理的環境から数多くの遺跡が分布している。特に、七北田川両岸の丘陵面と同河川が形成した自然堤防上に集中している。弥生時代以前の遺物は発見されているが、遺構は現在のところ確認されておらず不明な点が多いが、古墳時代以後の遺跡は種類・數とも多くみられる。

古墳時代の遺跡としては、七北田川の自然堤防上に鴻ノ巣遺跡、岩切畠中遺跡、新田遺跡などがある。鴻ノ巣遺跡からは古墳時代前期(埴輪式)の遺物が出土しており、中期(南小泉式期)の住居跡も発見されている。また、岩切畠中遺跡からは後期(栗原式期)の住居跡が発見されている。当遺跡周辺は、七北田川が丘陵部から平野部へ流れ出る位置にあたり、交通の要所でもあることから、人々の往来も盛んであったと推定され、古墳時代でも早い時期から聚落が存在していたものと寄えられる。古墳は当遺跡と同一丘陵上に千人塚古墳がある。周囲からの削平を受け墳丘は原形をとどめていないが円墳であったと推定される。また、新田遺跡では円筒埴輪が出土しており、周辺に高塚の古墳が存在していた可能性を示唆している。このほか、台ノ原・小田原丘陵の東部においては初期須恵器生産窯の大蓮寺窯跡がみられる。古墳時代終末から奈良時代にかけての遺跡には、両丘陵の麓に善應寺・東光寺・入生沢・台屋敷の横穴墳群がみられ、このうち善應寺横穴墳群は推定で100基を超えるものといわれている。

奈良時代になると、当遺跡東北東約5kmの位置に陸奥国府である多賀城が、つづいて南南西約5kmの位置に陸奥国分寺・同尼寺が建立されている。これらに供給される瓦・土器等の生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始され、現在確認されている窯跡の数は18群にものぼり、一大窯跡群が形成されていたことがうかがわれる。

平安時代の遺跡には岩切畠中遺跡、鴻ノ巣遺跡などがある。このうち、岩切畠中遺跡では住

| 番 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 時代 | 番 | 遺跡名 | 種別 | 立地 | 時代 | | |
|----|---------|-------|------|--------|----|--------|--------|------|----------|-------------|----|
| 1 | 燕沢遺跡 | 古墳・集落 | 丘 | 古文-平安 | 19 | 若林城跡 | 城 | 陥 | 自然堤防 | 中世-近世 | |
| 2 | 千人塚古墳 | 円錐 | 丘 | 古墳 | 20 | 造足塚古墳 | 前方後円墳 | 自然堤防 | 古墳(中期) | | |
| 3 | 真備前遺跡 | 包含地 | 丘 | 隆 | 21 | 南小泉遺跡 | 墓 | 谷 | 自然堤防 | 弥生-中世 | |
| 4 | 安井城跡 | 城 | 丘 | 中世 | 22 | 白石東原斜面 | 墓 | 谷 | 沖積平野 | 奈良 | |
| 5 | 小鶴城跡 | 城 | 丘 | 隆 | 23 | 西台切塗 | 谷 | 谷 | 自然堤防 | 弥生-古墳 | |
| 6 | 郡那寺横穴式 | 横穴 | 丘陵斜面 | 古墳-平安 | 24 | 藍山遺跡 | 官 | 街 | 自然堤防 | 古墳-奈良 | |
| 7 | 大蓮寺窯跡 | 窯 | 丘陵斜面 | 古墳(中期) | 25 | 今坂城跡 | 墓 | 谷 | 自然堤防 | 弥生-古墳-平安-近世 | |
| 8 | 安養寺中南淡路 | 窯 | 谷 | 古墳斜面 | 26 | 綿田新日遺跡 | 包含地 | 浜 | 墓 | 弥生 | |
| 9 | 安養寺下萬路窯 | 窯 | 谷 | 古墳斜面 | 27 | 松春坂跡 | 城 | 丘 | 隆 | 中世 | |
| 10 | 与浜南沿岸窯 | 窯 | 谷 | 古墳斜面 | 28 | 白石敷櫛穴群 | 横穴 | 谷 | 丘陵斜面 | 古墳 | |
| 11 | 神明社遺跡 | 墓 | 谷 | 古墳斜面 | 29 | 岩切城跡 | 城 | 谷 | 丘 | 中世 | |
| 12 | 安中前塚跡 | 跡 | 丘陵斜面 | 奈良 | 30 | 東光寺横穴群 | 横穴 | 谷 | 丘陵斜面 | 古墳 | |
| 13 | 國分縦貫跡 | 城 | 丘 | 隆 | 31 | 大上御真跡 | 包 | 含 | 池 | 自然堤防 | 平安 |
| 14 | 東引城跡 | 城 | 路 | 自然堤防 | 32 | 岩切畠中遺跡 | 包含地 | 自然堤防 | 奈良-平安-近世 | | |
| 15 | 陸奥國分寺跡 | 寺 | 丘 | 冲積平野 | 33 | 西ノ瀬遺跡 | 包含地 | 自然堤防 | 古墳-平安-中世 | | |
| 16 | 勝負山古墳跡 | 寺 | 丘 | 自然堤防 | 34 | 新刈道跡 | 包含地 | 自然堤防 | 古墳-中世 | | |
| 17 | 宗禪寺横穴群 | 横穴 | 丘陵斜面 | 古墳-奈良 | 35 | 山川遺跡 | 包含地 | 自然堤防 | 古墳-平安 | | |
| 18 | 鬼塚古墳 | 前方後円墳 | 自然堤防 | 古墳(中期) | 36 | 多賀城跡 | 宮西(国西) | 丘 | 谷 | 奈良-中世 | |

表1 周辺の遺跡地名表

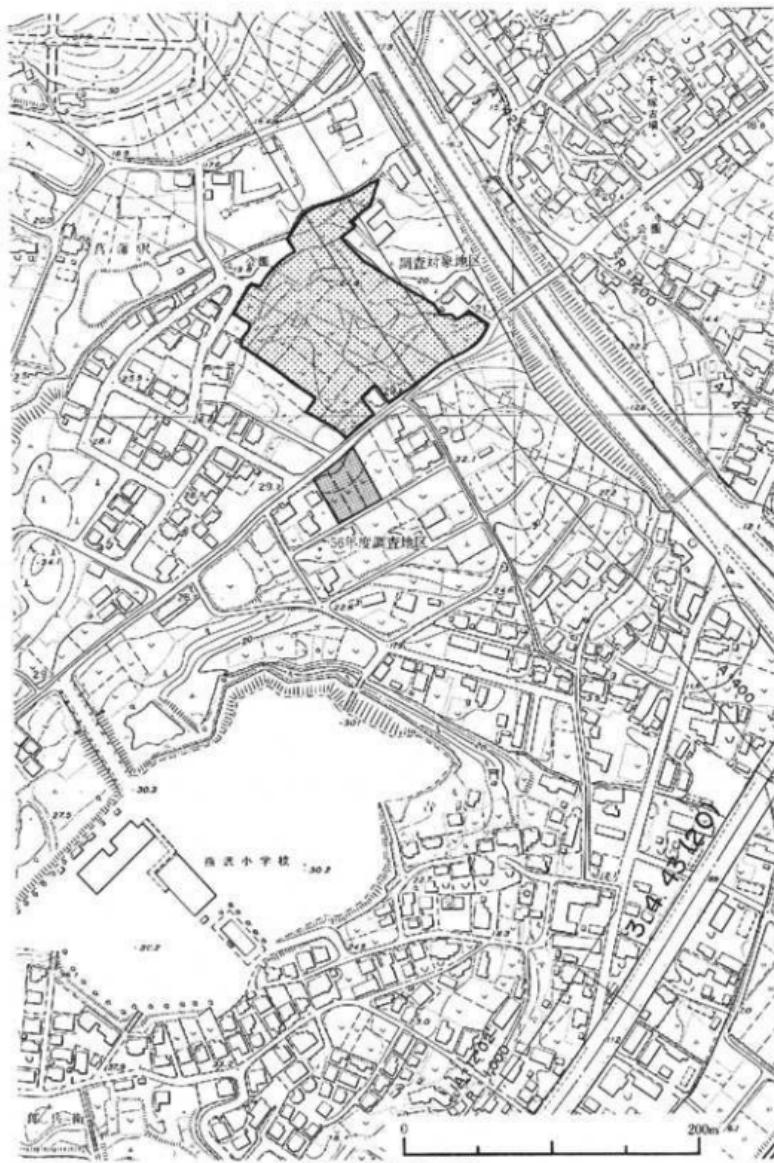


図2 遺跡周辺の地形

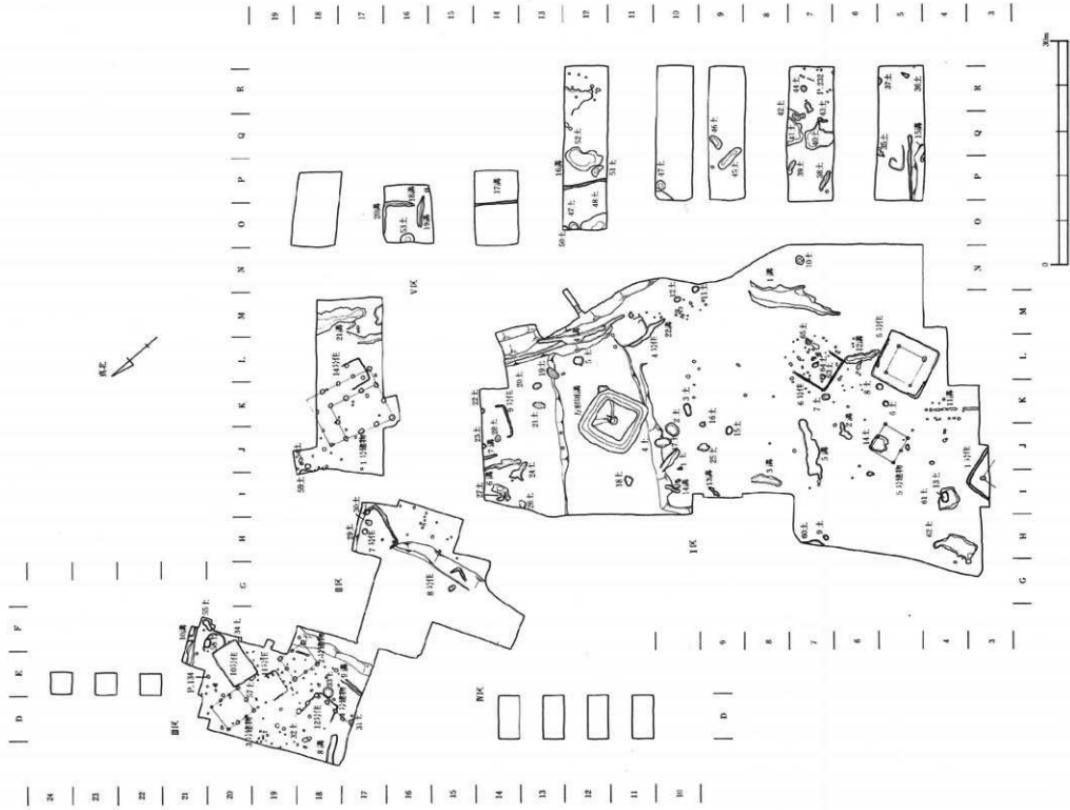


圖3 通橋全體圖

居跡1軒が、鴻ノ巣遺跡からは溝跡・土壙が確認されている。この他、周辺の遺跡からは平安期の土師器・須恵器・瓦が多数発見されている。

中世の遺跡では、七北田川左岸丘陵上に国指定史跡である岩切城（高森城・鴻ノ巣館）がみられる。これは、源頼朝によって陸奥国府の留守職に補任された伊沢（留守）家景が構えた館で、麓には留守氏の菩提寺である東光寺には磨崖仏や板碑が多数みられる。その他、小鶴城や筆森城など、いくつかの中世の館跡が知られており、当地は鎌倉時代から戦国時代末期にかけて要衝の地であったことがうかがわれる。留守家文書によると、当時「冠川」と呼ばれていた七北田川に「今市橋」が架けられており、冠屋市場、河原宿五日市場、在家などの地名がみられ、園府へ通じる道に沿って七北田川流域に集落が発達しており、すでに商業活動も盛んに営まれていたと思われる。

以上のように、燕沢遺跡周辺は古くは古墳時代から連綿と続く多くの遺跡群で構成されており、特に中世においては政治・経済・文化的一大中心地であったと考えられる。

III. 調査の方法と経過

今回、提出された開発予定地は遺跡の北東部分、台ノ原・小田原丘陵から分岐した舌状台地およびその周縁部にあたる。標高は16~28m程で全体的に北東側へ傾斜しており、階段状の畠地として利用されていた所である。

調査区は、土地境界杭を基準とし、南北（真北線から東へ約40°偏する）に基準線を設け6mを単位としたグリッドを設定した。グリッド名は南北軸にアラビア数字、東西軸にアルファベット文字を用いた名前を使用した。調査区は急斜面や削平の著しい地点を除いて地形に合わせて五つの区を設定した。

- I 区：舌状台地上全体に広がる馬背上の平坦面
- II 区：舌状台地の北側周縁部中段の緩斜面
- III 区：舌状台地の北側周縁部下段の緩斜面
- IV 区：舌状台地の北西側周縁中段の緩斜面
- V 区：舌状台地の東側・小谷地形部分の凹面と緩斜面

調査は表土全面を重機で排除し造構確認をすすめていったが、区によっては部分的な調査で終了したものもある。全体的に表土層は薄く、造構の状態は不良であった。造構は特にI・II・III区で多く確認され、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡などが検出されている。

調査も終了に近づいた11月20日には現地で説明会を開催し、調査は12月4日に終了した。最終発掘面積は約3,750m²である。

IV. 基本層位および発見遺構

調査区内堆積土は、I区などの標高の高い地点では全体的に薄く10~15cm程度で地山面に達するが、II~V区などは傾斜地ということもあり10~80cm程度の堆積層が観察される。調査区が広範囲にわたるため、基本的な層位の区ごとの関係を把握することは出来なかった。調査区の一部に限られるが灰白色の火山灰が確認されており、火山灰層を堆積するものやそれを切る形の遺構が確認されている。遺構は一部のものを除きほとんどのものが地山面で確認されている。区ごとの状況を下記に略述する。

〈I区〉

I区は北東方向に舌状に伸びる平坦部分であるが周縁は傾斜面となっており、地形的な条件により堆積土は全体的に薄い。全体が耕作面となっており、細分は可能であるが地山まで大きく1層として扱えられる。I層中からは石鏸・土師器・須恵器・瓦などが出土しており、遺構は1号・4号・5号・6号・9号住居跡をはじめ方形周溝遺構・溝状遺構・土壙・ピットが確認されている。

〈II区〉

II区はIV区から続く舌状台地の北側周縁部にあたり、畠地となっていた所である。堆積土は耕作土の1層のみである。遺構は7号・8号住居跡をはじめ土壙・ピットが確認されている。

〈III区〉

III区はII区から更に一段低い舌状台地の裾部分にあたり、北西側に位置する谷へゆるやかな傾斜をみせる地点である。堆積土は北西側にかけて徐々に厚くなってしまい、6層の堆積土を確認している。第1層は耕作土で、第2層以下は暗褐色土と黒褐色土が互層となるもので縄文時代から平安時代までの遺物が含まれている。遺構は10号・11号・12号住居跡、2号・3号・4号掘立柱建物跡をはじめ土壙・溝状遺構・ピットが確認されている。

〈IV区〉

IV区はI区舌状台地北西側周縁部の傾斜面に位置し、耕作のため階段状に削平を受けていた地点である。堆積土は耕作時の搅乱を受けているが大きく3層まで確認され、北西側の谷部へ傾斜している。遺構は確認されず、堆積土中より土器片が若干出土したのみである。

〈V区〉

V区はI区東側の谷地形を中心とした調査区で、全体的に凹面となっており南東から北西にゆるやかな傾斜を見る地点である。9トレンチでは堆積土を14層確認している。堆積土は水平に近いレンズ状堆積を示している。17トレンチでは11層の堆積土を確認しており、ほぼ水平堆積を示している。灰白色火山灰が層中に検出され、それを切る形で掘立柱の柱穴が確認されて

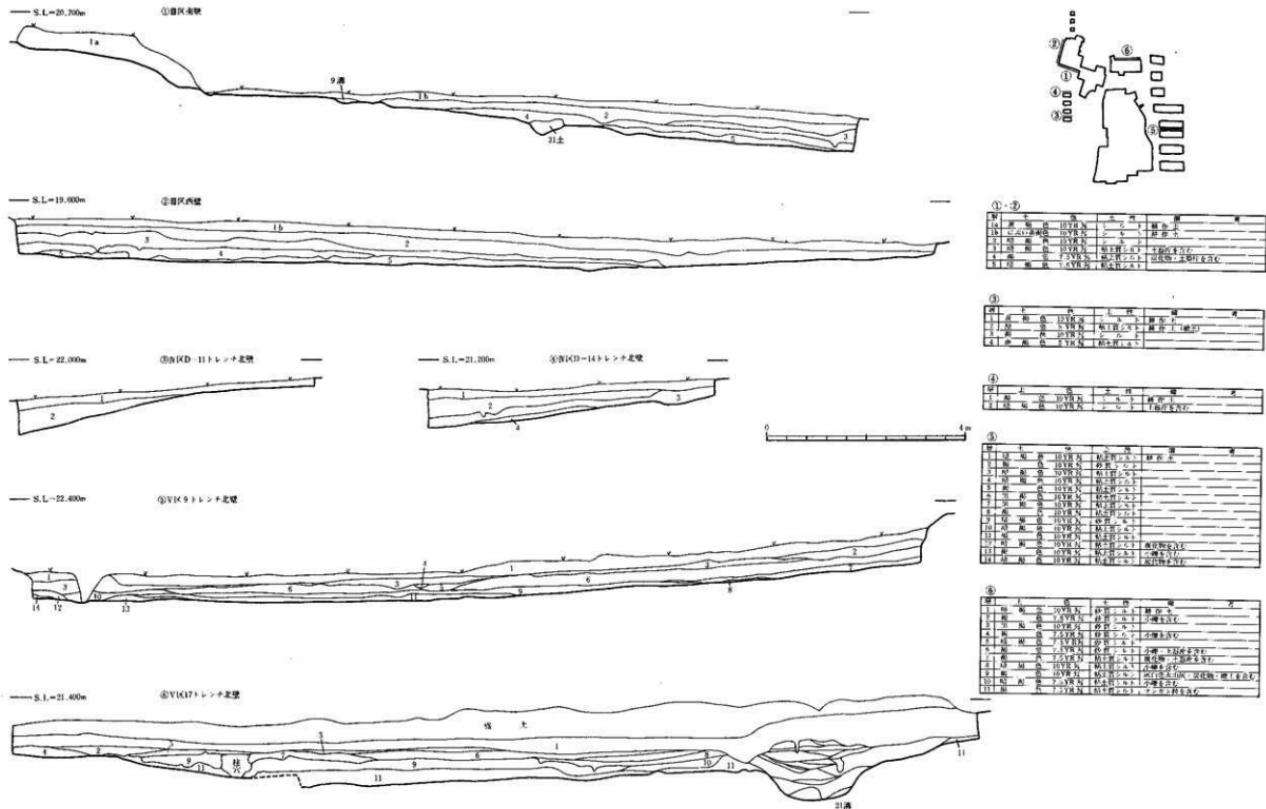


図4 調査区基本層位

いる。造構には14号住居跡・1号掘立柱建物跡をはじめ土壙・溝状造構・ビットが確認されている。掘立柱建物跡を除いて全て地表面で検出されている。遺物には土師器・須恵器片が出土しており、此片は他の区に較べて多く出土している。

V. 発見遺構と出土遺物

発見された遺構には住居跡・掘立柱建物跡・方形周溝造構・土壙・溝跡・溝状造構・ビット等がある。遺構の遺存状態は耕作などのため全体に不良であった。

遺物は整理箱にして60箱程の出土量である。種類としては縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・縁軸陶器・陶器・硯・瓦・石製品・鉄製品・漆紙文書などがある。土器類が出土品の大半を占め、土師器坏の中には墨書きもつものがみられた。また、漆紙文書は断片ではあるが文字が判読されている。

(1) 住居跡

住居跡は11軒確認された。これらは全て竪穴式住居跡である。住居跡は調査区全体に散在するかのように分布するが、所属年代・軸方向の違いから大きく2グループに分かれる。また、精査時点では住居と認定しがたいものがあり欠番となっているものがある。

1号住居跡

調査区丁区の南西端、I・J-3グリッドを中心に確認された。1区の中で最も標高の高い地点にあたる。一部後世の土壙によって削平された部分がある。

平面形は大部分が調査区外へ延びるためプランは不明であるが、プラン北東部で屈曲がみられ遺存状況から隅丸方形を呈するものと考えられる。確認長は北辺で約3.85m・東辺で約5.35mまで計れた。東辺の軸方向はN-16°-Wである。

堆積土は周溝部まで含めて7層確認した。褐色系のシルト層で構成されている。

壁は北側と東側の確認のみであるが、周溝底面から急角度で立ち上がる。壁高は15~40cm程度である。周溝も壁直下にめぐっており、幅20~40cm程度で深さは8~12cm程度と全体に浅い。

床面はほぼ平坦で地山を床としている。

柱穴は床面北東部に1基確認した。柱穴掘り方は不整円形を呈しており、長軸80cm・短軸60cmを計る。柱痕跡が検出され径20cm程度の円形で深さは40cm程度のものである。

確認範囲が狭いこともあり住居に伴う上記以外のものは検出されなかった。

遺物は全て破片資料で堆積土中からの出土である。種類としては縄文土器・土師器・赤焼土器・瓦があるが量的には少ない。

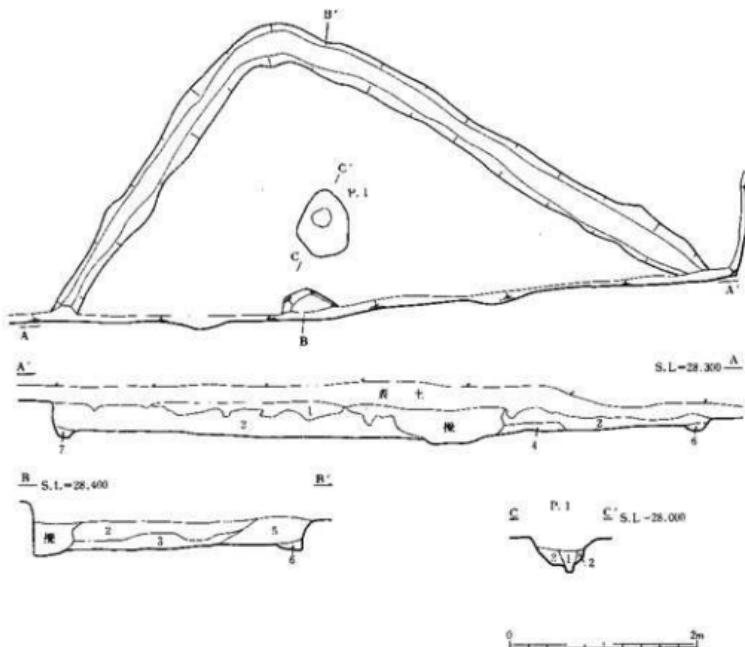


図5 1号住居跡

4号住居跡

調査区I区東側斜面、L・M-11グリッドで確認された。住居東側部は斜面下方にあたり削平が著しく遺存していない。

平面形は削平のため不明部分はあるが、残存状況から隅丸方形を呈すると考えられる。規模は西辺で約4mを計り、北辺と南辺の確認長はそれぞれ約1.60m・2.60mまで計れた。西辺の軸方向はN-10°-Eである。22号溝状造構と重複関係にあり溝状造構を切っている。

堆積土は大きく3層に分かれる。堆積土は南西側から北東側にかけて厚さが減じている。樹

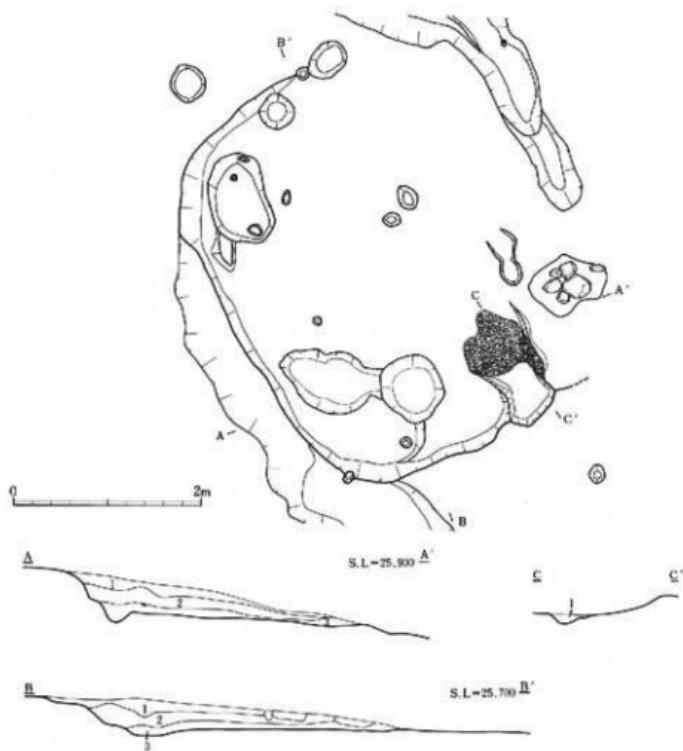
| 層 | 土色 | 土性 | 特徴 |
|---|--------------|--------|-------------------|
| 1 | 暗褐色 10YR 4/2 | 粘土質シルト | 耕作土 |
| 2 | 褐色 10YR 4/2 | 粘土質シルト | 炭化物・上層・小礫・黒褐色土を含む |
| 3 | 褐色 10YR 4/2 | 粘土質シルト | 炭化物・砂粒・小礫を含む |
| 4 | 褐色 7.5YR 4/2 | シルト質粘土 | 炭化物を含む |
| 5 | 褐色 7.5YR 4/2 | 粘土質シルト | 炭化物・小礫を含む |
| 6 | 褐色 10YR 4/2 | 粘土質シルト | 小礫を含む |
| 7 | 褐色 10YR 4/2 | 粘土質シルト | 炭化物・小礫を含む |

| 層 | 土色 | 土性 |
|---|--------------|--------|
| 1 | 黄褐色 10YR 4/2 | 粘土質シルト |
| 2 | 明褐色 10YR 4/2 | 砂質シルト |

色系のシルト層で構成されている。

壁は全体的にゆるやかな立ち上がりをみる。斜面に立地するための壁崩壊が理由と考えられる。壁高は西壁側で30cm強を計る。周溝は確認されなかった。

床面はほぼ平坦であるが、わずかながら東側へ傾斜をみる。地山を床面としている。床面上において大小のピットを10基検出したが、柱穴となるものは確認されなかった。



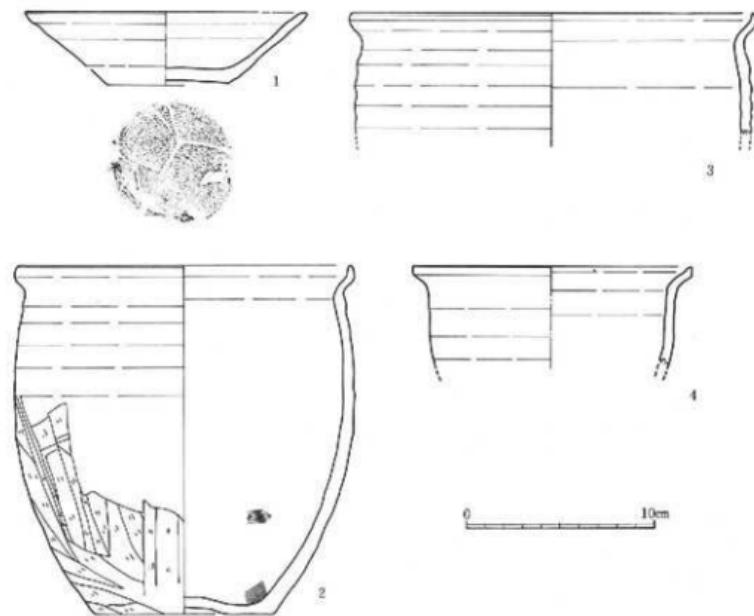
| 番 | 土 色 | 土 性 | 備 考 |
|---|--------------|-----|------------|
| 1 | 暗褐色 10YR 4/2 | シルト | 土細胞・炭化物を含む |
| 2 | 褐色 10YR 5/4 | シルト | 土細胞片・鐵土を含む |
| 3 | 褐色 7.5YR 5/4 | シルト | 炭化物を多量に含む |

| カマド部 |
|------------------------------|
| 1 暗褐色 10YR 4/2 硫土質シルト 炭化物・鐵土 |

図6 4号住居跡

カマドが住居南壁に附設されている。燃焼部のみの確認で煙道部は不明である。地山を削り出して構築しており、赤変した両袖がかすかに残在するのみである。燃焼部は焚口部から奥壁に向けてかすかに立ち上がりをみせる。規模は焼土・炭化物の範囲から長軸は130cm程度で、最小幅は30cmを計る。

遺物は床面でのものではなく全て堆積土中の出土である。多くのものは細片となっているが、種類としては土師器壺・甕、須恵器甕、瓦がある。



| 図・表 | 種別 | 質種 | 層位 | 外 壁 回 装 | 内 壁 回 装 | 口 径 | 底 径 | 器 高 | 分類 | 備考 |
|-----|------|----|-----|------------------|----------------|------|-----|-----|----|----|
| 7-1 | 赤絶上着 | 壺 | 粗 土 | ロクロ調整・縫跡一回転承切り | ロクロ調整・縫跡付近にナデ? | 1150 | 563 | 399 | b | |
| -2 | 土師壺 | 甕 | 粗 土 | ロクロ調整・全体下地 ヘラケズリ | ロクロ調整・一部にナデ? | — | — | — | a | |
| -3 | 土師壺 | 甕 | 粗 土 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 234 | — | — | a | |
| -4 | 土師壺 | 甕 | 粗 土 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 1480 | — | — | a | |

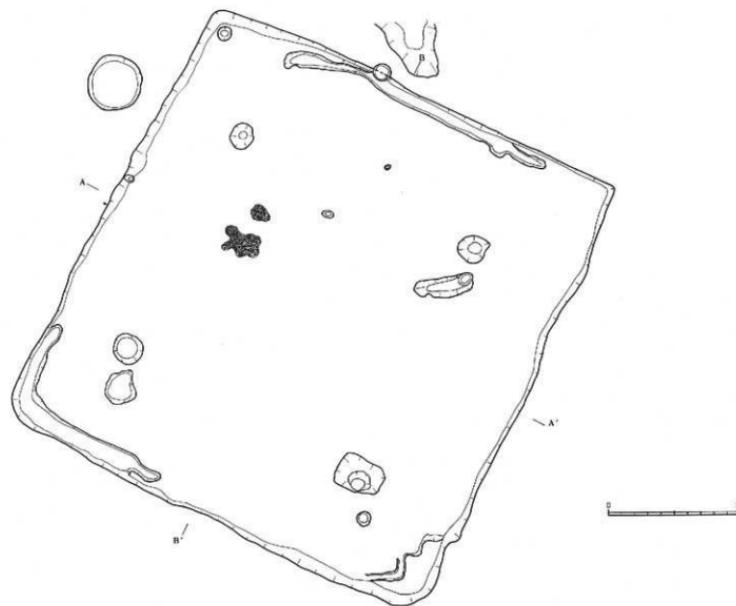
図7 4号住居跡出土土器

(単位:mm)

5号住居跡

調査区I区、K・L-5グリッドを中心に確認された。

平面形は方形を基調とする隅丸方形である。規模は長軸が約7.20m・短軸が約7mを計りほ



| 層 | 土色 | 土性 | 備考 |
|----|---------|--------|----------------------|
| 1 | 褐色 | 10YR N | シート 土細粒で、炭化物を含む |
| 2 | 紅褐色或黄褐色 | 10YR N | シート |
| 3 | 褐色 | 10YR N | シート 灰化物を含む。第2才新鮮地 |
| 4 | 褐色 | 10YR N | 粘土質シート 土細粒で、炭化物を含む |
| 5a | 褐色 | 10YR N | シート 土細粒で、炭化物を含む |
| 5b | 褐色 | 10YR N | 粘土質シート 土細粒で、炭化物を含む |
| 5c | 褐色 | 10YR N | シート 土細粒で、炭化物を含む |
| 6 | 褐色 | 10YR N | 粘土質シート |
| 7 | 褐色 | 10YR N | シート 賢細土 |
| 8a | 褐色 | 10YR N | シート 賢細土 |
| 8b | 褐色 | 10YR N | シート 賢細土 |
| 8c | 褐色 | 10YR N | 粘土質シート しまでのびない |
| 9 | 褐色 | 10YR N | 粘土質シート |
| 10 | 褐色 | 10YR N | 粘土質シート 炭化物を含む (30cm) |

図8 5号住居跡

ほぼ正方形を呈している。東辺の軸方向はN-25°Wである。面積約50.4m²を有する。

堆積土は8層確認されたが、大きく3層に大別できる。土層はシルト層、中間層は灰白色火山灰を含むシルト層、下層は粘土質のシルト層である。中間の層をはさんで上層と下層では出土遺物に大きな年代差が確認されている。

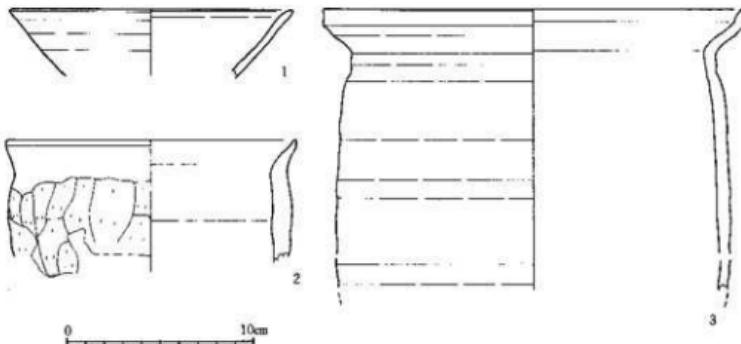
壁面は周溝底面から急角度で立ち上がる。壁高は8~30cm程度である。周溝は北西・南西隅と東壁中央部のみに確認された。幅は10~30cm程度で深さは5~10cm程度を計る。断面は皿状を呈する。

床面はほぼ全面に貼床が確認された。貼床は褐色のしまりの強い粘土質シルトで、厚さは1~10cm程度でかたくつきかためられている。

柱穴は住居対角線上に4基確認した。柱穴掘り方は円形を基調としており径40~70cm程度のものである。柱痕跡が検出されるものもあり、径18cm程度の円形である。

炉跡は住居中央部北側で検出した。径60cm程度の焼土塊が残在し、周辺に焼土がみられるのみのものである。地床炉と考えられる。

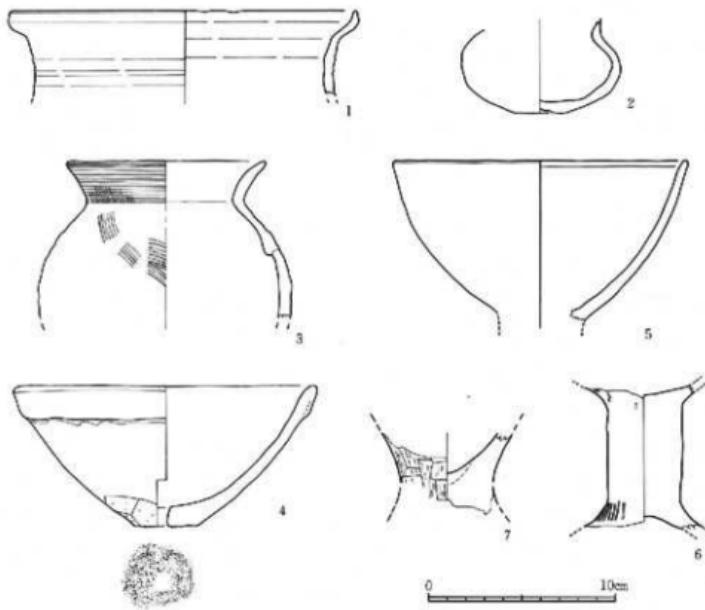
遺物の出土状況として、堆積土上層でロクロ使用の土師器・赤焼土器・瓦が、下層ではロクロ不使用の土師器が確認されている。上層出土のものはほとんどが細片となっており散乱状態での出土であった。状況から廐棄としての性格を考えうるものである。下層出土の土師器も全て堆積土中のものであるが一括の状態で出土している。種類として上層では土師器壺・甕、赤焼土器壺・平瓦があり、下層では土師器高壺・壺・甕・台付甕・台付鉢・石器がある。



| 四・番・堆・別 | 器・種 | 材・性 | 外・在・調・査 | 内・面・調・査 | 口・径 | 底・径 | 高・高 | 分・類 | 備・考 |
|----------|-----|-----|---------------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 9-1 本燒土器 | 壺 | 埋・土 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 131 | — | — | | |
| 2 土・師・器 | 甕 | 埋・土 | ロクロ調整・体部一ヘラケリ | ロクロ調整 | 155 | — | — | b | |
| 3 土・師・器 | 甕 | 埋・土 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 224 | — | — | a | |

図9 5号住居出土土器 I

(単位:mm)



| 図・番 | 特 別 | 器種 | 層位 | 外面調整 | 内面調整 | 口徑 | 底径 | 高さ | 分類 | 備 考 |
|------|-------|-----|-----|-----------------------|-------|-------|----|----|----|------------|
| 10-1 | 上 鋸 磨 | 壺 | 埋 土 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 185 | — | — | a | |
| -2 | 土 鋸 磨 | 壺 | 埋 土 | 不明 | 不明 | — | 25 | — | | |
| -3 | 七 鋸 磨 | 壺 | 埋 土 | 口縁一ハケ目・ヨコナザ 側縁一ハケ目 | 不明 | (106) | — | — | | |
| -4 | 上 鋸 磨 | 壺 | 埋 土 | 全体下端一ヘラケズリ | 不明 | 162 | 33 | 25 | | 複合口縁 單孔 |
| -5 | 土 鋸 磨 | 台付鉢 | 埋 土 | 不明 | 不明 | 158 | — | — | | |
| -6 | 土 鋸 磨 | 高 环 | 埋 土 | ハケ目 | 不明 | — | — | — | b | |
| -7 | 上 鋸 磨 | 台付壺 | 埋 土 | ヘラケズリ | 不明 | — | — | — | | |

図10 5号住居出土土器II

(単位:mm)

6号住居跡

調査区I区、L-7グリッドを中心確認された。

平面形は住居東壁部が削平されているが造存状況から方形を呈すると考えられる。規模は西辺で約4.9mを計る。北辺と南辺は周溝確認長がそれぞれ約5.1m・2.6mまで計れたが、住居確認時においては北辺で5.9mを計っている。西辺の軸方向はN-17°-Wである。63号・64号・65号土壤と重複関係にあり全てに切られている。

堆積土は褐色の粘土質シルト層を1層確認したのみである。

壁は急な立ち上がりをみせるが、ほとんどが削平を受け周溝のみの残存となっている。周溝輪は約20cmを計り、深さ4~8cmと全体的に浅い。

床面はほぼ平坦でゆるやかに東側へ傾斜をみせる。住居南東部において部分的な貼床がみられたが、全体としては地山を床としている。床面上において多数のビットが検出されたが、柱穴となりうるものは確認されなかった。

遺物は堆積土上1層から土師器の破片が少量出土したのみである。図示し得るものはない。

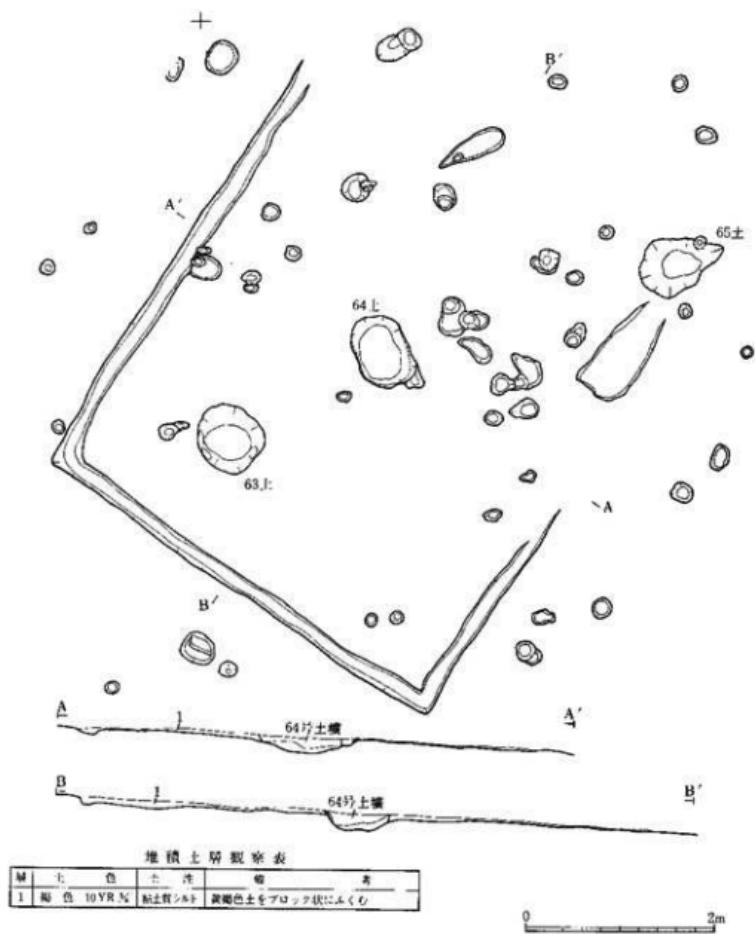


図11 6号住居跡

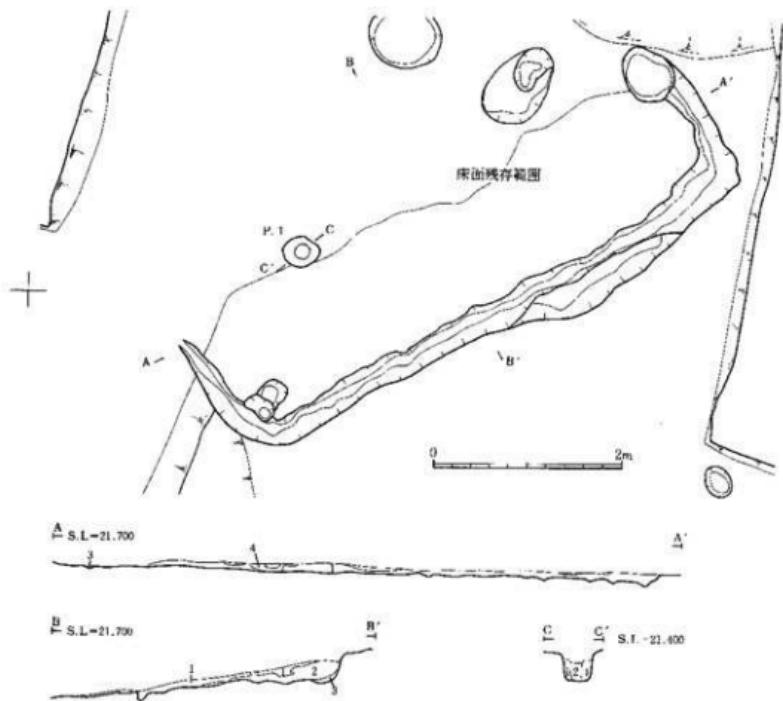
7号住居跡

調査区Ⅱ区、H・I-16・17グリッドで確認した。当箇所は北側へ傾斜をみる地点で、削平のため住居南側部のみの確認である。プラン全体に灰白色の火山灰が検出されている。

正面形は削平のため不明であるが、遺存状況から方形を呈するものと考えられる。規模は南辺で約6mを計る。南辺を基準とした西辺の軸方向はN-9°-Eである。

堆積土は周溝部まで含めて3層確認された。褐色系のシルト層で構成され、全体に細礫がみられる。灰白色の火山灰は1層目にあたる。

壁は周溝底面から急角度で立ち上がり、残存壁高は30cm程度である。周溝は壁直下にめぐって



堆積土観察表

| 層 | 上色 | 土性 | 塊 | 名 |
|---|--------|-----------|--------|----------|
| 1 | にじむ黄褐色 | 10YR 5/4 | 砂質シルト | 三色大山灰を含む |
| 2 | 褐 | 10YR 5/6 | 粘土質シルト | 炭化物岩下層入 |
| 3 | 褐 | 7.5YR 5/6 | 粘土質シルト | 鐵土被覆下层入 |

柱穴埋土観察表(P.)

| 層 | 上色 | 土性 | 塊 | 名 |
|---|-----|----------|--------|---------|
| 1 | 褐 | 10YR 5/4 | 砂土質シルト | |
| 2 | 暗褐色 | 10YR 5/6 | 粘土質シルト | 炭化物岩下層入 |

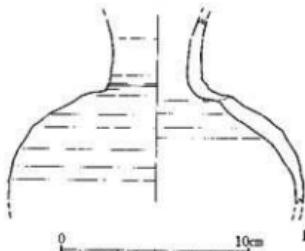
図12 7号住居跡

おり、幅は30cm程で深さは2~9cmと浅い。断面は皿状である。

床面は一部分の残存であるが、床は地山（岩盤）ではなく平坦であるが凹凸もみられる。貼床の施設は検出されなかった。

柱穴は床面において1基（P.1）確認した。径40cm程の円形の掘り方がみられ、径15cm程の円形の柱痕跡が検出されており深さは30cm程のものである。床面において3個のピットを検出しているが規模・配置から柱穴には断定され得なかつた。性格は不明である。

遺物は堆積土中より土師器・須恵器が出土しているが多くは網片となっている。床面より須恵器壺が一点出土している。



| 房番 | 種別 | 形種 | 部位 | 外因 腐蝕 | 内因 水害 | 口径 | 底径 | 器高 | 分類 | 備考 |
|------|-----|----|----|-------|-------|----|----|----|----|----|
| 13-1 | 須恵器 | 壺 | 床面 | ロクロ剥離 | ロクロ剥離 | — | — | — | — | — |

図13 7号住居跡出土土器

(単位:mm)

8号住居跡

調査区Ⅱ区、G-15グリッドで確認された。北側へ傾斜をみる位置にあり住居南東部隅のみの残存である。

平面形は遺存状況から方形を呈すると考えられるが規模は不明である。東辺の軸方向はN-10°-Eである。

堆積土は3層まで確認された。褐色系の粘土質シルト層である。

壁はゆるやかな立ち上がりをみせる。壁高は最大で40cm程を計る。周溝は壁残存部のみにみられ深さ8cm程と浅い。

床面は削平のため一部分のみの残存である。地山を床としている。

柱穴は1基確認されている。住居南東部隅から北西側約2.5mの地点に位置する。柱穴掘り



図14 8号住居跡

方は70×60cm程の長方形を呈し、径15cm程の円形の柱痕跡がみられる。深さは50cm程である。遺物は出土していない。

9号住居跡

調査区Ⅰ区北端部、J・K-14グリッドで確認された。削平を受けており住居南側部の周溝のみの確認にとどまっている。

平面形は遺存状況から方形を呈するものと考えられる。規模は南辺で約4.1mを計る。南辺の軸方向はN-68°-Wである。

堆積土は周溝部のみで暗褐色のシルト層である。

床面はほぼ平坦であるが北側にゆるやかな傾斜を見る。地山（礫を多く含むシルト層）が床となっており凹凸がみられる。

周溝は幅約20cm、深さ10cm程である。断面形は逆台形を呈している。

遺物は出土していない。

10号住居跡

調査区Ⅲ区、E-20グリッドを中心確認された。

平面形は東西方向に長い隅丸方形を呈する。規模は長軸で約5.56m・短軸で約3.74mを計る。面積約20.8m²を有する。東辺の軸方向はN-8°-Eである。57号土塙・58号土塙と重複関係がみられ、両者を切っている。

堆積土は6層確認された。褐色系のシルト層である。

壁は西壁と南壁では急角度で立ち上がるが、東壁と北壁ではなだらかとなっている。壁高は全体的に低く5~10cm程である。周溝は確認されなかった。

床面はほぼ平坦である。床全面に黄褐色土の貼床が2~8cmの厚さで検出されている。住居中央部で床が赤変した箇所を確認している。二ヶ所あり、大きなもので80×30cm程、小さなもので30×20cm程のものである。炉跡とも考えられたが遺存状況もわるく積極的な確認は得られなかった。

ピットは13個検出したが規模・位置関係から柱穴と考えられるものはなかった。性格は不明である。

遺物には上師器壊・甕、須恵器壊・甕、平瓦・丸瓦、硯、漆紙文書がある。多くのものは堆

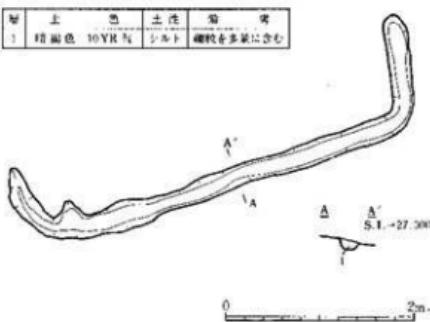
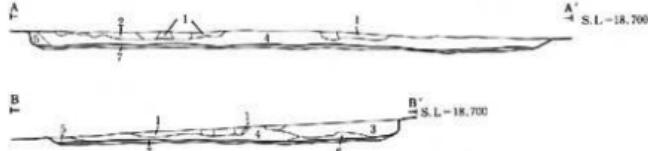
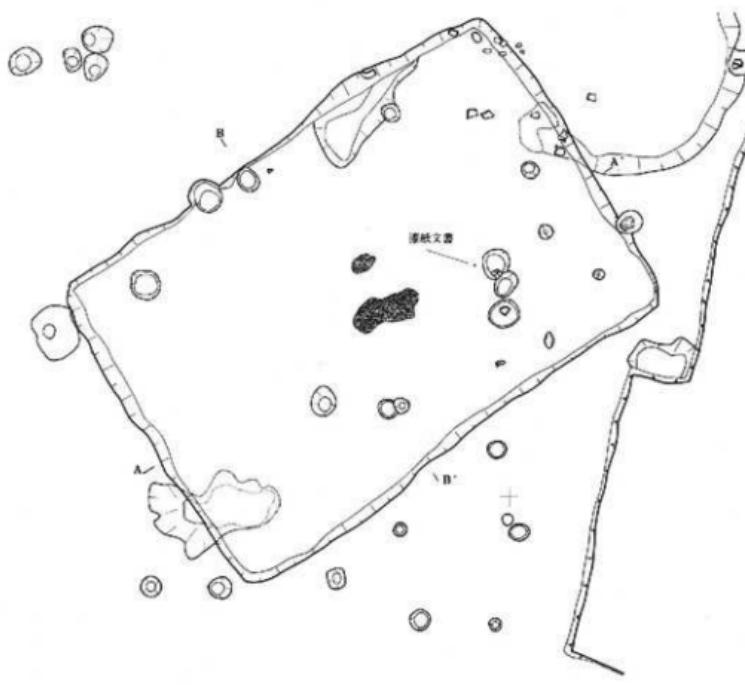


図15 9号住居跡

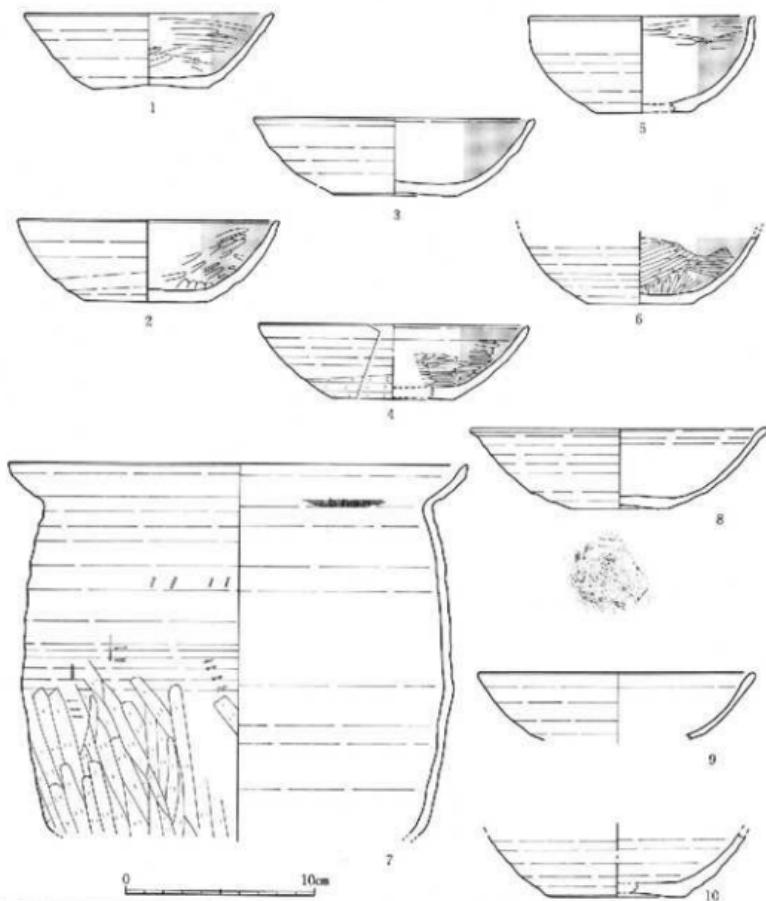
積土中の出土であるが、漆紙文書は土師器坏片内面に付着した状態で床面から出土している。



0 2m

| 層 | 土 色 | 鉄 | 土 性 | 電 灵 |
|---|--------|----------|---------|--------------|
| 1 | にじむ黄褐色 | 10YR 5/6 | 砂質シルト | |
| 2 | 赤 黄褐色 | 10YR 5/6 | 粘土質シルト | |
| 3 | にじむ黄褐色 | 10YR 5/6 | 砂質シルト | |
| 4 | 暗 褐 色 | 10YR 5/6 | 粘土質シルト | 透水・炭化物・塊土を含む |
| 5 | 褐 色 | 10YR 5/6 | シ ルト | |
| 6 | 赤 黄褐色 | 10YR 5/6 | 砂質シルト | |
| 7 | 黄 色 | 10YR 5/6 | M.土質シルト | (珪藻) |

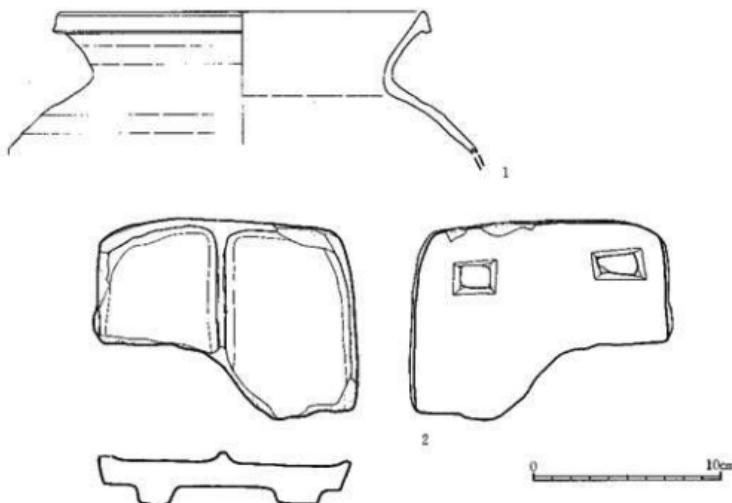
図16 10号住居跡



| 圖・番 | 種別 | 器種 | 部位 | 外 表 調 整 | 内 表 調 整 | 口 深 | 底 径 | 高 度 | 分 量 | 指 考 |
|------|-------|----|-----|-------------------|------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 17-1 | 土師器 | 环 | 堆 土 | ロクロ調整・底部-側板系切り | ヘラミガキ・黑色處理 | 131 | 66 | 38 | b | |
| -2 | 土師器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整・底部-ヘラケズリ? | ヘラミガキ・黑色處理 | 138 | 64 | 45 | c | |
| -3 | 土 師 器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整・底部-側板系切り | ヘラミガキ・黑色處理 | 148 | 65 | 45 | c | |
| -4 | 土 師 器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整・底部下端-底部-側板系 | ヘラミガキ・黑色處理 | 143 | 63 | 40 | b | |
| -5 | 土 師 器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整・底部-側板系切り | ヘラミガキ・黑色處理 | 129 | 49 | 51 | a | |
| -6 | 土 師 器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整・底部-側板系切り | ヘラミガキ・黑色處理 | — | 36 | — | — | |
| -7 | 土 師 器 | 盤 | 堆 土 | ロクロ調整・タタキ目-側部-ヘタ | ロクロ調整・ナザ | 243 | — | — | a | |
| -8 | 須恵器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整・底部-側板系切り | ロクロ調空 | 157 | 50 | 45 | b | |
| -9 | 須恵器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整 | ロクロ調理 | 166 | — | — | — | |
| -10 | 須恵器 | 环 | 埋 土 | ロクロ調整・底部-側板系切り | ロクロ調整 | — | 71 | — | — | |

図17 10号住居跡出土土器 I

(単位:mm)



| オ・番 | 種別 | 器種 | 層位 | 外観測定 | 内観測定 | 口径 | 底径 | 高さ | 分類 | 備考 |
|------|----------|-----|-----------|--|------|----|----|----|----|----|
| 19-1 | 須志型 壺 | 椎土 | ロフロ測定 | ヨクリ測定 | 30.0 | | | | | |
| -2 | 壺 | 二面鏡 | 想上 が正体 | 欠損部、中央部に縫がみられ二面鏡と考えられる。裏面には縫が二つ残存(取付)。裏面はケズリ | | | | | | |

図18 10号住居跡出土土器・壺II

(単位: mm)

11号住居跡

調査区Ⅲ区、D-19グリッドを中心に確認された。

平面形は削平が著しく不明であるが、住居東南部と西辺の一部が残存しており、遺存状況から方形を呈するものと考えられる。規模は不明であるが、残在部分から一辺間約3.4mを計ることが可能である。西辺の軸方向はN-1°-Eである。

堆積土は3層確認された。褐色系のシルト層である。

壁は南東部隅と西辺の一部の確認である。壁高は西辺で5~12cm程で南東部で8cm程を計る。ほぼ急角度で立ち上がっている。

床面は削平を受け東壁と西壁にはさまれた部分のみの残存である。ほぼ平坦で地山を床としている。周溝・柱穴は確認されなかった。

住居東南部においてカマドと貯蔵穴状ピットを確認している。カマドは燃焼部のみの確認で煙道部については不明である。地山を削り出して構築されており、わずかに両袖がみられる。底面は焚口部から奥壁に向けて下方に傾斜をみせ壁で急な立ち上がりをみせる。規模は袖部内側で60cmを計り、焼土と炭化物の範囲は90×60cm程を計る。貯蔵穴状ピットはカマド東側に位

置しており、東側と南側は住居壁となっている。平面形は東西に長い不整形で底面に近づくにつれて長円形を呈する。規模は長軸約140cm・短軸約80cmを計る。深さは30cm程である。

遺物はカマド内より土師器壺・甕、赤焼土器壺、丸瓦が出土しており、貯蔵穴状ピットからも土師器壺が出土している。

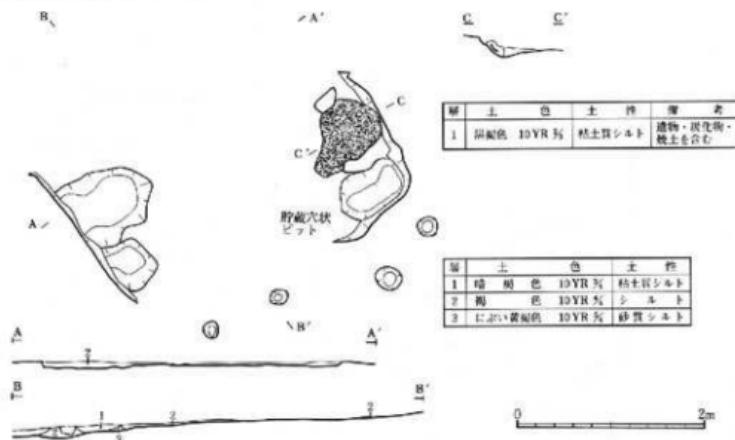
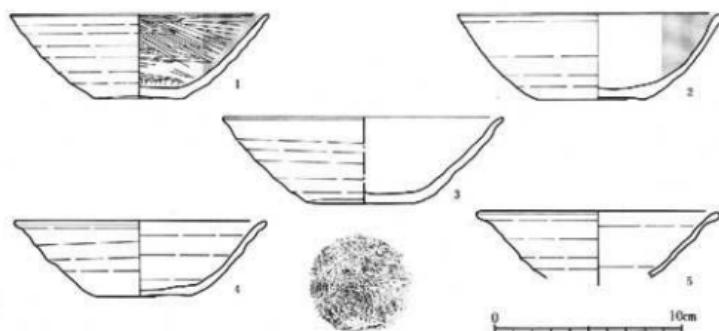


図19 11号住居跡



| 図・番 | 種別 | 器種 | 解説 | 外表面調査 | 内表面調査 | 11号 | 底径 | 高さ | 分類 | 標 |
|------|------|----|-----|----------------|------------|------|-----|----|----|---|
| 20-1 | 土師器 | 甕 | 貯藏穴 | ロクロ調査・底部→側面斜切り | ヘラシガキ・加色處理 | 137 | 48 | 65 | b | |
| -2 | 土師器 | 甕 | カマド | ロクロ調査・底部→側面斜切り | (摩耗) 加色處理 | 140 | 55 | 65 | c | |
| -3 | 赤焼土器 | 甕 | カマド | ロクロ調査・底部→側面斜切り | ロクロ調査 | 1490 | 589 | 45 | b | |
| -4 | 赤焼土器 | 甕 | カマド | ロクロ調査・底部→側面斜切り | ロクロ調査 | 134 | 51 | 41 | b | |
| -5 | 赤焼土器 | 甕 | カマド | ロクロ調査 | ロクロ調査 | 130 | — | — | b? | |

図20 11号住居跡出土土器 I

(単位:mm)



| 底・高 | 横・幅 | 器種 | 質地 | 外・内・底 | 調査 | 口径 | 底径 | 壁高 | 分厚 | 備考 |
|----------------------|--------|-----------------|-------------|----------------|----|-----|----|-----|----|----|
| 21-1 土師器 21-2 土師器 | 変 底 | 變 カマド 的窓穴 | 埋土 ロクロ調整 | ロクロ調整 ロクロ調整 | | 235 | — | — | a | |
| | | | | | | 135 | 69 | 103 | b | |

図21 11号住居跡出土土器II

(単位: mm)

12号住居跡

調査区Ⅲ区、D-18グリッドで確認された。北側に傾斜をみる地点にある。

平面形は南辺から東西辺が北側へ向けて開き気味になっているが、遺存状態から方形を量すと想られる。規模は南辺で約3.4mを計り、南北軸で約3.4mを計る。西辺の軸方向はN-10°-Wである。4号掘立柱建物跡・33号土壙と重複関係にあり、前者に切られ後者を切っている。

堆積土はカマド部まで含めて16層確認した。褐色系のシルト層で構成されている。

壁は北側を除いて地山が壁となっている。南辺部の残りが一番よく壁高は25cm程度を計る。立ち上がりは全体的にゆるい。北側壁は断面観察時に確認されたものでⅢ区遺物包含層を壁面としている。

床面はやや凹凸がみられるがほぼ平坦面である。地山を床としている。周溝・柱穴は確認されなかった。

住居東辺部においてカマドを一基確認した。ほとんど残存しておらず炭化物・焼面の範囲からカマド燃焼部と推定した。煙道部は確認されなかった。カマド部底面はほぼ平坦で奥壁で急な立ち上がりをみせる。

遺物はカマド部・堆積土からの出土で土師器壊・甕・須恵器壊・甕・瓦がある。土師器壊の中には墨書きのみられるものがある。

床面においてピット(P.1・P.2)を二基確認している。ピット内よりロクロ不使用の器が出土している。住居堆積土からはロクロ使用・不使用の土器が混在しているが、カマド部よりはロクロ使用上器片が出でており住居とピットには時期差が認められる。住居南側堆積土には堆積状況に不整合とも考えられる層理面があり二時期の住居が存在していた可能性も考えられる。規模等は不明である。

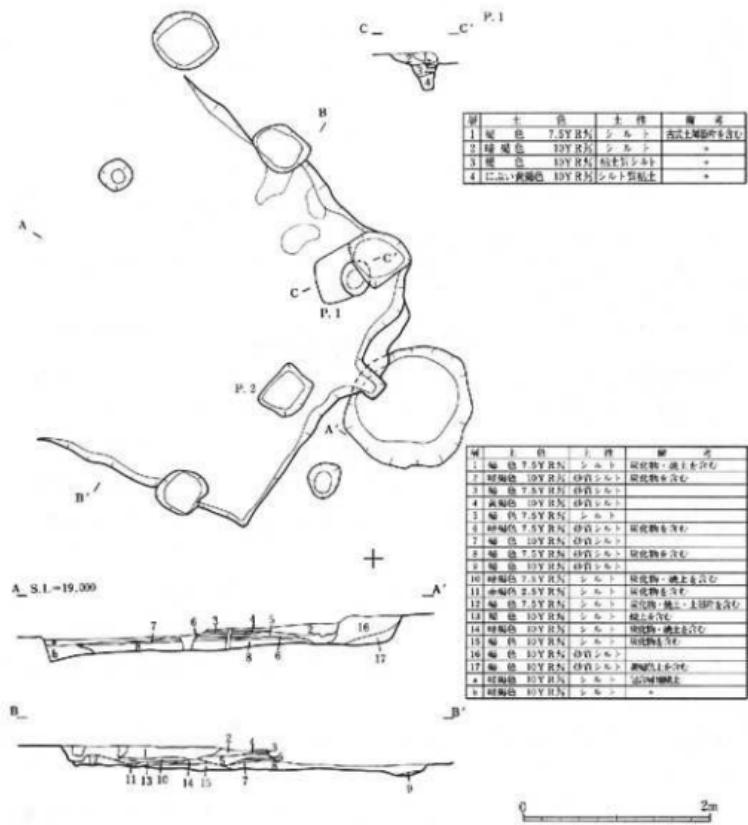
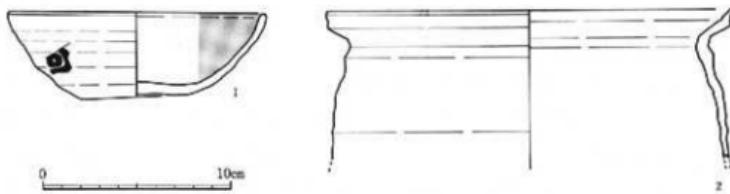
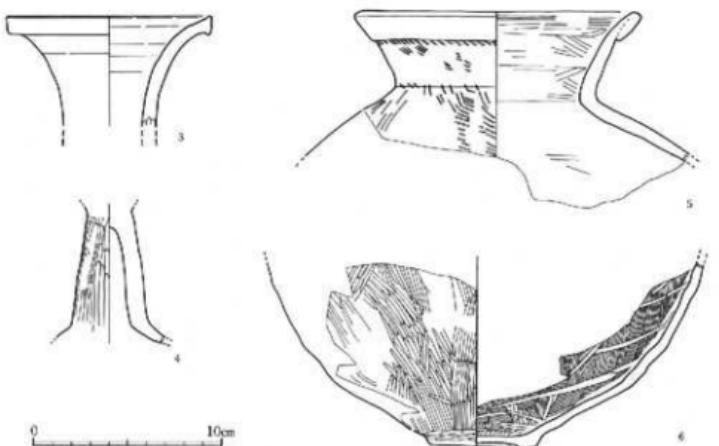


図22 12号住居跡



12号住居跡出土土器 I



| 固・番 | 神・別 | 器・種 | 層・位 | 外・面・圖・様 | 内・面・圖・様 | 口・徑 | 底・径 | 器・高 | 分・類 | 考 |
|------|-----|-----|-----|--------------|-----------|-----|-----|-----|------|------|
| 23-1 | 土師器 | 16 | 理・土 | ロクロ調整 | (縮成) 黑色均理 | 138 | 56 | 45 | c | |
| -2 | 土師器 | 實 | 理・土 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 216 | — | — | a | |
| -3 | 土師器 | 表 | 理・土 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 199 | — | — | | |
| -4 | 土師器 | 高・坪 | 理・土 | ヘラミガキ | 不明 | — | — | — | b | |
| -5 | 土師器 | 實 | 理・土 | ハク目・浅いヘラミガキ手 | ハク目 | 151 | — | — | | 複合口縁 |
| -6 | 土師器 | 表 | Pit | ヘラミガキ | ナギ・ミガキ | — | 57 | — | pH.1 | |

図23 12号住居跡出土土器 I・II

(単位:cm)

14号住居跡

調査区V区17トレンチ、K・L-17グリッドで確認された。北側へ傾斜がみられ、住居北壁部は遺存しない。

平面形は住居北側部が尖なわれているが遺存状況から方形を呈すると考えられる。規模は南北で約3.1mを計り、東辺と西辺はそれぞれ約2.7m・2.8mまで計れた。西辺の軸方向はN-8°-Eである。1号掘立柱建物跡と重複関係にあり切られている。プラン全体に灰白色の火山灰が検出された。

堆積土はカマド部まで含めて6層確認されている。暗褐色系のシルト層で構成されており、全体に細礫が含まれている。灰白色の火山灰は1層目にあたる。

壁は急な立ち上がりをみせる。壁高は10~20cm程の残存である。溝溝は確認されなかった。

床面は全体に平坦で、かすかに北側へ傾斜をみる。地山を床としている。柱穴は確認されなかった。

住居東壁部においてカマドと考えられる施設を1基確認した。壁直下において40×50cm程の円形を呈する赤褐色土が残存していた。袖部等は遺存していないが底面は壁に向かって皿状に立ち上っている。赤褐色土上面において瓦が出土している。

遺物には土師器壊、赤焼土器、平瓦がある。瓦を除いて全て堆積土中の出土で、ほとんどが細片となっている。

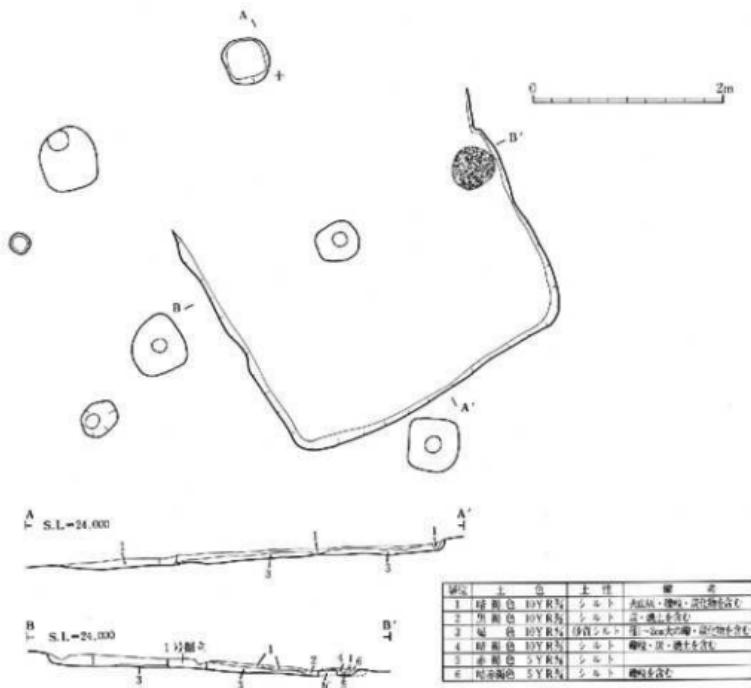


図24 14号住居跡



| 固・番 | 種 別 | 基 標 | 厚 さ | 外 表 面 様 | 内 表 面 様 | 口 径 | 底 径 | 高 度 | 分類 | 考 |
|------|------|-----|-----|-----------------|---------|-----|-----|-----|----|---|
| 25-1 | 赤焼土器 | 坪 | 厚 土 | コフロ調整・底部・口縁赤色切り | コフロ調整 | — | 55 | — | | |

図25 14号住居跡出土土器

(単位: mm)

(2) 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡（以下、建物跡）は5棟確認されている。I区の台地上に1棟、V区の台地東側周縁部に1棟、III区の台地北側周縁部に3棟である。ほとんどの建物跡が傾斜面に位置しており、建物跡間の規則性のみられるものもある。

1号建物跡

調査区V区17トレンチ、K-17グリッドを中心に確認された。当箇所は北側へ傾斜をみる地点で北側へ厚く堆積土が覆っている。確認面は北側で凝灰岩の岩盤（地山）であるが、南側は堆積土9層（灰白色の火山灰を含む褐色土層）上面となっている。柱穴の北側部と南側部での

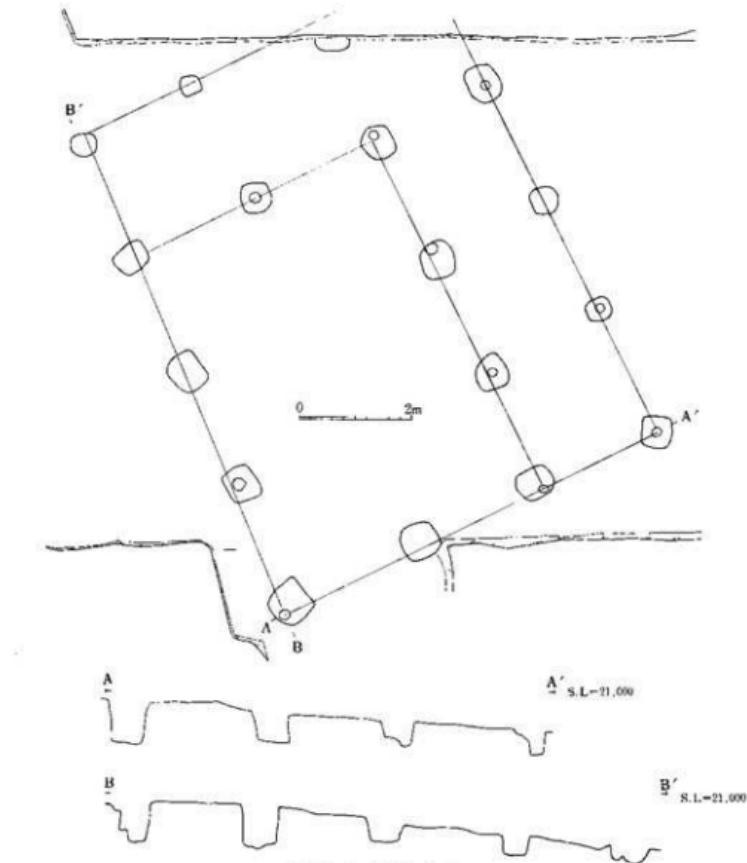


図26 1号建物跡

標高差は1m程ある。14号住居跡と重複関係にあり切っている。

全ての柱穴は確認されなかったが、桁行4間・梁行3間の北側と東側に間仕切りまたは扉をもつ南北棟の建物跡である。建物方向は桁東側でN-14°-Eである。

柱穴掘り方は方形を基調としており、径35~70cmとさまざまである。柱痕跡は10個確認され、径15~22cm程の円形を呈する。深さは北側妻部分で70cm程を計るものがある。柱間寸法は桁西側で北から670(3間分)+245cmで総長915cmを計り、梁南妻で西から510(2間分)+225cmで総長735cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器片・須恵器片・赤焼土器片が出土している。

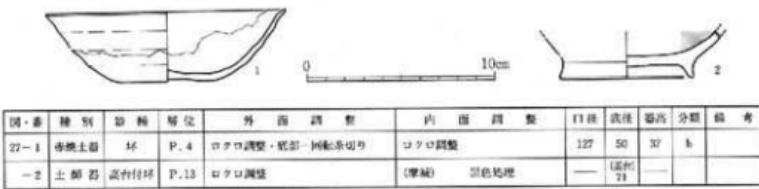


図27 11号建物跡出土土器

(単位:mm)

2号建物跡

調査区Ⅲ区、E-18グリッドを中心に確認された。北西側へ傾斜をみる位置に所在しており、柱穴北側部と南側部では40cm程の標高差がある。

梁南妻中央部の柱穴が検出されなかったが、桁行2間・梁行2間の南北棟の建物跡である。建物方向は桁東側でN-5°-Eである。

柱穴掘り方は方形を基調とするが、ややくずれ気味の円形を呈している。径40~70cm程のものである。柱痕跡は6個確認され、径10~15cmの円形である。遺存状態の良好なもので深さ30cmを計る。柱間寸法は桁東側で北から198+182cmで総長380cmを計り、梁北妻で西から174+170cmで総長344cmを計る。土師器片が若干出土している。

3号建物跡

調査区Ⅲ区、D-20グリッドを中心に確認された。北西側へ傾斜をみる地点にあたり、柱穴北側部と南側部では60cm程の標高差がみられる。

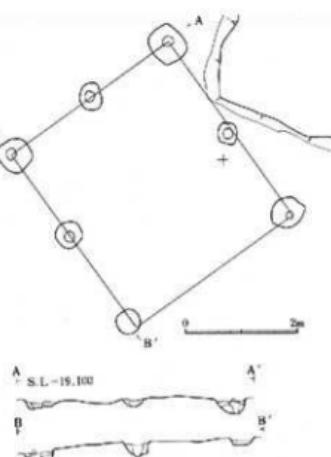


図28 2号建物跡

梁北妻中央部の柱穴が検出されなかつたが、桁行3間・梁行2間の南北棟の建物跡である。建物方向は桁東側でN-5°-Eである。

柱穴掘り方は方形を基調とするが、不整方形を呈し円形気味である。径35~55cm程で小形のものである。柱痕跡は全てにみられ、径10~20cmの円形である。深さは遺存状態の良好なもので40cmを計る。柱間寸法は桁東側で北から150+130+150cmで総長430cm、西側では北から148+140+144cmで総長432cm、梁南妻で西から182+187cmで総長369cm、北妻では総長376cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器片が出上している。

4号建物跡

調査区Ⅲ区、D-18グリッドを中心に確認された。北側部を中心として削平を受けており、東側南北列で2間、南側東西列で3間を確認したのみで全体的規模は不明である。建物方向はN-2°~7°-Wの範囲と考えられる。12号住居跡と重複関係にあり切っている。

柱穴掘り方は方形を基調としている。最大のもので63×62cm、最小のもので48×45cmを計る。柱痕跡は確認されなかつた。柱穴中心部間の寸法は東側南北列で北から155cm+155cmを計り、南側東西列は西より145+155+180cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器の細片が出上している。

5号建物跡

調査区Ⅰ区、J-5・6グリッドで確認された。

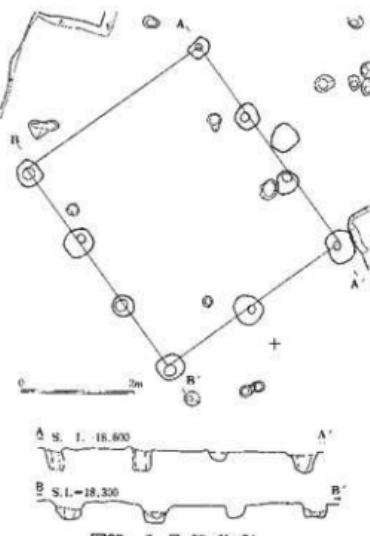


図29 3号建物跡

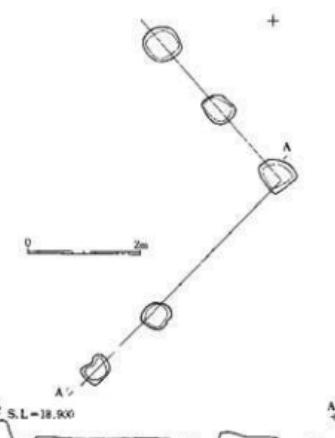


図30 4号建物跡

桁行2間・梁行1間の南北棟の建物跡である。建物方向は桁西側でN-19°-Wである。

柱穴掘り方は円形を基調としている。径40cm程の小形のものである。柱痕跡は2個確認され

径10~15cmの円形で深さ25cm程を計る。柱間寸法は桁西側の北半のみが計測され193cmを計る。柱穴中心部間の寸法でみると、桁西側で193+162cm、梁北妻で368cmを計る。

遺物は柱穴埋土より土師器壺が出土している。



| 測定・書類 | 種別 | 形状 | 部位 | 外深調査 | 内面調査 | 口径 | 底径 | 高さ | 分類 | 備考 |
|-------|-----|----|----|------|------|-----|-----|----|----|------|
| 33-1 | 土師器 | 壺 | 柱穴 | 不明 | 不明 | 180 | 180 | 一 | 一 | 複合二種 |

図31 5号建物跡出土土器 (単位:mm)

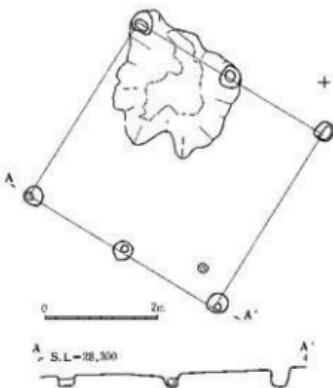


図32 5号建物跡

(3) 方形周溝造構

調査区T区、J・K-11・12グリッドで確認された。四方に巡ぐる溝部と溝内側の台状部と台状部内の土壤で構成されている。

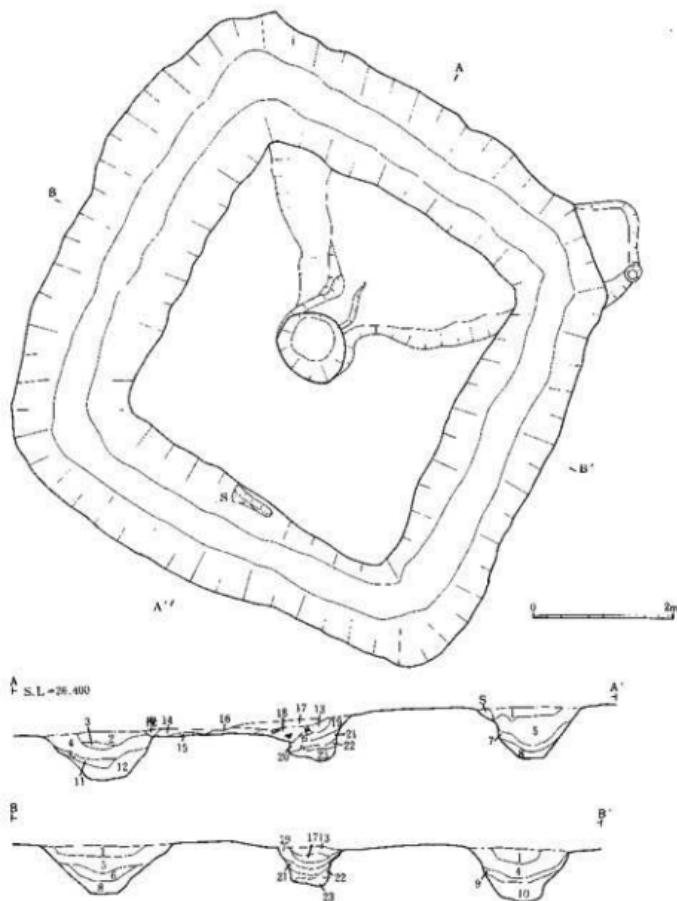
平面形は全体として隅丸方形を呈する。長軸は東-西ラインで約7.65m、短軸は南-北ラインで約7.5mを計る。溝東辺の方向はN-20°-Eである。

溝部の各辺の規模は、北辺約7.7m・南辺約7.2m・東辺約7.0m・西辺約7.0mを計る。幅は1.1~1.8mで、深さは50~70cmを計る。断面形は逆台形を呈する。堆積土は12層に分かれ、上層部は黒褐色系の粘土質シルト層、下層部は褐色系の砂質シルト層である。レンズ状堆積を呈している。溝底面はほぼ平坦であるが、西側から東側へ傾斜がみられ北高差は約40cmを計る。

台状部の平面も隅丸方形を呈しており、長軸(東-西ライン)で約4.7m・短軸(北-南ライン)で約4.3mを計る。台状部面積は約20.2m²を有する。台状部面は平坦であるが、土壤東側のみ扇形の凹面となっている。

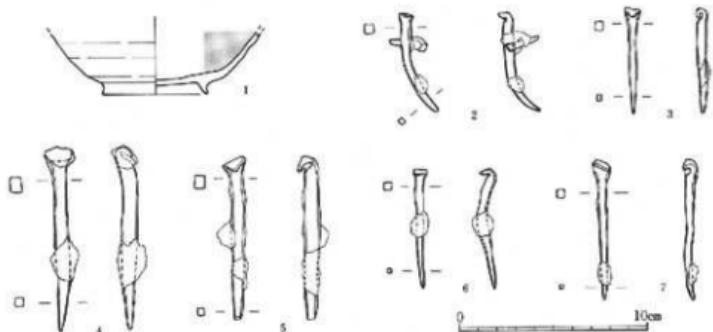
土壤は台状部中央に位置している。平面形は径90cm程の不整円形を呈する。断面形は逆台形を呈するが土壤東側は凹面のため30cm程の段差がみられる。底面は若干北側に傾斜をみるとほぼ平坦となっている。深さは最大で65cmを計る。堆積土は周溝部接点までで11層確認したが、周溝部との前後関係は明らかに出来なかった。

遺物は周溝部のみの出上で全て堆積土中からのものである。種類として土師器、須恵器、瓦、鉄釘があり、多くのものは細片となって出土している。



| 列 | 二 段 | 三 段 | 四 段 | 五 段 | 六 段 | 七 段 | 八 段 |
|-----|---------------|-----------------------|-------------|-------------|------------------|-----------------|-----------|
| 1. | 砂質地 10YR 5/2 | 砂質砂利層 | | | 13. 岩場地 0/0R 5/2 | 砂土質シルト 1/0R 砂質地 | |
| 2. | 砂質地 10YR 5/2 | 砂土質シルト 1/0R 地表 | | | 14. 砂質地 0/0R 5/2 | 砂土質シルト 1/0R | |
| 3. | 砂 色 10YR 5/2 | 砂土質シルト 1/0R | | | 15. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂質の含水粘土 1/0R | |
| 4. | 砂質地 10YR 5/2 | 砂土質シルト 1/0R 7.5YR 2/2 | 7.5YR 2/2 | 7.5YR 2/2 | 16. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂質地 1/0R | 4m弱の下部を含む |
| 5. | 砂 色 12YR 4/2 | 砂質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 17. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂質地 1/0R | 4m弱の下部を含む |
| 6. | 砂質地 10YR 5/2 | 砂土質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 18. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂質シルト 1/0R | 小量の下部を含む |
| 7. | 砂 色 7.5YR 5/2 | 砂質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 19. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂質シルト 1/0R | 無 |
| 8. | 砂 色 10YR 5/2 | 砂質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 20. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂質シルト 1/0R | 無 |
| 9. | 無機地 10YR 5/2 | 砂質シルト 1/0R | | | 21. 砂質地 10YR 5/2 | シルトと有機物 | 無 |
| 10. | 無機地 10YR 5/2 | 砂質シルト 1/0R | | | 22. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂土質シルト 1/0R | 無 |
| 11. | 砂 色 10YR 5/2 | 砂質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 砂土質シルト 1/0R | 23. 砂 色 0/0R 5/2 | 砂 | 多处の縫を含む |
| 12. | 無機地 10YR 5/2 | 砂質シルト 1/0R | | | | | |

図33 方形周溝造構



| 図・番 | 種別 | 器種 | 断面 | 外面調査 | 内面調査 | 口径 | 底径 | 高さ | 分類 | 備考 |
|------|-----|------|----|---------------------------------|-----------|----|------|----|----|----|
| 34-1 | 土師器 | 高台付环 | 埋土 | クロロ調整 | (津波) 黑色處理 | — | (深角) | — | — | — |
| 34-2 | 鉄製品 | 釘 | 根土 | 長さ60~95mm程、断面は方形、釘の底部は黒ぬきを添している | — | — | — | — | — | — |

図34 方形周溝邊構出土土器・鉄釘

(単位:mm)

(4) 土壙

調査区全体で計65基の土壙が確認された。土壙底面に焼け面がみられるものや一括遺物を出土したものなどがあるが、全体的に出土遺物も少なく、性格が判明されたものはない。便宜的に形状から円形・梢円形・方形・不整形に分けた。検出状況・出土遺物に特徴の認められるものについて記述する。

2号土壙：J・K-10グリッドで確認した。平面形は梢円形を呈する。規模は長軸170cm、短軸100cm、深さ38cmを計る。断面は大きくU字形を呈するが、底面と壁面の境が鋭角になっている。底面は隅丸の長方形を呈する。堆積土は3層確認され、褐色のシルト層である。上層で灰白色火山灰が検出されている。下層では炭化物・焼土がみられ、底面は全面に焼け面がみられた。

6号土壙：K-5グリッドで確認された。平面形はやや歪んだ円形を呈する。径78cm、深さ35cmを計る。断面は壁中段がせり出しており、フラスコ形を呈する。堆積土は4層確認され、褐色系のシルト層である。遺物として弥生土器片・炭化物が出土している。

55号土壙：F-20・21グリッドで確認した。平面形は円形と方形の合体形をしており不整形を呈している。規模は長軸で178cm、深さ20cmを計る。円形部と方形部では底面で段が形成されている。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は4層確認され、暗褐色系の粘土質シルト層である。堆積土・底面より土師器坏・甕、須恵器片が出土している。

58号土壙：F-20・21グリッドで確認した。10号住居跡と重複関係にあり切られている。平

面形は円形を呈する。規模は径 280 cm、深さ30cm程を計る。壁はゆるい立ち上がりをみせ、北壁部に接して 120 × 75cm 程の方形の落ち込みがみられる。堆積土は 5 層確認され褐色系のシルト層である。焼土・炭化物粒が全ての層にみられる。出土遺物には土師器・瓦片がある。

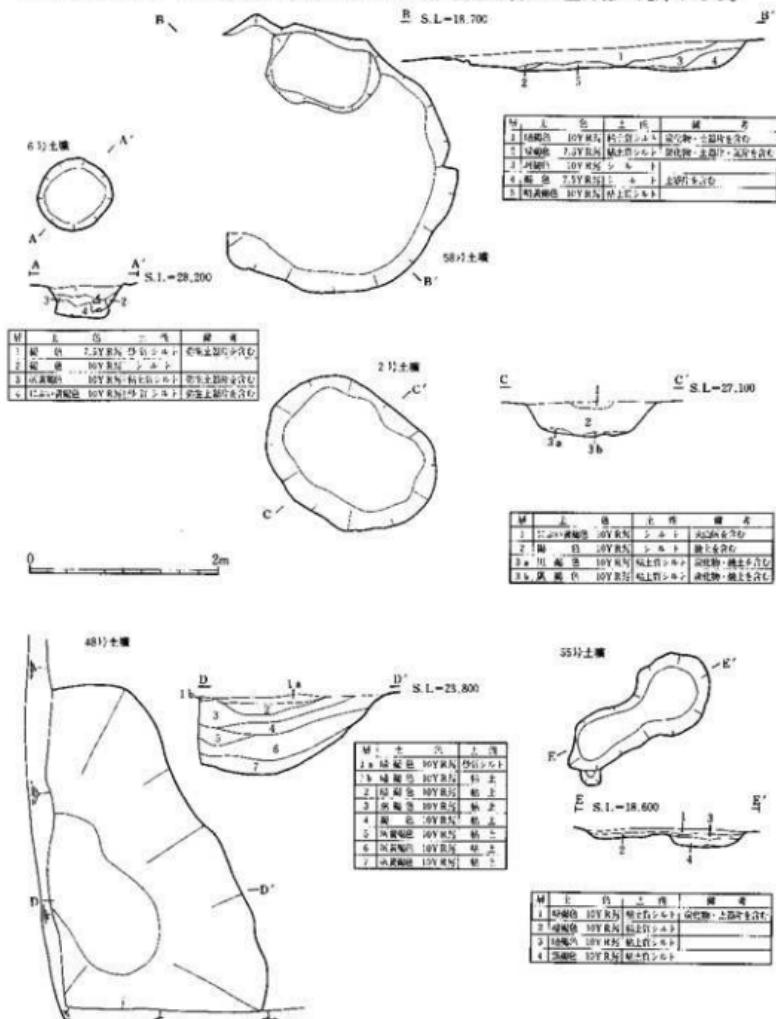


図35 各土壤平面図

円形を呈する土壤

| 地区 | 規 模 | 備 考 | 地区 | 規 模 | 備 考 |
|-----|------|--------|-----|------|--------|
| 4号 | J-11 | 160×14 | 33号 | E-18 | 130×45 |
| 5号 | L-12 | 130×19 | 37号 | R-6 | 100×11 |
| 6号 | K-5 | 78×35 | 44号 | R-7 | 80×30 |
| 8号 | K-6 | 80×32 | 47号 | P-10 | 140×35 |
| 9号 | H-7 | 70×12 | 53号 | O-16 | 85×52 |
| 10号 | N-7 | 170×30 | 56号 | I-3 | — |
| 12号 | M-10 | 88×25 | 58号 | F-20 | 280×30 |
| 29号 | H-17 | 80×14 | 63号 | I-7 | 76×20 |
| | | | | | 赤土・炭化物 |

楕円形を呈する土壤

| 地区 | 規 模 | 備 考 | 地区 | 規 模 | 備 考 |
|-----|------|------------|-----|------|------------|
| 1号 | J-10 | 350×167×12 | 30号 | H-17 | 90×60×28 |
| 2号 | J-10 | 170×100×38 | 34号 | F-19 | — |
| 15号 | J-9 | 114×75×6 | 35号 | Q-5 | — |
| 16号 | K-10 | 70×30×15 | 36号 | R-5 | 100×50×20 |
| 17号 | J-10 | 205×75×30 | 45号 | P-9 | 380×100×26 |
| 19号 | L-13 | 185×50×35 | 46号 | Q-9 | 210×100×29 |
| 20号 | K-13 | 105×70×20 | 48号 | Q-12 | — × 85 |
| 21号 | K-13 | 140×75×25 | 49号 | O-12 | — |
| 23号 | J-14 | — | 65号 | I-7 | 98×60×18 |
| 28号 | J-14 | 90×70×20 | | | |

方形を呈する土壤

| 地区 | 規 模 | 備 考 | 地区 | 規 模 | 備 考 |
|-----|------|-----------|-----|------|----------|
| 3号 | K-10 | 150×60×24 | 31号 | D-17 | — |
| 7号 | K-7 | 90×70×25 | 50号 | O-12 | — |
| 11号 | N-10 | 80×65×10 | 54号 | J-18 | 70×60×20 |
| 13号 | I-4 | 122×85×14 | 59号 | I-18 | 炭化物・焼土 |
| 22号 | K-14 | — | 60号 | H-7 | — |

不整形を呈する土壤

| 地 区 | 規 模 | 備 考 | 地 区 | 規 模 | 備 考 |
|-----|------|------------|-----|------|------------|
| 14号 | J-6 | 220×220×35 | 41号 | Q-7 | — |
| 18号 | I-11 | 130×90×22 | 42号 | Q-7 | 180×80×21 |
| 24号 | I-14 | 280×60×40 | 43号 | R-7 | 130×60×20 |
| 25号 | J-9 | 170×110×10 | 51号 | P-12 | 90×40×20 |
| 26号 | I-14 | — × 11 | 52号 | P-12 | 250×115×22 |
| 27号 | I-14 | 290×100×35 | 53号 | F-20 | 180×50×20 |
| 32号 | D-18 | 100×60×33 | 57号 | E-19 | 140×70×34 |
| 38号 | P-7 | 280×60×12 | 61号 | I-4 | 280×270×20 |
| 39号 | P-7 | 200×60×19 | 62号 | H-4 | 450×230×25 |
| 40号 | Q-7 | — | 64号 | L-7 | 80×55×24 |

表2 発見土壤一覧

(単位: cm)

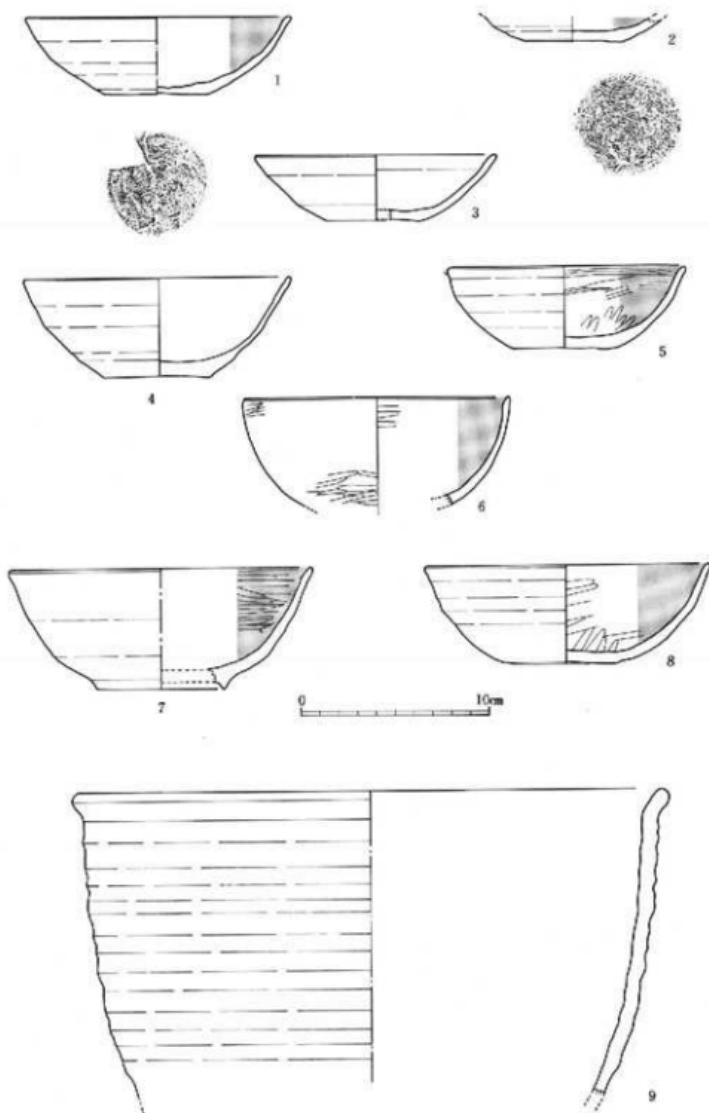
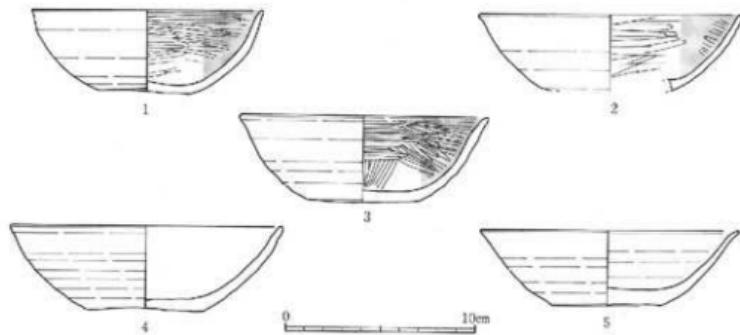


図36 48号・55号土壤出土土器 I



| 図・番 | 種 | 地 | 地 | 層 | 外曲 | 内面 | 調整 | 口径 | 高さ | 幅高 | 分類 | 備考 | |
|------|------|---|---|------|-------|----------------|------------|-------|------------|----|-----|-------|-------|
| 36-1 | 土 | 耕 | 苔 | 坪 | 堆上 | ロクロ調整・底部一回転手切り | (草被) | 黒色処理 | (141) | 55 | 141 | c | 48号土壤 |
| -2 | 土 | 耕 | 苔 | 坪 | 堆上 | ロクロ調整・底部一回転手切り | (草被) | 黒色処理 | — | 52 | — | — | 48号土壤 |
| -3 | 赤粘土苔 | 苔 | 坪 | 堆 | 堆上 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | — | 128 | 49 | 25 | b | 48号土壤 |
| -4 | 赤粘土苔 | 苔 | 坪 | 堆 | 堆上 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 141 | 38 | 53 | e | 48号土壤 | |
| -5 | 土 | 耕 | 苔 | 坪 | 堆 | ロクロ調整 | ヘラミガキ・黑色処理 | 125 | 56 | 63 | a | 55号土壤 | |
| -6 | 土 | 耕 | 苔 | 坪 | 堆 | ロクロ調整・ハラミガキ | ヘラミガキ・黑色処理 | 141 | — | — | — | 55号土壤 | |
| -7 | 土 | 耕 | 苔 | 高台付坪 | 堆上 | ロクロ調整 | ヘラミガキ・黒色処理 | (162) | 底付 (66) | 54 | — | 55号土壤 | |
| -8 | 土 | 耕 | 苔 | 高台付坪 | 堆上 | ロクロ調整 | ヘラミガキ・黑色処理 | 151 | 57 | 53 | c | 55号土壤 | |
| -9 | 土 | 耕 | 苔 | 苔 | 泥炭 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 315 | — | — | — | 55号土壤 | |
| 37-1 | 土 | 耕 | 苔 | 坪 | 堆上 | ロクロ調整 | ヘラミガキ・黑色処理 | 122 | 48 | 43 | a | 55号土壤 | |
| -2 | 土 | 耕 | 苔 | 坪 | 堆上 | ロクロ調整 | ヘラミガキ・黑色処理 | 140 | — | — | — | 55号土壤 | |
| -3 | 土 | 耕 | 苔 | 坪 | 堆上 | ロクロ調整 | ヘラミガキ・黑色処理 | 131 | 60 | 66 | a | 58号土壤 | |
| -4 | 赤粘土苔 | 苔 | 坪 | 堆上 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 144 | 63 | 44 | e | 58号土壤 | |
| -5 | 赤粘土苔 | 苔 | 坪 | 堆上 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 136 | 59 | 40 | b | 58号土壤 | |

図37 55号・58号土壤出土土器II

(単位: mm)

(5) 溝跡・溝状遺構

調査区全体で合計22条の溝跡・溝状遺構を確認した。これらの中で溝跡は8条、溝状遺構は14条をかぞえる。

溝跡としたものは幅等がある程度一定しているものにした。全体的に規模も小さく、確認長の短かいものが多い。溝跡間の関連はみられない。遺物の出土も少なく、住居跡・建物跡との関連性もみられなく時期・性格は不明となっている。

溝状遺構は上記以外のもので、平面形・断面形は不整形を呈している。他の遺構との関連はみられない。出土遺物は全体的に少ないが、綠釉陶器が出土する遺構もある。

溝 路

| | 地 区 | 長 さ | 幅 | 深 さ | 断 面 | 備 考 |
|------|------|-----|----|-----|-----|-----|
| 9 号 | E-17 | 300 | 50 | 10 | 皿 | |
| 11 号 | K-4 | 800 | 26 | 6 | U 字 | |
| 15 号 | P-3 | 900 | 40 | 6 | 皿 | |
| 16 号 | O-16 | 630 | 48 | 7 | U 字 | |
| 17 号 | O-14 | 600 | 36 | 8 | U 字 | |
| 18 号 | P-14 | 80 | 40 | 8 | U 字 | |
| 19 号 | P-14 | 500 | 68 | 8 | U 字 | |
| 20 号 | P-14 | 400 | 56 | 17 | U 字 | |

溝状造構

| | 地 区 | 長 さ | 幅 | 深 さ | 断 面 | 備 考 |
|------|------|-------|-----|-----|-----|-----------|
| 1 号 | M-7 | 1,320 | 244 | 30 | 皿 | |
| 2 号 | J-6 | 260 | 93 | 12 | 逆台形 | |
| 3 号 | I-8 | 400 | 84 | 35 | 皿 | |
| 4 号 | L-12 | 1,800 | 120 | 30 | 逆台形 | |
| 5 号 | J-7 | 900 | 170 | 7 | 皿 | |
| 6 号 | J-14 | 530 | 96 | 40 | 逆台形 | |
| 7 号 | J-11 | 200 | 34 | 10 | U 字 | |
| 8 号 | C-18 | 430 | 84 | 12 | 皿 | |
| 10 号 | F-21 | 530 | 75 | 20 | 皿 | |
| 12 号 | I-6 | 500 | 106 | 30 | 皿 | |
| 13 号 | I-9 | 200 | 30 | 16 | U 字 | |
| 14 号 | I-10 | 200 | 40 | 23 | U 字 | |
| 21 号 | M-18 | 700 | 400 | 120 | U 字 | 灰白色火山灰を含む |
| 22 号 | M-11 | 660 | 90 | 8 | 皿 | |

表3 溝跡・溝状造構一覧

(単位:cm)

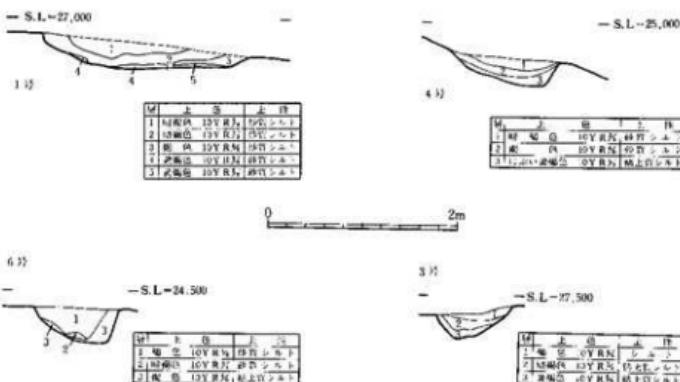


図38 溝跡・溝状造構断面図

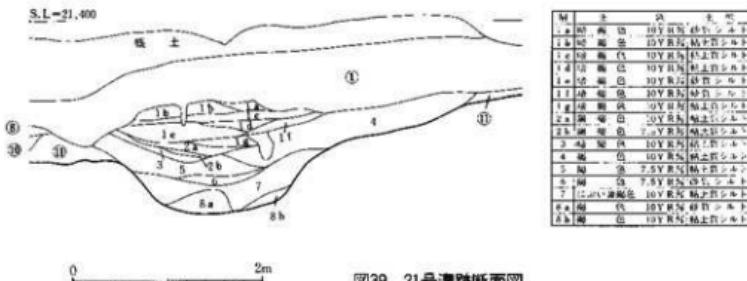
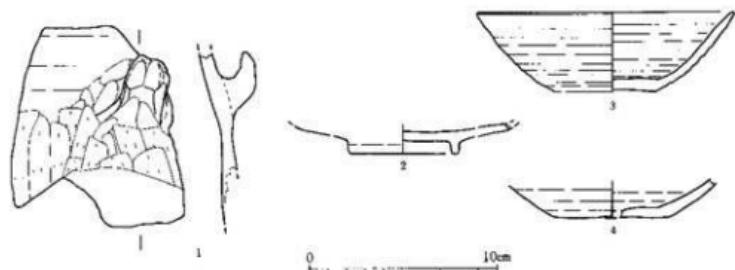


図39 21号溝跡断面図



| 四・番 | 種 别 | 器種 | 層位 | 外 壁 調 査 | 内 壁 調 査 | 口 部 調 査 | 器高 | 全 高 | 痕 跡 名 |
|------|------|----|-----|------------------|----------------|---------|-----|-----|-------|
| 40-1 | 土 壤 | 瓶? | 埋 土 | ロクロ調査、ナゲ・ナズリ | ロクロ調査 | — | — | — | 把手付 |
| -2 | 鉢形陶器 | 豆 | 埋 土 | ロクロ調査、縁系のオリーブ色の釉 | ロクロ調査、縁系のオリーブ色 | — | 5.9 | — | — |
| -3 | 直 瓶 | 瓶 | 埋 土 | ロクロ調査 | ロクロ調査 | 136 | 54 | 42 | c |
| -4 | 直 瓶形 | 瓶 | 埋 土 | ロクロ調査 | ロクロ調査 | — | 61 | — | — |

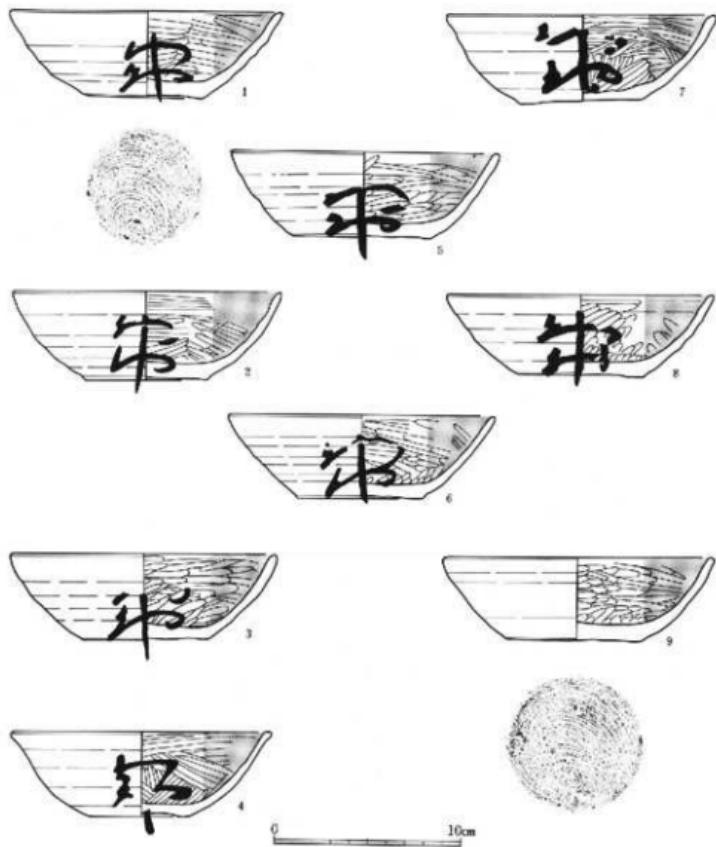
図40 21号溝跡出土土器・陶器

(単位: cm)

(4) ピット

調査区全体で大小 295 個のピットを検出している。小穴としてのピット間の組み合わせが確認されたものは 3 号・5 号掘立柱建物跡のみで、ほとんどのピットは時期・性格については不明となっている。これらの中で検出状況・出土遺物において特色のみられる P.232 について述べてみる。

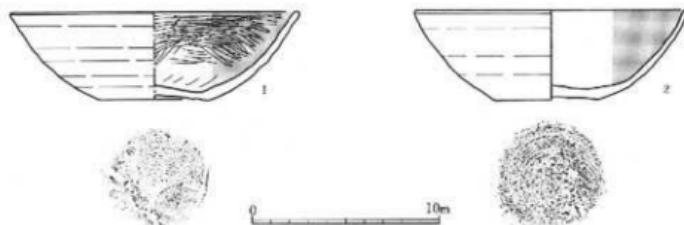
調査区 V 区の 7 トレンチ、R-7 グリッド地山面で確認された。規模は径 25cm・深さ 25cm 程の円形のものである。ピット確認時において埋土内で土師器壺を確認している。10 個体分の壺が出土しており、9 個体は完形品であった。また、そのうち 8 個体の壺の体部外面には「中」の墨書きがみられた。出土状況は完形品の壺が南東向きに横倒しの密着状態で出土している。残る 1 個体の壺は口縁部のみの残存で、完形品の壺の上面で確認されている。残存状況から蓋状に伏せてあったものとも考えられる。



| 図・番 | 種別 | 器種 | 層位 | 外 面 調 整 | 内 面 調 整 | 口 径 | 底 径 | 高 度 | 分 類 | 備 考 |
|------|-----|----|-----|----------------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 41-1 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 144 | 59 | 45 | e | 墨書 |
| -2 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 162 | 61 | 48 | e | 墨書 |
| -3 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 141 | 66 | 46 | e | 墨書 |
| -4 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 138 | 51 | 46 | e | 墨書 |
| -5 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 147 | 72 | 46 | e | 墨書 |
| -6 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 142 | 67 | 45 | e | 墨書 |
| -7 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 142 | 64 | 45 | e | 墨書 |
| -8 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 143 | 66 | 43 | e | 墨書 |
| -9 | 土師器 | 杯 | 埋 土 | ロクロ調整・底部一回転条切り | ロクロ調整 | 143 | 70 | 45 | e | |

図41 ピット232出土土器

(単位:mm)



| 区・番 | 種別 | 器種 | 層位 | 外観調査 | 内面調査 | 口径 | 底径 | 高さ | 分類 | 備考 |
|------|----|----|----|----------------|------------|-------|------|------|----|----|
| 42-1 | 土器 | 坪 | 埋土 | ロクロ調整・底部一回転余切り | ヘラミガケ・黒色処理 | (152) | (57) | (47) | e | |
| -2 | 土器 | 坪 | 埋土 | ロクロ調整・底部一回転余切り | (摩耗) 黒色処理 | 145 | 54 | 48 | e | |

図42 ピット134出土土器 (単位:mm)

(7) その他

a) 遺物包含層

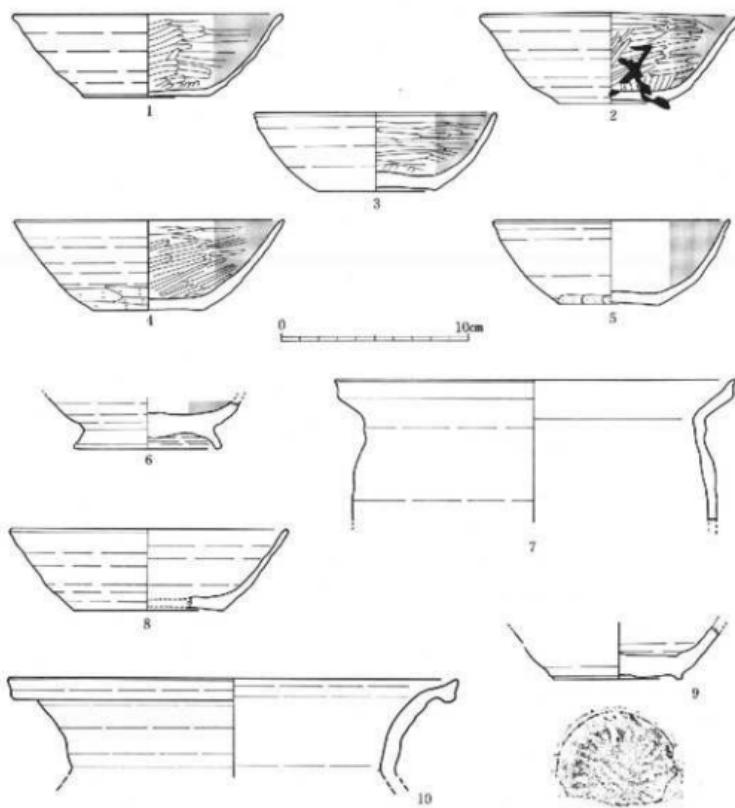
III区北側において確認された。調査区I区の台地部から続く傾斜面に位置しており、なだらかな傾斜をみせながら遺跡北西側に位置する沢へと向かっている。表土層を含めて地山面まで5枚の堆積層を確認している。大きくみて褐色土と暗褐色土が互層となる堆積状況を示している。3・4層から遺物が多く出土しており、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・瓦がみられる。各遺物が混在しており、層としての遺物のまとまりはみられない。

b) 道跡?

V区17号東側、14号住居跡と21号溝状遺構との間で検出した。17号東側は半大的礫層が地山となっており、地山表面は凹凸となっている。その礫面の中に幅120~140cm程で南北方向に延びる、地山面に較べれば礫表面が平坦となっている部分を確認した。これは礫面の状況から人為的なものと考えられ、部分的にみれば礫上面が平坦となるものや凹凸となるものがあり、踏みつけられてできたものではないかと考えるにいたった。礫に混じって須恵器片・軒平瓦・平瓦が出土している。部分的な確認であるため積極的な確認にはとぼしいが、道的な性格をもつものではないかと考えられる。他の遺構との関連は明らかに出来なかった。

c) 遺構外の出土遺物

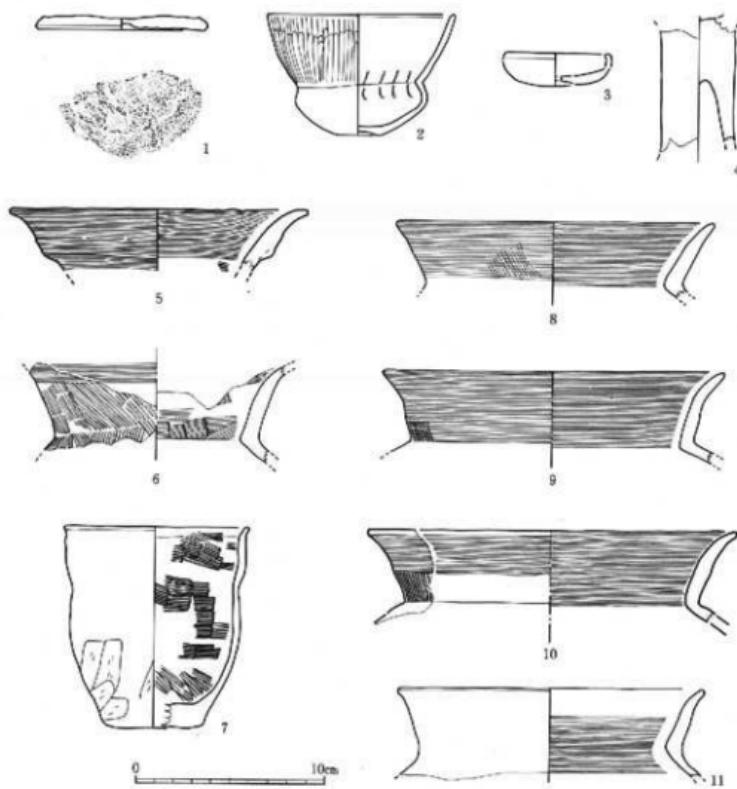
表採や耕作土中出土の資料である。種類としては縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器がある。図示可能なものについて以下掲載する。



| 器・番 | 種別 | 器種 | 層位 | 外 観 特徴 | 内 観 特徴 | 口径 | 底径 | 器高 | 分類 | 考 |
|------|-------|------|----|---------------------|------------|-----|---------|----|----|-----|
| 43-1 | 土 器 | 碗 | | ロクロ調整・底部一回絞糸切り | ヘラミガキ・黑色處理 | 143 | 66 | 45 | b | |
| -2 | 上 部 器 | 碗 | | ロクロ調整 | ヘラミガキ・黑色處理 | 138 | 56 | 49 | b | |
| -3 | 土 器 | 碗 | | ロクロ調整・底部一回絞糸切り | ヘラミガキ・黑色處理 | 129 | 63 | 42 | b | * |
| -4 | 土 器 | 碗 | | ロクロ調整・体底下端一回絞ヘリヤメリ | ヘラミガキ・黑色處理 | 143 | 59 | 48 | b | |
| -5 | 土 器 | 碗 | | ロクロ調整・体底部下端一回絞ヘリヤメリ | (焼付) 黒色處理 | 125 | 53 | 45 | c | |
| -6 | 土 器 | 高台付碗 | | ロクロ調整 | (焼付) 黑色處理 | — | 78 | — | | 付高台 |
| -7 | 土 器 | 甕 | | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 213 | — | — | a | |
| -8 | 頂 漢 器 | 甕 | | ロクロ調整・底部一回絞糸切り | ロクロ調整 | 148 | 79 | 44 | a | |
| -9 | 頂 漢 器 | 甕 | | ロクロ調整・底部一ナギツケ | ロクロ調整 | — | (焼付) 68 | — | | |
| -10 | 頂 漢 器 | 甕 | | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 239 | — | — | | |

図43 包含層出土土器 I

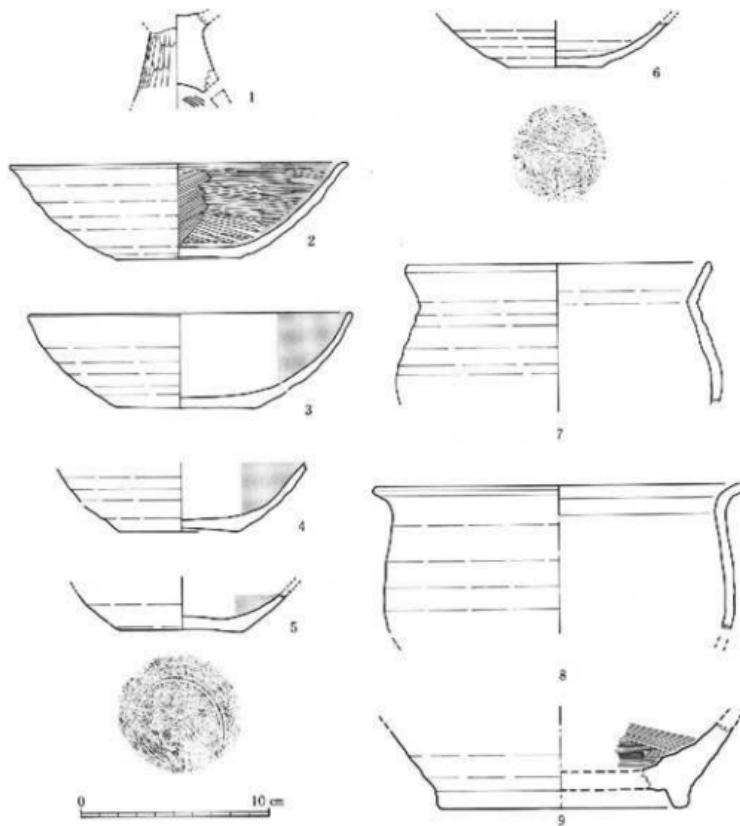
(単位: mm)



| 図-番 | 種別 | 器種 | 層位 | 外表面調査 | 内面調査 | 口径 | 底径 | 高さ | 分類 | 識者 |
|------|-----|------|------|-------------------------|----------|-------|----|-----|------|----|
| 44-1 | 土師器 | 碗? | | ロクロ調整・同縁手切り痕 | ロクロ調整 | 91 | — | 8 | | |
| -2 | 土師器 | 杯 | | 口縁部・ヘラミガキ・底部一帯面 (摩耗) | ヘラミガキ | 99 | 22 | 65 | 埋型 | |
| -3 | 土師器 | 手挽土器 | | (摩耗) | (摩耗) | 56 | 18 | 18 | | |
| -4 | 土師器 | 碗坪 | | (摩耗) | (摩耗) | — | — | — | | |
| -5 | 土師器 | 瓶 | | ヨコナデ | ハケ目・ヨコナデ | 158 | — | — | 複合口輪 | |
| -6 | 土師器 | 甕 | | ハケ目・ヨコナデ | ヘラナデ | — | — | — | | |
| -7 | 土師器 | 瓶 | (摩耗) | ヘラケズリ | ヘラナデ | 99 | 54 | 107 | | |
| -8 | 土師器 | 甕 | | ハケ目・ヨコナデ | ヨコナデ | 168 | — | — | | |
| -9 | 土師器 | 甕 | | ハケ目・ヨコナデ | ヨコナデ | (181) | — | — | | |
| -10 | 土師器 | 甕 | | ハケ目・ヨコナデ | ヨコナデ | (195) | — | — | | |
| -11 | 土師器 | 甕 | (摩耗) | ヨコナデ | ヨコナデ | 162 | — | — | | |

図44 包含層出土土器II

(単位: mm)



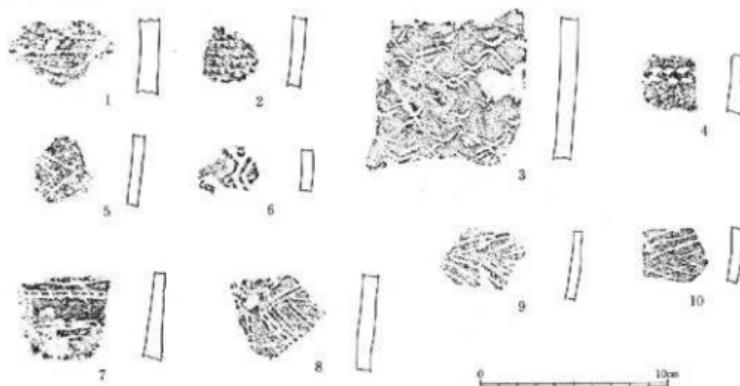
| 調査区 | 器種 | 層位 | 外観調整 | 内面調整 | 口径 | 底径 | 高さ | 分類 | 備考 |
|----------|----|-------|------------------|------------|-------|-----|----|----|------|
| 45-1 土師器 | 高杯 | 5トレス | ヘラリガキ | ハケ目 | — | — | — | a | 三乳有り |
| —2 土師器 | 杯 | 17トレス | ロクロ調整・底部一回絞ヘラケズリ | ヘラリガキ・墨色處理 | 178 | 65 | 31 | b | |
| —3 土師器 | 杯 | 表区 | ロクロ調整・底部一回絞ヘラケズリ | (摩耗) 黒色處理 | 171 | 74 | 31 | c | |
| —4 土師器 | 杯 | 表区 | ロクロ調整 | (摩耗) 黒色處理 | — | 64 | — | | |
| —5 土師器 | 杯 | 表区 | ロクロ調整・底部一回絞糸切り | (摩耗) 墨色處理 | — | 65 | — | | |
| —6 春嶽土器 | 杯 | 表区 | ロクロ調整・底部一回絞糸切り | ロクロ調整 | — | 49 | — | | |
| —7 上部器 | 甕 | 17トレス | ロクロ調整 | ロクロ調整 | 161 | — | — | b | |
| —8 土師器 | 甕 | I 区 | ロクロ調整 | ロクロ調整 | (191) | — | — | b | |
| —9 須磨野? | 甕 | 表区 | ロクロ調整 | ロクロ調整・ナゲ | — | 134 | — | | |

図45 各調査区・表採土器

(単位: mm)

IV. 出土遺物について

(縄文土器)



| 回 | 番 | 地 区 | 形 種 | 特 徴 | 出 處 |
|----|------|--------|--------|-----------------|----------|
| 46 | - 1 | 東 | E | 粘土中に植物繊維を含む | 早田木～前原初張 |
| | - 2 | 東 | E | 粘土中に植物繊維を含む | 早田木～前原初張 |
| | - 3 | 東 | E | 外一平行波状縞文 | 大木 2a |
| | - 4 | 東 | E | 外一平行波状縞文 | 大木 3? |
| | - 5 | 東 | E | 外一平行波状縞文 | 慶野小屋 |
| | - 6 | 東 | E | 外一平行波状縞文 | 慶野中屋 |
| | - 7 | 東 | E | 外一沈縞文、連続押引斜文 | 大木 6 |
| | - 8 | 日 | E | 外一沈縞文、連続押引斜文・齊花 | 大木 6 |
| | - 9 | 東 | E | 外一撚水文 | |
| | - 10 | 1 号 住 | E | 外一撚水文 | |

図46 出土縄文土器拓影

(弥生土器)



| 回 | 番 | 地 区 | 形 種 | 特 徴 | 出 處 |
|----|-----|--------|--------|-----------------------|--------|
| 47 | - 1 | 森 | E | 外一平行沈縞文・平行解曲次沈縞文・攀引画文 | 柳沢洞 |
| | - 2 | 6 号土塚 | E | 外一平行沈縞文・片单刃 | 中路 |
| | - 3 | 東 区 | E | 外一付加残文 LR + LR | |
| | - 4 | 東 区 | E | 外一单刃 LR 残文 | |
| | - 5 | 東 区 | E | 外一单刃 L R 残文 | |

図47 出土弥生土器拓影

〈土師器〉

器種には壺・高台付壺・高壺・蓋・甕・台付甕・瓶・鉢・台付鉢・手捏ね土器等がある。製作に際しロクロを使用しないものとロクロを使用するものがある。便宜的にロクロ不使用をA類、ロクロ使用をB類とする。

(A類)

出土量が少なく多くは破片資料であり、図示し得えたものは17点である。器種には壺・高壺・蓋・甕・台付甕・瓶・鉢・台付鉢・手捏ね土器がある。以下、器種ごとに特徴を述べる。

壺

所謂壺形土器である。口縁部はやや内寄気味に外傾し立ち上がる。口縁部高が器高の約半を占める。体部は上半部が外方へ強く張り出し底部へおさまる。算盤形を呈している。底部には浅い凹面がみられる。器面調整は一部摩耗のため不明な点はあるが、口縁部外面には横位方向のヘラミガキが施こされる。体部も同様と考えられるが判然としない。内面の体部～底面にはヘラナナゲがみられるが口縁部は不明である。薄手で端正な作りである。(図44-2)

高壺

脚部のみで全容を知り得るものはない。脚部形態から三つに分けられる。

a 脚部全体が外方へ開く、擴広がりのものである。脚部中央に円孔が三ヶ穿たれている。円孔付近まで中実となっている。器面調整は外面がヘラミガキ、内面にはハケメ調整がみられる。(図45-1)

b 脚部が外方へかるく開き、下部で強く外方へ屈曲し裾部となるものである。脚部はほぼ中空である。器面調整として外面にヘラミガキがみられる。(図23-4)

c 脚部は柱状で下部で外方に強く屈曲し裾部がつくものである。柱状部は中実である。器面は摩耗のため判然としないが外面にハケ目が観察される。(図10-6)

甕

口縁部・体部の破片資料で全容は知り得ない。口縁部資料のものには大形と小形がありともに複合口縁である。口縁部が外傾し立ち上がるもの(a)、口唇部で外反するもの(b)がある。aの器面調整は外面で口唇部がヨコナゲ、頸部から体部にかけてハケ目が施こされる。全体にナナゲ状のミガキがみられる。内面にはハケ目がみられる。bは口縁部外面ともヨコナゲがみられる。(図23-5、44-5、31-1) 体部資料のものには小形と大形がある。小形のものは体部中央部が外方へ張り出す算盤形を呈する。底面には凹面がみられる。器面調整は摩耗のため不明である(図10-2)。大形のものは体部が球形を呈し、底部に凹面がみられる。器面調整は外面がハケ目後ヘラミガキ、内面はハケ目が全面にみられ、横位方向にヘラミガキが数箇観察される。甕とも考えうるがここでは壺とした(図23-6)。

齊

口縁部を中心とした資料で全容は知り得ない。口縁部径から大形と中形に分けられる。大形のものは全て単純口縁である。外傾気味に立ち上がり口唇部で外反するものが多い。器面調整は内外面ともヨコナデが施こされ、外面にハケ目のみられるものもある。(図44-8・9・10・11) 小形のものは単純口縁である。体部まで確認されるものは口縁が外傾気味に立ち上がり体部は球形を呈する。器面調整は外面にハケ目、口縁部にヨコナデが観察される。口縁部のみのものは外傾気味に立ち上がり口唇部で外反する。器面調整は外面にハケ目、内面にはヘラナデがみられ、外面口唇部付近でヨコナデが観察される。(図10-3、44-6)

台付甕

甕部と台部の接合点の破片資料である。円錐台状に上・下方に開く。外面の器面調整はハケ目後縱位方向のヘラケズリである。内面は不明である。(図10-7)

瓶

底部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がる。口縁は複合口縁である。底部は平底で中央部に径1cm程の円孔が1ヶ空たれている。器面調整は摩耗のためほとんど不明であるが、外面下端にヘラケズリが一部みられる。(図10-4)

鉢

体部下端に脛みがみられるが、底部から口縁部にかけて急な立ち上がりをみせ、口縁部でわずかに外反する器形をもつ。器面調整は摩耗のため判然としないが、外面体部下端にナデ状のミガキがみられ、内面上部にはヘラナデ、下部にはナデがみられる。(図44-7)

台付鉢

台部が欠損しており鉢部のみの残在である。高壺の壺部とも考えられたが、階形・調整から高壺とは認めがたく台付鉢と呼称した。鉢部は台部との接合点から内窓気味に外傾し立ち上がる。器面調整は外面下端にハケ目、内面にヘラナデ調整がみられる。(図10-5)

手捏ね上器

口径5.5cm・器高2cm程の小形のものである。体部は底部から丸みをもって立ち上がり、口縁部は内窓気味である。底部は円形の凹面となっている。器面調整は摩耗のため不明であるが全体的に端正な作りである。(図44-3)

以上が土師器A類の各器種ごとの特徴である。多くのものは住居跡・包含層からの出土であり、群として把えられるものもある。次にこれらの土師器の年代について検討してみる。

高壺c、小形壺、小形甕、台付甕、瓶、台付鉢が5分住居より出土している。これらは全て堆積土中のものであるが、床面に近く一括資料もみられ、広義での共伴関係として把えられるものと考えられる。甕や台付甕は中田畠中・留沼・宮前遺跡に類例がみられ「塙釜式」の範疇

に属しており、これらから上記の土器群は大きく塙釜式期に属すると考えられる。その他の土器は単体で出土しており共伴関係等はみられないが、环・高环a・高环b・壺a・壺bは上述の遺跡や清水遺跡に類例がみられ、塙釜式のものと考えられる。また、大形壺・大形甌・鉢・手捏ね上器は破片資料であったり、類似をみない器形であるため時期を明らかにすることが出来ないが、A類の多くが塙釜式に属していることや、他の型式に類例がみられないことなどから同様な時期が考えられる。

(B類)

遺物の中で出土量が最も多い。器種には环・高台付环・甌・鉢等がある。以下、器種ごとに特徴を述べる。

环

外面にロクロ目が觀察され、内面に黒色処理・ヘラミガキが施される。底部切り離しの判断するものは全て回転条切りである。図示したものは総数38点であるが、法量・細部の特徴を知り得るものは32点にのぼる。器形の特徴から下記の3グループに分けられる。

a 口径に対する底径の割合が35~45%、口径に対する器高が30~45%、底径に対する器高が90~100%を示す。器高の割合が大きく全体的に底径が小さく深めの器形、塊状を呈する。体部は内窓気味に立ち上がり、口唇部はかるく外反する。無調整である。

b 口径に対する底径の割合が35~45%、口径に対する器高が25~30%、底径に対する器高が60~75%を示す。器高の割合が小さく全体的に浅めの器形、皿または鉢状を呈する。体部の立ち上がりは内窓気味のもの外傾気味のものがあり、口唇部でかるく外反するものもある。無調整が多いが体部から底部にかけて回転ヘラケズリが施されるものもある。

c 一口径に対する底径の割合が35~50%、口径に対する器高が30~40%、底径に対する器高が60~90%である。法量の割合からa・bの中間的様相を示す。体部の立ち上がりは内窓気味と外傾気味のものがあり、口唇部が外反するものもある。多くは無調整であるが体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されるものがある。

高台付环

全容を知り得る資料はない。外面にロクロ目、内面に黒色処理・ヘラミガキ調整が施される。环部の判断するものは高台部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がる。高台はハの字状に外方へ張り出している。付高台である。

甌

口縁部の形態から2グループに分けられる。

a 口縁部が体部からハの字状に外傾し口唇部が直立気味に立つものである。大形と小形がみられ、大形は長胴形を呈する。体部下半には縱位方向のヘラケズリがみられ、体部外面に凹

き圧痕が観察されるものがある。

b一口縁部が体部からくの字状に外傾または外反するものである。外面にヘラケズリが施されるものもあるが、多くはロクロ調整のみである。底部の確認できるものは平底で、切り離しは回転糸切りである。

鉢

底部が欠損している。体部はやや内寄気味に外傾し立ち上がる。上端でかるく外反し口縁部となる。再調整等はみられない。他の器種に較べてやや器厚がある。

その他の土器

把手の付く上器で甌と考えられたが小破片であるため器種は断定し得なかった。把手は上方を向き、長さ3cm・幅2.5cm程度を計る。ナデ・ケズリ調整で成形されている。周辺部もナデ・ケズリ調整がみられる。(図40-1)

蓋状の土器で円盤形を呈する。上面に回転糸切り痕、下面にロクロ調整痕が認められる。上面は下面に較べて滑らかになっており、側部上面も丸みをおびている。蓋としての積極的な確認は得られなかった。(図44-1)

以上が上師器B類の各器種ごとの特徴であるが、住居跡で赤焼土器や須恵器との共伴関係がみられるため、年代等については赤焼土器・須恵器を含めた中で考える必要があり、別項で記したい。

〈赤焼土器〉

赤焼土器としたものは酸化炎焼成のもので、黒色処理・ヘラミガキの施こされない土器をさす。内面調整・焼成状態・色調から上師器・須恵器と一応区別する。环のみに限定している。

図示し得たものは12点であるが、法量・細分の特徴を確認できるものは7点のみである。切り離しの判明するものは全て回転糸切りである。再調整はみられない。法量の割合をみると、上師器环a・b・cに類似する。体部が外傾し立ち上がるものの、口縁部で外反するものがみられる。

〈須恵器〉

器種には环・壺・甌がある。

环

図示し得たものは3点であるが、器形の全容を知り得るものは3点のみである。底部切り離しの判明するものは回転糸切りである。器形の特徴から下記に分けられる。

a一口径に対する底径の割合が大きく、やや深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外

傾し立ち上がる。無調整である。(図43-8)

b一口径に対する底径の割合が小さく、やや浅めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて内反気味に外傾し立ち上がり、口唇部でかるく外反する。無調整である。(図17-8)

c一口径に対する底径の割合が小さく、やや深めの器形をもつ。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。無調整である。(図40-3)

盤

図示資料は全て欠損品で口縁部資料1点(図23-3)、体部資料1点(図13-1)、底部資料1点(図43-9)の計3点のみである。

3は残存部から長頸のものと考えられる。調整はロクロ調整のみである。口縁部はラッパ状に外反し、口唇部上下端が三角形に突き出している。

1は残存状態から体部上半は球形を呈すると考えられる。1同様長頸と考えられる。頭部にはロクロ調整でのかすかな高まりがみられ全周している。内外面ともロクロ調整のみである。

9は低い高台がみられ、付高台と考えられる。外面には浅い手持ちヘラケズリがみられる。

甕

図示資料は2点のみで、口縁部破片資料である(図18-1、43-10)。内外面ともロクロ調整のみが観察される。1は体部から「く」の字状に外傾し口唇部にいたっている。口縁部周縁上方は丸くおさまり、下方は三角形に突き出し端部は平坦となっている。10は外反気味に外傾しながら口縁端部にいたる。口唇部上方は三角形に突き出し、下方は丸くおさまっている。

〈出土土器の組み合わせと年代について〉

土器類は前述したように多種にわたるが、ここでは住居等で出土している土師器B類、赤焼土器・須恵器の共伴関係について検討し、年代についても考えてみたい。良好な共伴関係のみられる住居跡には10号・11号住居跡がある。

10号住居跡の資料は床面直上のものが多く厳密な意味合いで共伴とは言い難いが、床面にほぼ接していることもあり、大きく共伴関係としてとらえている。器種には土師器壺a・b・c、土師器甕a、須恵器壺b、須恵器甕がある。

11号住居跡の資料はカマド部と貯蔵穴状ピットからのものである。器種には土師器壺b・c、土師器甕a・b、赤焼土器bがある。

両住居跡を比較すると器種構成で互いに欠損するものがみられるが、共通するものもあり大きくみて同様のものと考えられる。これらの中で土師器は製作に際しロクロを使用しており、土師器編年での第七型式「表杉ノ入式」に相当するものであり、平安時代全般にわたり製作・^(註3)使用されたと考えられているものである。従って、共に出土している赤焼土器・須恵器につい

ても表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

近年、表杉ノ入式の土師器坏は技法・形態の相違・変化を時間的変遷の中で把えうる可能性が提示されている。阿部義平・桑原滋郎各氏は成形・調整技法の点から分類し、製作技法の手数の省略化により変遷するとしており、このことは再調整から無調整へ変化して行くものと把えられる。また、水入・佐内屢敷遺跡の報告では土師器坏を形態的特徴から大きく三類（I・II・III）に分け、I・II類は前型式の国分寺下層式の終末期の形態に近似すること、III類がロクロ技術の進展の結果として把えられる器形のものとし、III類はI・II類より新しい特徴を示すものとし、器形の面から新旧について述べ、各類の組み合わせの中で年代にまで言及している。また、再調整はI・II類に多用され、III類ではほとんどのものが無調整となる傾向を指摘している。ここでI類とした土器の特徴は口径に対して底径、器高の占める割合が大で丈が高いもの、II類はI類同様、口径に対して底径の占める割合が大で、器高の占める割合が小で扁平な感があるもの、III類は口径に対して底径の占める割合がI・IIに比して小さく、胴・口縁部が大きくなっているものである。さらに、南小泉遺跡での報告では土師器坏を形態的特徴から大きく4類（I・II・III・IV）に分けている。分類基準は上記遺跡とは同じであるが、I類がII類に、II類がI類に、III類はII類となるが底径の違いからIV類を加えている。また、住居跡出土の各類の組み合わせの違いから、I類とII類との間には時間的差異が認められるとして、I類はIV類よりも古い様相を示すものとし、各土器類の組み合わせから年代にまで言及している。

以上の例から当遺跡住居跡出土土器を観察すると、土師器坏は水入・佐内屢敷遺跡でのIII類に、南小泉遺跡でのII・IV類に類似し、10号住居跡出土の須恵器坏は南小泉遺跡での須恵器坏IV類に類似するものである。ロクロ技術の進展の結果としての器形群としては把えられるが、土器類の構成要員（土師器坏ではIII類に類似するものが主体を占め、IV類に類似するが器形が複雑なものがみられる等）としては違いがみられる。同様な土器構成をみてみると、安久東遺跡第1～3号住居跡のものがある。灰釉陶器柄が併出してあり、概の年代から11世紀の年代を与えている。しかし、灰釉陶器自体の編年体が流動的な現在では年代設定に難があるものと考被される。当遺跡1号掘立柱建物跡柱穴内より赤焼土器坏が出土しているが、11号住居跡出土の赤焼土器と形態的に類似するものである。この建物跡は県内でよくみられる灰白色火山灰を含む層を切り込んで構築されているもので、この灰白色火山灰は各論考により10世紀前半頃の年代が求められている。これらから、10号・11号住居跡の年代は10世紀前半以前のものと考えられよう。また、10号・11号住居跡は近接しており、新旧関係を考えられたが明らかにすることは出来なかった。

〈瓦〉

出土した瓦は300点ほどである。住居跡や土壙からの出土もあるが、多くは表採や耕作土中からのものである。全て破片資料で全容を知り得るものはない。種類としては軒平瓦・平瓦・軒丸瓦・丸瓦がある。これらの瓦は製作技法等の特徴から細分が可能である。

軒平瓦

陽刻の均整唐草文軒平瓦である。額部のみの残存で瓦当面も右側半分が欠損しており、細部については不明な点が多い。瓦当面は従来知られている均整唐草文様（緻密に配された渦巻で構成されるもの）とは意匠が異なり、瓦当面中央に花を1ヶ配し渦巻と花を交互に配した左右相称の文様構成をもつものである。復元からの推定ではあるが、渦巻が8ヶ（時計回り・反時計回り各4ヶ）、花が7ヶ（上向きのもの3ヶ・下向きのもの4ヶ）配されている。全体的な文様構成として流麗さがみられるものである。額面には縦位方向の縫卯目が施こされ、その上にややくずれた鋸歯文が施文されている。額部幅は8cm程度で断面は三角形を呈する。瓦側端部はほぼ垂直に面取りが施こされている。瓦凹面には粗い布目痕・縦位方向のナデ調整がみられる。

平瓦

瓦凸面の叩き圧痕の相違から大きく下記のグループに分けられる。

1：凸面に格子叩き目がみられるものである。確認できるものは全て斜格子で、格子目は菱形を呈する。叩き目は全体的に浅く、格子目の凹面は平坦となっている。瓦凹面には糸切り痕・布目痕が観察され、布目は緻密に織られたものを使用している。模骨痕と判断されるほぼ均等な幅をもつ凸凹が観察されるが、明確な段となっているものは少なく扁平となっているものが多い。また、粘土板の合わせ目や縦位方向のヘラケズリが観察されるものがある。側端部には面取りが施こされるが、一面のみの面取りで先端部が鋭角となるものがあり特徴的である。瓦質は緻密で硬質のものが多い。瓦最大厚は1.7～2.9cmと様々である。

2：凸面に平行叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し横位・斜位方向に走るもので、横位方向が主体を占める。縦位方向のナデ調整により叩き目が消されているものがある。凹面には糸切り痕・布目痕が観察され、布目は緻密なものが使用されている。模骨痕と判断される凹凸面が観察されるものもあるが、大半は扁平な面となっているものが多い。縦位方向にナデ・浅いケズリが調整としてみられる。側端部には面取りが施こされ、二面にわたるもの、一面のみで先端部が鋭角になるものがある。瓦最大厚は1.9～2.7cmを計り、瓦質は緻密で硬質のものが多いが薄手の瓦に軟質なものがみられる。

3：凸面に縫叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し縦位・斜位方向に走るもので、縦位方向のものが主体を占める。縫目圧痕の大きさに違いがみられ細分が可能である。叩き目

がスリ消されるものが一部にみられる。凹面には糸切り痕・布目痕がみられ、布目は織目の緻密なもの・粗いものの二種がみられる。横骨痕と考えられる凹凸面が一部のものに観察されるのが(a)、大半のものは扁平な面をもつものである(b)。縦目状の圧痕が剝離面に観察されるものがあり粘土板の合わせ目と考えられる。調整としてはナデ・浅いケズリがみられる。側端部には面取りが施こされ、一面・三面にわたるものが多くみられる。瓦最大厚は1.6～3.3cmを計り様々である。瓦質は緻密で軟質・硬質のものがあり、硬質のものには自然軸のかかるものが多くみられる。

軒丸瓦

小破片であるため特徴等については不明であるが、瓦当外縁部には蓮弁・間弁の一部が残存している。瓦当部上面にはナデ・ケズリ調整がみられ、側端部には二面の面取りがみられる。凹面にはやや粗い布目痕・粘土紐の合わせ目が観察され、縦横位方向のナデ調整・縦位方向のナデツケがみられる。瓦質は緻密で硬質である。文様については不明である。

丸瓦

瓦凸面の叩き圧痕や形態の相違から下記のグループに分けられる。

1：凸面に平行叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し縦位・横位方向に走る。凹面には布目痕が観察され、糸切り痕のみられるものもある。布目は緻密に織られたものを使用している。側端部には二面の面取りが施こされている。瓦最大厚は1.6～2.0cmを計りほぼ均一である。瓦質は緻密で硬質である。上下端部が欠損しており瓦形態については不明である。

2：凸面に縦位方向のヘラケズリ調整がみられ、叩き圧痕については不明なものである。凹面には糸切り痕・布目痕が観察され、布目は緻密なものが使用されている。側端部には二面の面取りがみられる。瓦最大厚は2.4cmを計る。瓦質は緻密で硬く、自然軸もみられる。瓦下端部が残存しており、行基式瓦であることが確認されている。

3：凸面に縦叩き目がみられるものである。ナデ・ケズリ調整により縦目が磨り消されていく。凹面には布目痕が観察され、織目の緻密なもの・粗いものの二種があるが、布目の粗いものが多数を占める。粘土紐の合わせ目が観察されるものが多い。側端部には二面の面取りがみられる。瓦最大厚は1.6～2.1cmを計り、瓦質は緻密で硬いものが多い。瓦形態の判明するものは正縁式瓦である。

以上が今回の調査で出土した瓦の種類ごとの特徴である。軒平・軒丸瓦は一種類、平瓦・丸瓦は三種類に分けることができた。また、昭和56年度調査地の報告で出土瓦の分類を行なっており、軒瓦の出土はないが、平瓦は5類に丸瓦は4類に分けている。今回出土した瓦はこの分類にあてはまるものが大半であるが、あらためて分類基準を略述してみる。

- 平瓦 1 類：凸面に格子叩き目がみられ、正格子と斜格子に分けられる。
2 類：凸面に平行叩き目がみられる。
3 類：凸面全体にヘラケズリが施こされる。叩き圧痕は不明。
4 類：凸面に繩叩き目がみられる。
5 類：凸面に繩叩き目がみられ、ナテ調整により一部叩き目が磨り消される。
- 丸瓦 1 類：凸面に格子叩き目がみられる。
2 類：凸面に平行叩き目がみられる。
3 類：凸面にナテ調整がみられる。叩き圧痕は不明。
4 類：凸面に繩叩き目がみられる。

以上が平瓦・丸瓦の分類基準としたものである。その後の瓦観察の結果、平瓦 5 類は 4 類の範疇に入り、丸瓦 3 類は一部ヘラケズリ調整がみられることが確認され、分類基準は一部補訂となる。その結果、現段階では平瓦・丸瓦とも 4 種の分類となる。今回の出土瓦を上記の分類に対比してみると、下記のように分けられる。

$$\begin{array}{lll} \text{平瓦 } 1 \rightarrow \text{平瓦 } 1 \text{ 類} & \text{平瓦 } 2 \rightarrow \text{平瓦 } 2 \text{ 類} & \text{平瓦 } 3 \rightarrow \text{平瓦 } 4 \text{ 類} \\ \text{丸瓦 } 1 \rightarrow \text{丸瓦 } 2 \text{ 類} & \text{丸瓦 } 2 \rightarrow \text{丸瓦 } 3 \text{ 類} & \text{丸瓦 } 3 \rightarrow \text{丸瓦 } 4 \text{ 類} \end{array}$$

次に造瓦技法の点からみると、平瓦・丸瓦とも大きく二者に分けられる。平瓦では粘土板巻作りと一枚作りのものである。平瓦 1・2 と平瓦 3 の一部が前者に相当し、平瓦 3 の大部分が後者に相当する。前者の瓦凹面には模様痕が観察されるが、明瞭なものは少なく全体的に扁平となっているものが多く一枚作りの瓦との区別がつきにくい面もあるが、前者は後者に較べて凹面の布目痕が緻密となっている特徴がみられる。丸瓦では粘土板巻作りと粘土紐巻作りの二者に分けられ、丸瓦 1・2 が前者に相当し丸瓦 3 が後者にある。丸瓦 1・2 が行基葬、丸瓦 3 が正縁付きの形態をもつものである。

以上、種類別に瓦の特徴を述べたが、次に瓦各類の年代等について考えてみたい。

軒平瓦は瓦当面に陽刻の均整唐草文がつくものであるが、前述したように從来知られているものとは意匠が異なっている。文様の類似例として平泉高館出土の瓦と多賀城跡出土の博がある。〔註10〕 平泉高館出土の瓦は紙上での観察ではあるが完形品である。瓦当面には左右対称に花や渦巻が配され、文様は流麗である。当遺跡出土の瓦は欠損品ではあるが、花・渦巻の数、流麗さ等からみて同じ構成のものと考えられる。額面には二本沈線による端部がくずれた鉛歯文が施文されている。瓦凸面には縦走する繩叩き目がみられ、中央部には後世のものと考えられる硯様のものが削り出されている。多賀城跡出土のものは埠側面にみられる。欠損品であるため全容は知り得ないが、花と渦巻がみられやはり流麗な文様となっている。埠上面には神獣らしい

ものが浮彫されている。

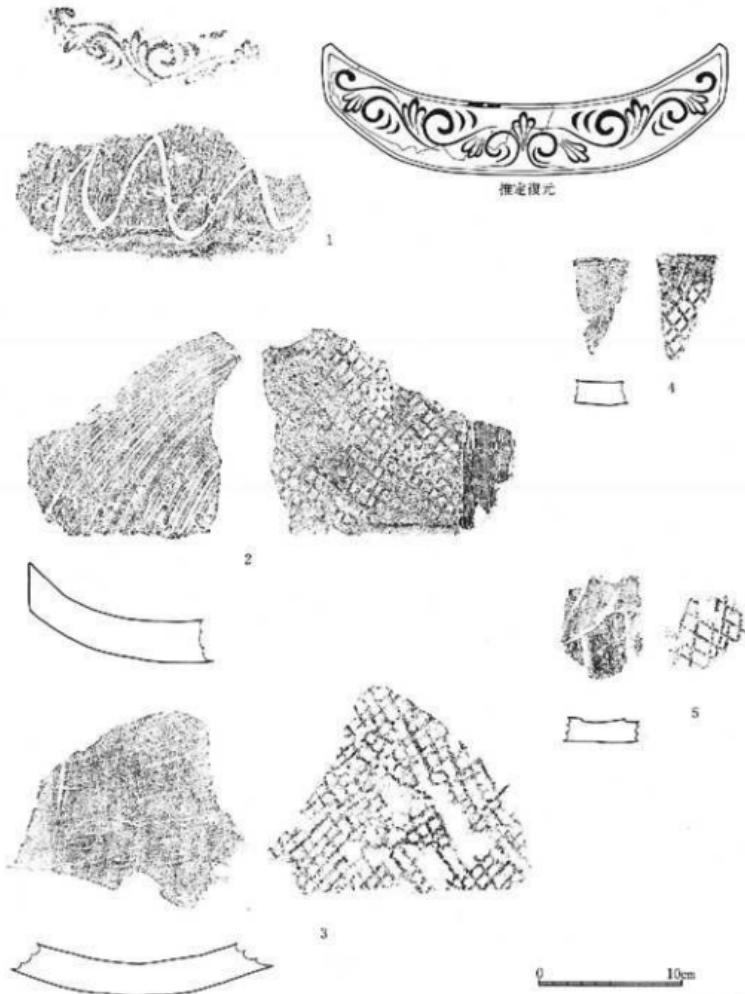
現在、同様の文様が知られる遺跡は¹⁴遺跡を含めて三ヶ所にすぎず、当遺跡では他に3点の表採資料があり、計6点の資料にとどまっている。平泉高館出土の瓦は、完形品であること、後に硯様のものに転用されていること、平泉遺跡群内での調査において瓦は少量の出土例しかみられないことなどから、断言は出来ないが敵入品である可能性も考えられる。このことから古代平泉の範疇の中で考えうるものか疑問が残される。また、多賀城跡出土の壇は土質より出土しており、伴出する瓦には多賀城下期・IV期の瓦が混在している。廃棄としての性格が考えられ、同様に所属時期については不明と言わざるをえない。このように、均整唐草文軒平瓦は現段階では類例が少なく、窓跡での共伴関係も不明であり、軒丸瓦との組み合わせと共に時期についても明らかにすることが出来ない。

軒丸瓦は瓦当面が欠損しており、文様・時期とも不明である。

平瓦・丸瓦は昭和56年度調査報告での分類にあてはまるものが大半を占めており、所属時期については同じ見解となるが、あらためて述べておく。平瓦1と同様の特徴をもつものには多賀城創建平瓦第4類・伏見庵寺跡・三輪田遺跡にみられ、大蓮寺窓跡のテラス状造構からは¹⁵平瓦1・2に類似したものが出土している。平瓦3aは多賀城創建期瓦の特徴がみられ、平瓦3bは多賀城II期以降の特徴をもつものと考えられる。丸瓦1と類似するものには多賀城創建丸瓦第4類や伏見庵寺跡にみられ、丸瓦2は角田郡山遺跡にみられる。丸瓦3は多賀城跡など一般的にみられるものである。¹⁶

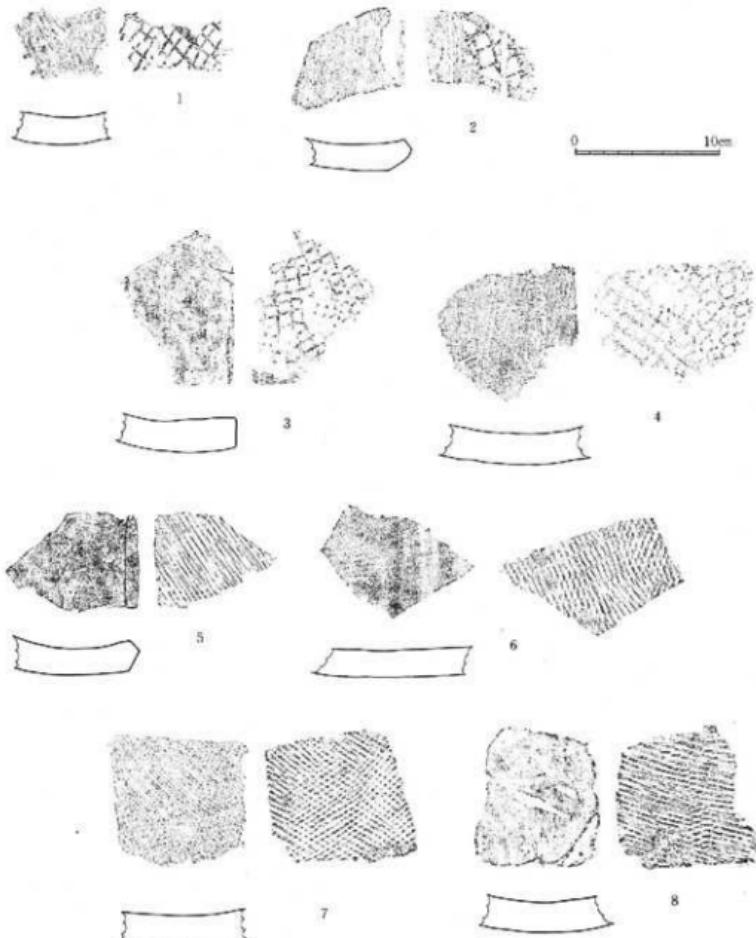
山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組み合わせは多賀城創建以前の指達がある。上述の組み合わせがみられる伏見庵寺跡や、ロクロ挽き重弧文軒平瓦を伴っている三輪田遺跡では多賀城創建期以前・多賀城創建期の可能性を指達している。また、大蓮寺窓跡の調査によってロクロ挽き重弧文軒平瓦に伴う平瓦がみとめられているが、この平瓦と印き日压痕をはじめとし胎土・焼成の同じ平瓦（平瓦2類・昭和56年度調査図12-5）がみられ、同窓の製品とみることができる。これらから、軒瓦の組み合わせではないが伴に出土している平瓦・丸瓦の例から、平瓦1・2・丸瓦1は多賀城創建期以前・多賀城創建期の可能性が考えられる。丸瓦2も造瓦技法の点から同様な時期が考えられる。平瓦3aは多賀城創建期に、平瓦3b・丸瓦3は大きく多賀城II期以降のものと考えられる。

『歴史考古』第12号「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦」の報文で小田原案内の瓦窯址（大蓮寺窓跡地点と考えられる）として出土瓦の記述がある。……重弧文字瓦は、多賀城や陸奥国分寺など広く使用されている重弧文とその施文技法を異にし、弧線の断面が丸味を帯びている。……この字瓦と同一様式のものが燕沢遺跡から発見されており……云々とあり、この重弧文字瓦はロクロ挽き重弧文軒平瓦と考えられる。また、当瓦窯からは単弁蓮花文軒丸瓦も発見されており注意される。



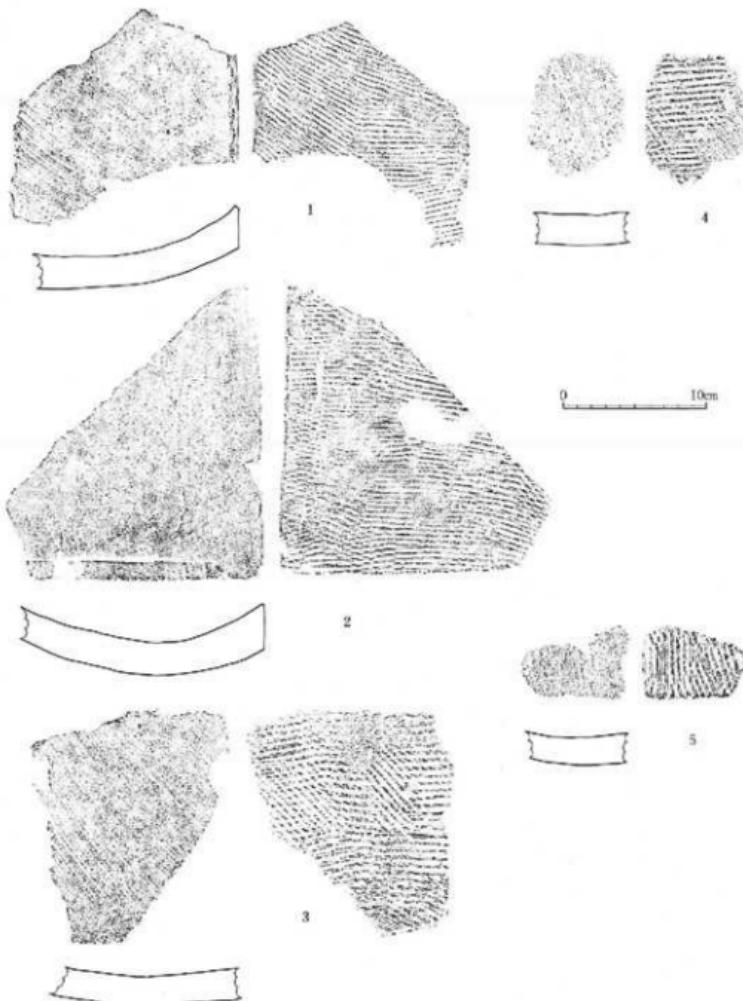
| 图・番 | 分類 | 產地 | 特徴 | 備考 |
|------|-----------------|--|---|--------|
| 48-1 | 軒平瓦 V字 17トレス | 瓦当面一均齊唐草文 瓦底 積叩き目、瓣曲文 三度一ナメ、布目(?) 色調一灰色、複質 | | 写真47-1 |
| 2 | 平瓦1層 表 | 内面一格子目甲子(新格子) | 四面一均打ち抜、複合型、布目(1mm13本) 色調一灰色、複質、最大厚 2.9mm | 写真47-2 |
| -3 | 平瓦1層 48号 土 庫 | 凸面一格子目甲子(新格子) | 四面一均打ち抜、複合型、布目(1mm14本) 色調一灰色、複質、最大厚 2.4mm | 写真47-3 |
| -4 | 平瓦1層 表 | 凸面一格子目甲子(新格子) | 四面一均打ち抜、複合型、布目(1mm14本) 色調一灰色、複質、最大厚 1.7mm | 写真47-4 |
| -5 | 平瓦1層 1区、表 | 凸面一格子目甲子(新格子) | 四面一均打ち抜、複合型、布目(1mm14本) 色調一灰色、複質、最大厚 1.8mm | |

図48 軒平瓦・平瓦 (1類)



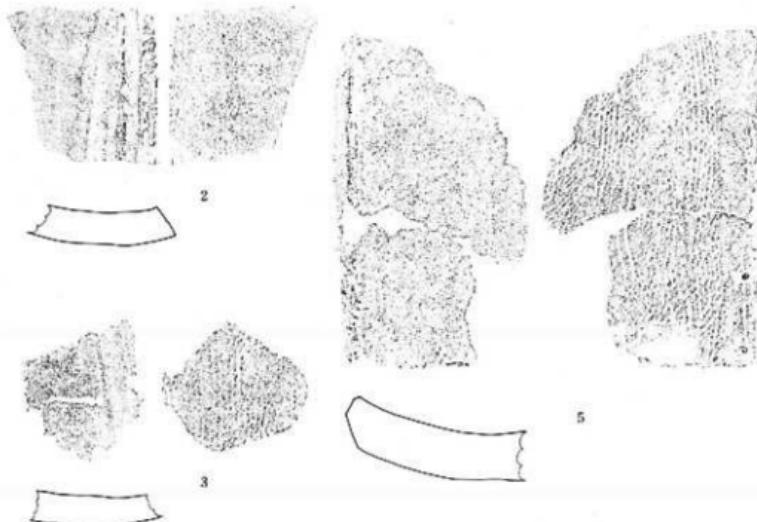
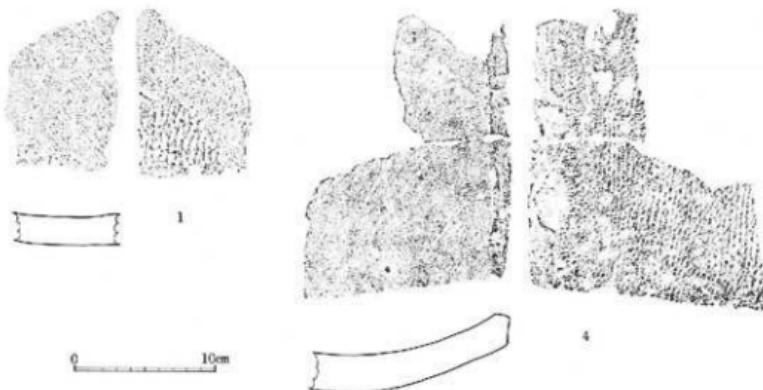
| 図・番 | 分類 | 造 | 特 | 直 | 備考 |
|------|------|---------------------|--|---------------------|--------|
| 40-1 | 平瓦1種 | VJK 10トレス 1 横 | 凸面一格子印(印)の格子 凹面一垂堀(引張)、布目(1cm×14本) | 色調一灰白色、硬質、最大厚 2.1cm | |
| -2 | 平瓦1種 | 48 号 二 縞 横 | 凸面一格子印(印)の格子 凹面一一条切(引)、布目(1cm×14本)、ケズリ | 色調一灰白色、硬質、最大厚 1.8cm | |
| -3 | 平瓦1種 | VJK 17トレス 1 横 | 凸面一格子印(印)の格子 凹面一布目(1cm×5本)、ケズリ | 色調一灰白色、硬質、最大厚 2.5cm | 写図47-3 |
| -4 | 平瓦1種 | 蓋 | 凸面一格子印(印)の格子 凹面一粘土瓦合せ口(引張り縫)、縫合部(引)、布目(1cm×16本) | 色調一灰白色、軟質 | 写図47-6 |
| -5 | 平瓦2種 | 1 素 | 凸面一平行引(引)の格子 凹面一布目(1cm×10本)、ケズリ | 色調一灰白、硬質、最大厚 2.1cm | |
| -6 | 平瓦2種 | VJK 17トレス 1 横 | 凸面一平行引(引)の格子 凹面一布目(1cm×12本)、縫合部(引) | 色調一偏灰色、硬質、最大厚 2.0cm | |
| -7 | 平瓦2種 | VJK 17トレス 3 素 | 凸面一平行引(引)の格子 凹面一垂堀(引張)、布目(1cm×9本) | 色調一偏灰色、硬質、最大厚 2.1cm | 写図47-1 |
| -8 | 平瓦2種 | VJK 17トレス 1 横 | 凸面一平行引(引)の格子 凹面一布目(1cm×16本)、ケズリ | 色調一灰色、硬質、最大厚 2.2cm | 写図47-5 |

図49 平瓦 (1・2類)



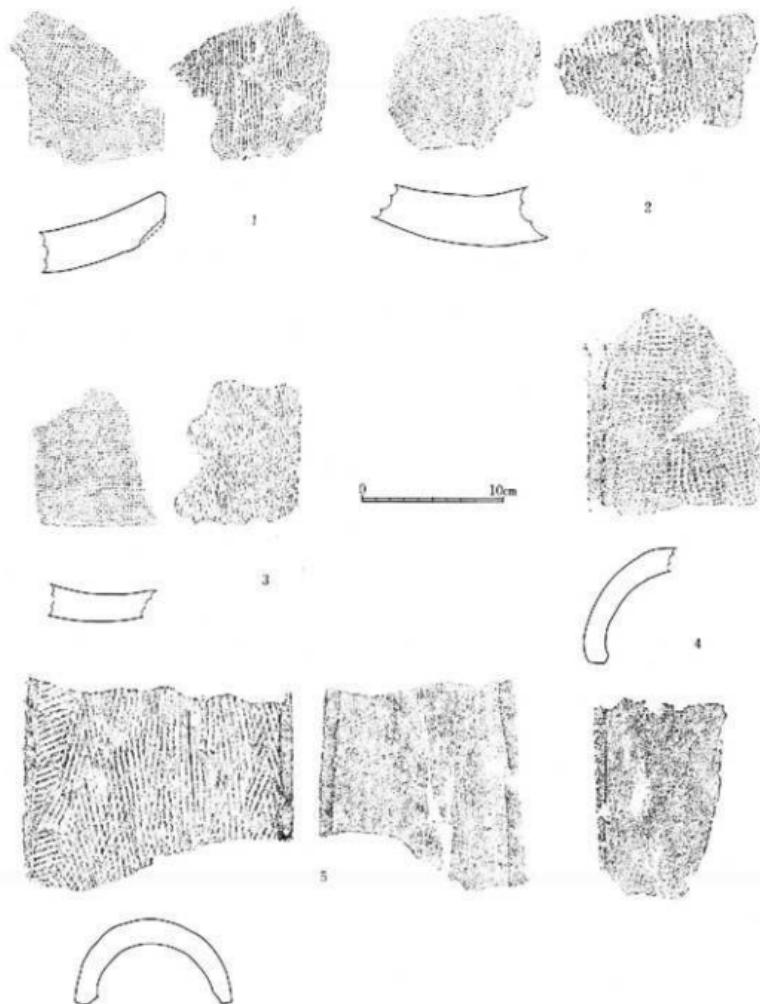
| 圖・番 | 分類 | 形態 | 特 | 徵 | 備考 |
|------|------|--------------|-----------------|-------------------|---------------------|
| 50-1 | 平瓦2種 | 直 瓦 | 凸面一平行凹脊(橫拉) | 凹面一無凹脊、布目(1cm1本) | 色調一淡白色、硬度、最大厚2.7cm |
| -2 | 平瓦2種 | 14 脊 瓦 | 凸面一平行凹脊(橫拉) | 凹面一無凹脊、布目(1cm10本) | 色調一淡白色、硬度、最大厚2.1cm |
| -3 | 平瓦2種 | 直 瓦 | 凸面(平行凹脊(橫拉、斜拉)) | 凹面一無凹脊、布目 | 色調一灰黃褐色、硬度、最大厚2.2cm |
| -4 | 平瓦2種 | 直 瓦 | 凸面一平行凹脊(橫拉) | 凹面一布目(1cm10本) | 色調一淡白色、硬度、最大厚2.4cm |
| -5 | 平瓦2種 | 直 瓦 | 凸面一平行凹脊(橫拉、斜拉) | 凹面一無凹脊 | 色調一灰黃褐色、硬度、最大厚2.9cm |

圖50 平瓦(2種)



| 圖-番 | 分類 | 通稱 | 特 | 類 | 考 |
|------|------|---------|--|--------|---|
| 51-1 | 平瓦4種 | 10 号 住 | 表面一帶凹凸(縱向) 因此一端切口直，精齊微，衝口(1cm 9本) 色調一淡白色，輕質，最大厚 2.1cm | | |
| -2 | 平瓦4種 | 10 号 住 | 表面一帶凹凸(縱向) 因此一段有斜？，有缺口(1cm 7本) 色調一淡色，輕質，最大厚 2.2cm | | |
| -3 | 平瓦4種 | V區・10トレ | 表面一帶凹凸(縱向) 因此一段有斜？，有缺口(1cm 9本) 色調一淡白色，輕質，最大厚 1.9cm | | |
| -4 | 平瓦4種 | 12 号 住 | 表面一帶凹凸(縱向) 表面一端切口直，有缺口(1cm 8本)，ナド。 色調一淡色，輕質，最大厚 2.6cm | 等同49-2 | |
| -5 | 平瓦4種 | 12 号 住 | 表面一帶凹凸(縱向) 表面一端切口直，有缺口(1cm 8本) 色調一淡蓝色，深蓝色，輕質，最大厚 3.4cm | 等同49-3 | |

圖51 平瓦 (4類)



| 図・番 | 分類 | 造 | 被 | 説 | 備考 |
|------|--------|--------|-------------|--------------------|-------------------------------|
| 52-1 | 平瓦 4 種 | 瓦 摺 | 凸面一同行引目(複数) | 凹面一ナギ・右目(1cm 5本) | 色調・青褐色・硬質・最大厚 2.6cm |
| -2 | 平瓦 4 種 | 方彌裏溝 | 凸面一同行引目(複数) | 凹面一若目・西面に特 | 色調・灰白色・硬質・最大厚 3.5cm |
| -3 | 平瓦 4 種 | 方彌裏溝 | 凸面一同行引目(複数) | 凹面一若目(1cm 6本) | 色調・灰褐色・硬質・最大厚 2.2cm |
| -4 | 丸瓦 2 種 | 4 月 住 | 凸面一平行引目(複数) | 凹面一高切引目・右目(1cm 3本) | 色調・灰白色・硬質・最大厚 1.7cm 写図50-2 |
| -5 | 丸瓦 2 種 | 11 月 住 | 凸面一平行引目(複数) | 凹面一高切引目・右目(1cm 9本) | 色調・灰褐色・硬質・最大厚 1.7cm 写図50-1 |

図52 平瓦(4種)・丸瓦(2種)

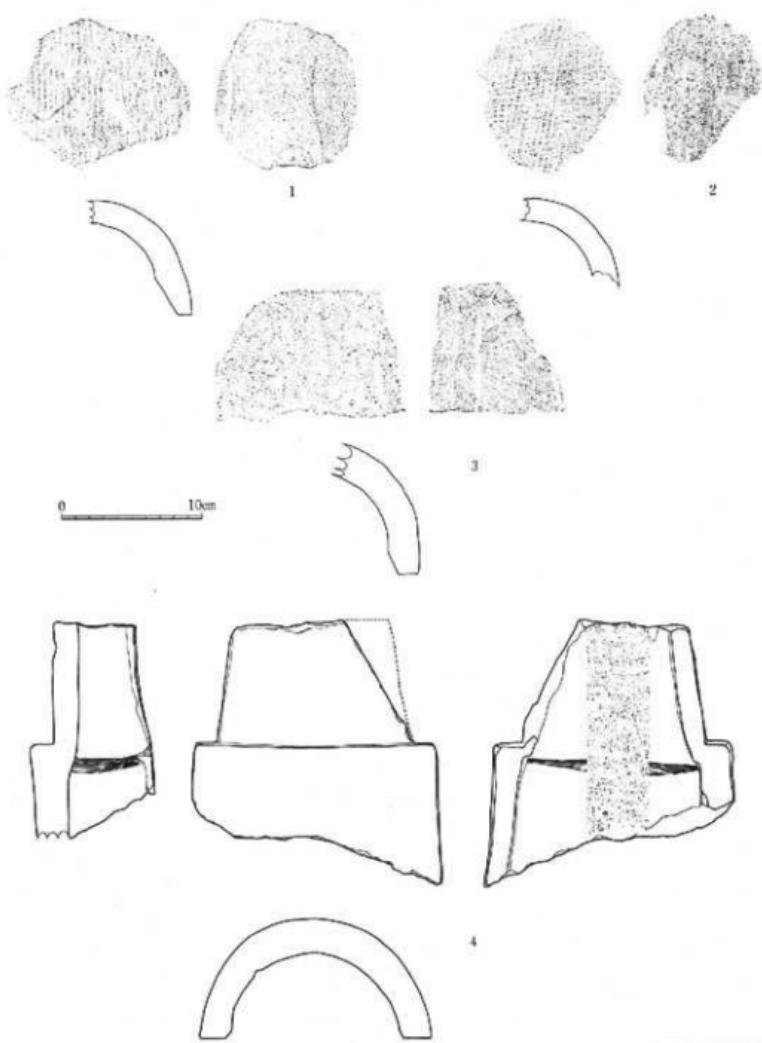
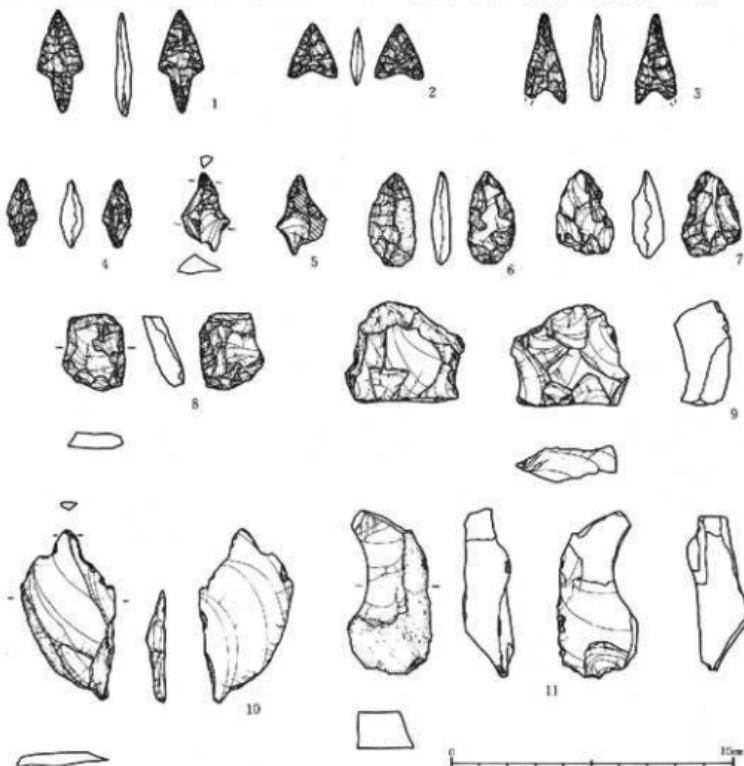


図53 丸瓦 (2・3・4類)

| 区・番 | 分類 | 進・消 | 特 | 備 | 備考 |
|------|------|--------|-------------|----------------|--------------------|
| 53-1 | 丸瓦2類 | 1 区 | 凸面-平行刃多(縮化) | 凹面-一部刃(1cm10本) | 色調-灰白色、縫合-最大厚2.0cm |
| -2 | 丸瓦2類 | 方影裏溝 | 凸面-平行刃少(縮化) | 凹面-一部刃(1cm10本) | 色調-灰白色、縫合-最大厚1.8cm |
| -3 | 丸瓦3類 | 者 | 凸面-ケズリ(縮化) | 凹面-一部刃(1cm10本) | 色調-灰白色、縫合-最大厚2.5cm |
| -4 | 丸瓦4類 | 10 号 住 | 凸面-ナゾ | 凹面-一部刃(1cm7本) | 色調-灰白色、縫合-最大厚2.5cm |

〈石製品〉

20点程の出土量である。多くはⅢ区包含層からの出土である。造構内出土のものもあるが明らかに造構に伴うものは少ない。種類として石鏃・剝片・石斧・敲石・砾石などがある。



| 図 | 番 | 地 | 区 | 種 | 類 | 長 | さ | 幅 | 厚 | さ | 重 | 量 | 石 | 材 | 圖 | 考 |
|----|----|----|---|---|---|----|---|----|----|---|---|---|---|---|---|---|
| 54 | 1 | 表 | 様 | 石 | 鏃 | 27 | | 16 | 6 | | | | | | | |
| — | 2 | 表 | 様 | 石 | 鏃 | 21 | | 18 | 5 | | | | | | | |
| — | 3 | Ⅲ | 区 | 石 | 鏃 | 31 | | 15 | 6 | | | | | | | |
| — | 4 | 若 | 様 | 石 | 鏃 | 24 | | 11 | 8 | | | | | | | |
| — | 5 | Ⅲ | 区 | 石 | 鏃 | 29 | | 18 | 7 | | | | | | | |
| — | 6 | 5 | 寄 | 剥 | 片 | 23 | | 17 | 7 | | | | | | | |
| — | 7 | 5 | 寄 | 剥 | 片 | 31 | | 21 | 12 | | | | | | | |
| — | 8 | Ⅲ | 区 | 剥 | 片 | 28 | | 22 | 8 | | | | | | | |
| — | 9 | 12 | 寄 | 剥 | 片 | 26 | | 42 | 12 | | | | | | | |
| — | 10 | Ⅲ | 区 | 剥 | 片 | 67 | | 32 | 8 | | | | | | | |
| — | 11 | 6 | 表 | 土 | 壤 | 55 | | 28 | 13 | | | | | | | |

図54 出土石製品（石鏃・剥片）

(単位 mm・g)

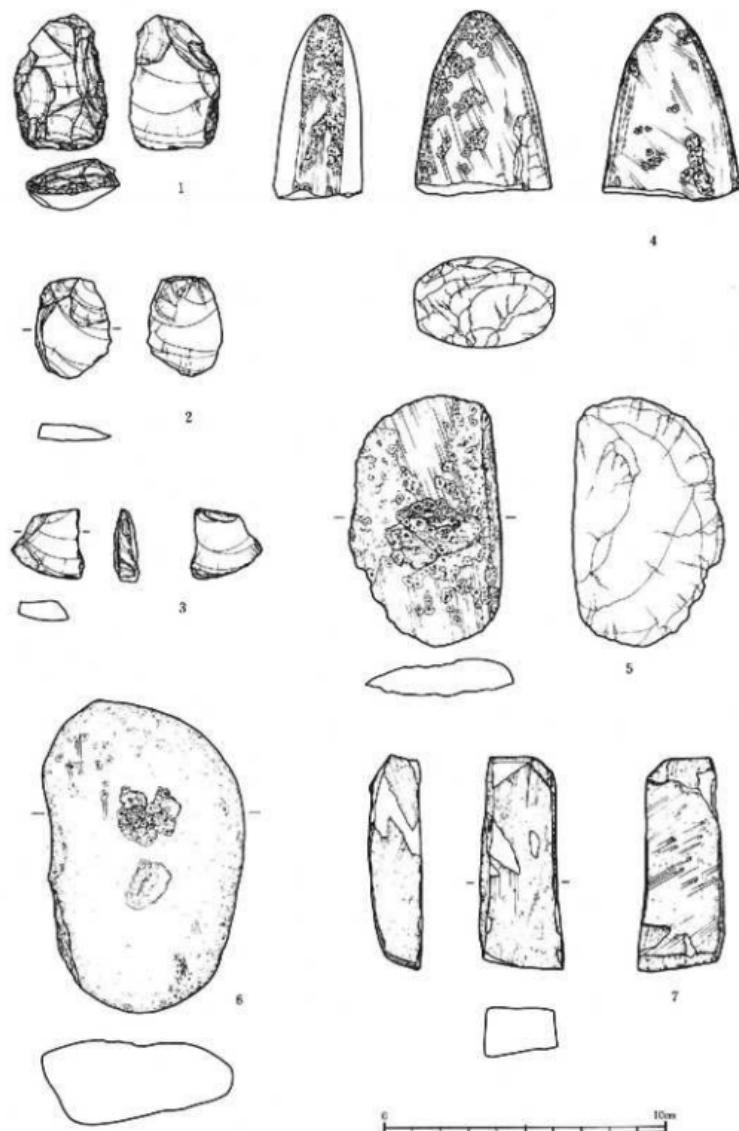


図55 出土石製品（剥片・石斧・敲石・砾石）

| 固・番 | 地・区 | 種・類 | 長・さ | 幅・さ | 厚・さ | 重・量 | 石・材 | 備・考 |
|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------|
| 56-1 | 5号住 | 刺片 | 49 | 31 | 16 | | | |
| 2 | 5号住 | 刺片 | 36 | 26 | 6 | | | |
| -3 | 5号住 | 刺片 | 26 | 23 | 7 | | | |
| 4 | 10号住 | 石斧 | 65+ | 50 | 32 | | | 鉢底・7層中 |
| -5 | 8号土塙 | 麻石 | 89 | 64 | 13 | | | |
| 6 | 6号土塙 | 敲石 | 110 | 68 | 30 | | | |
| -7 | 日区 | 鐵石 | 75 | 25 | 18 | | | |

(単位 mm・g)

図55 出土石製品観察表

〈陶窓〉

1点のみが確認されている。海部が欠損しており全容は不明であるが、陸部からみて四角形を呈すると考えられる。陸部中央部に陵が一本みられ左右を分けており、二面窓である。表面には自然釉がみられ、あまり擦られた形跡がなく使用頻度は少ないと考えられる。陸部裏面には四角形に成形された脚が2ヶ残存している。貼付と考えられる。全体成形はハラケズリである。(図18-2)

〈施釉陶器〉

施釉陶器が1点出土している。底部周辺の破片資料である。底面からの立ち上がりは低く、破片端部に浅い凹面がみられ口縁部へ立ち上がる変曲点と考えられ、これらから器種は皿と考えられる。高台はかるく外方へ張り出し、内側は内反気味である。高台接地面は丸くおさまっている。調整はロクロ調整のみが観察される。器面内外には緑がかったオリーブ色の釉がみられ、内面にはハケ塗りの痕跡が観察される。胎土は密で灰白色を呈している。(図40-2)

また、灰釉陶器に類似するものが数多く出土している。破片資料で器種を知り得るものはないが、類似する点のみで断定にはいたらなかった。

〈金属品〉

多くの金属品が出土しているが、形状等全体を知り得るものは鉄釘のみである。方形周溝造構の南辺溝より一括して出土したものである。全長の確認されるものは少ないが、6~10cm程度のものが多い。断面形はほぼ正方形を呈し、厚さは最大部で0.5~0.9cmを計る。釘の頂部を屈曲させ頭としている。身尻にかけて細くなっている。(図34-2~7)

VII. 発見遺構について

1. 住居跡

1軒確認されている。遺存状態が全体に不良で規模等を把握できないものが多い。出土遺物から所属時期をみると、古墳時代(塩釜式期)1軒・平安時代(表杉ノ入式期)6軒で残りの4軒が時期不明となっている。また、12号住居は平安時代に属するものであるが推積土状況や

出土土器から塩釜式期の住居が重複していたものと考えられる。

住居の位置関係をみると、台地上のグループと丘陵斜面のグループがみられる。大きくみると古墳時代のものが前者に、平安時代のものが後者に分けられる。また、住居跡の軸方向(東・西辺)をみると前者はN-16°~25°Wにおさまり、後者はN-1°~10°Eと軸方向のまとまりに違いがみられた。これらから、時代不明とした住居も位置・軸方向から古墳時代と平安時代に分けることが可能とも考えられる。このように調査区内での狭い範囲ではあるが時期によって住居の居住構成に特徴がみられる。

○古墳時代の住居跡（5号、1号・6号・12号旧）

5号住居のみが確実なもので、他の3軒は上記の状況から推察されたものである。12号住のみがⅢ区の緩斜面に、他はⅠ区の平坦面に位置している。住居間の重複はみられない。台地上に位置する住居（5・1・6号住）は台地頂部に並ぶかのように分布している。詳細を知り得たものは5号住のみであるため特徴等は割愛するが、当住居は確認時においてロクロ使用の土師器等が散乱状態で検出され堆積土中央付近まで確認されている。多くのものが細片であることからも廃棄としての性格をもつものと考えられる。これらから、住居庭絶縁から埋没までかなりの時間が経っていることが推察された。仙台市内において塩釜式期の住居跡は安久東遺跡3軒、中田畠中遺跡1軒、伊古田遺跡2軒、下の内遺跡で1軒が発見されているにすぎない。規模は一辺2.5~5m程のものである。仙台周辺では清水遺跡、今熊野遺跡、宮下遺跡、西野山遺跡があげられる。規模は一辺4~6m程のものが大半であるが、内下遺跡では一辺9mを超えるものが確認されている。全体として平面形は方形を基調とするが、西野山遺跡では円形を基調としたものがみられる。炉跡は多くの住居跡で検出されている。このように、当遺跡の5号住居跡は規模の面からみて大型に属することは判断されるが、確実なものが1軒のみであるためからも集落構成については不明であり、出土土器の組成にも欠落があり、特徴等をみい出すことが出来なかった。

○平安時代の住居跡（4号、7号、10号、11号、12号、14号、8号・9号）

6軒の住居が確実なもので、他の2軒は推察されたものである。住居跡の位置をみると調査区北側に片寄っており、1区の台地上には1軒も確認されず古墳時代の住居跡とは場の設定に違いがみられる。住居間の重複はみられないが、建物跡と二軒重複関係がみられ両者とも切っている。偶然の結果とも考えうるが、11号→7号→9号→4号住と一直線上に住居跡が並ぶかのように位置している。他の住居跡を含めての関連は調査範囲が狭いこともあり明らかではないが、軸方向がほぼ同一であること、住居構築場所としてより良好と思われるⅠ区台地上に存在しないことなどから、意識的な配置構成が考えられる。近接する住居跡があり細かくみると時間差が存在するが、出土遺物から大きく1つのグループとしてとらえられよう。

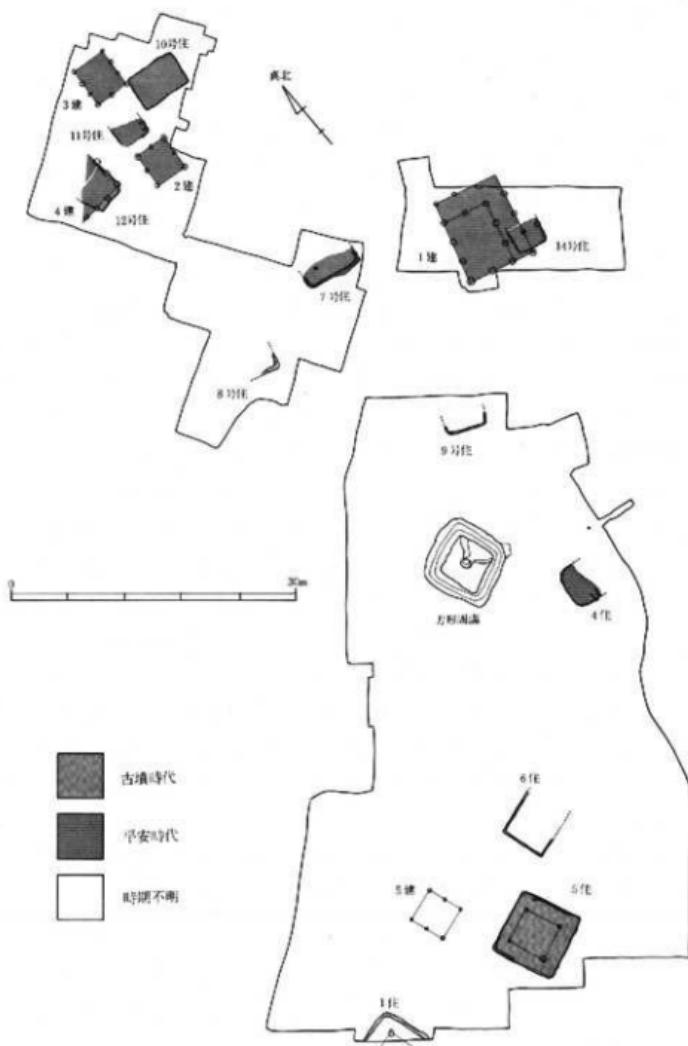


図56 住居跡・建物跡・方形周溝構配置

住居跡の構造は削平のため大部分が不明となっている。平面形は方形を基調し、周溝が確認されたものは7・8・9号住のみで、柱穴も7・8号住で各1基検出されたのみである。カマドを確認したものは4軒あり、南壁に附設されたもの1軒（4号住）、東壁に附設されたもの3軒（11・12・14号住）がある。カマド構築に瓦が使用されるものがあり、11号住では丸瓦2類が、14号住では平瓦2類がみられる。住居跡と瓦には所属時期に違いがあり瓦はかなりの時間を経てから再利用されたものと考えられる。他の住居跡でも各類の瓦片が出土している。住居跡の全容を知り得るものは10号住のみであるがカマドは附設されず中央部に焼け面がみられた。炉跡と考えられ、床面からは土師器环に附着した反故紙（漆紙文書）が出土している。これらから10号住は工房跡とも考えられ、他の住居跡も含めて性格を考える上で貴重である。

住居跡の年代は出土遺物・掘立柱建物跡に切られていること、灰白色火山灰等から10世紀前半以前と考えておきたい。また、建物跡とは重複関係があり時間的な差は存在するが軸方向がほぼ同一であることなどから強い関連をもつものと考えられる。

2. 建物跡

北側の傾斜面に4棟（1号～4号）、台地部に1棟（5号）の計5棟の掘立柱建物跡を確認した。平安時代の住居跡と重複する建物跡が2棟みられる。傾斜面に位置する建物跡の軸方向はN-2°～14°-Eにおさまり、台地部の5号建物跡がN-19°-Wと軸方向に違いがみられる。

1号～4号建物跡は軸方向から大きく1つのグループとしてとらえた。2号・3号建物跡は軸方向が同一で、さらに直線上に並ぶかのように位置している。規模の確認されるものは全て南北棟で、2間×2間・2間×3間・3間×4間で間仕切りまたは廊をもつものがある。柱穴掘り方の形状は円形が主体を占め、方形のものは若干みられるのみである。規模は径40～70cm程で全体的に小規模であるが、方形の柱穴は円形に較べて大形である。柱頭跡は10～20cm程で円形である。これらの建物跡群は上述のごとく傾斜面に位置しており、場所によっては地山面での確認ではあるが1m弱程の比高差がある。住居跡と同様に地形に順じていない建物配置が考えられる。調査の状況から発掘範囲外に延びる可能性が高く全体的なものは不明であるが、建物配置に規格性が存在するものと考えられる。建物跡の性格は確認数も少なく現在のところ不明と言わざるえない。年代は各建物跡が同時期である確証はないが、住居跡を切っていること、灰白色火山灰を含む層を切り込んでいるものがあることから10世紀前半以降であると考えられるが、住居跡出土上器と類似するものが柱穴内より出土しており、上記の年代からさほど下らないものと考えられる。

5号建物跡は他の建物跡と場を違えており、柱穴の規模も小さい。古墳時代の住居跡とほぼ同軸方向であり、柱穴内より塙釜式期の壺破片が出土している。これらから断定はしがたいが塙釜式期の建物跡とも考えうる。

3. 方形周溝遺構

方形に溝が巡ぐり台状部中央に土壙が位置しており、形態としては従来知られる方形周溝墓に類似するものである。土壙内からの遺物はなく、周溝内より土師器・須恵器片・瓦片・鉄釘が出土している。全て堆積土中からのもので底面からの出土はない。鉄釘は周溝南辺部上層の黒色土中に一括して出土したものであり後世のものとも考えられる。時期は周溝部より出土している土師器・須恵器片より平安時代と考えておきたい。性格は不明と言わざるおえないが形態等から墓跡としての性格も考えうるものである。

4. 土壙

65基の土壙が検出されている。時期の判断するものはごく少数であるが、出土遺物から弥生時代・平安時代のものが確認されている。詳細はV(4)で記したが、6号土壙からは弥生土器片・剥片石器・礫・炭化物が出土しており、状況から弥生時代に属するものと考えられた。性格については明らかに出来なかった。2号・5号・7号・13号・54号・63号土壙では焼面又は焼土が確認されている。特に2号土壙は底面全面に焼面が検出されている。同様な遺構がみられる遺跡に上新田・岩切鴻ノ巣・南小泉遺跡があり、「土器焼成施設」としての性格があたえられている。2号土壙からは出土遺物がみられなく上記の性格をもつものとは断言し得ないが「焼成遺構」としての性格は考えられる。時期としては灰白色火山灰が上層にみられることからも10世紀前半以前の年代が考えられる。その他として、55号・58号土壙からは多量の遺物が出土している。完形品になる土器はなく、出土状況にもまとまりはみられない。これらから廐棄としての性格が考えられる。

VII. 墨書文字について

今回の調査によって墨書は3種類、計10点確認されている。昭和56年度の調査では「宗」と判読可能な墨書文字が確認されており、当遺跡では4種類11点の墨書が出土していることになる。全て土師器環の体部に書かれている。判読できないものもあるが全て文字と考えられる。

墨書の種類には「ヰ」(図41-1~8)・「天」(図43-2)・「？」(図23-1)がある。図23-1は七器が欠損し、さらに摩耗しているため判読不能である。

この中で特異なものとして「ヰ」がある。筆の入れ方・ぬき方からみて上下については問題はないが、くずし文字と考えられ判読不明となっている。この墨書された土師器環は小ピットからの出土で、10個体の环が確認されている。そのうち9個体が重なり合い、8個体に上記の墨書が書かれていた。このような出土状況(完形品の土器が9枚重なり合っている・判読不明のくずされた文字)から小ピットは呪術的性格をもつものとも考えられる。同一筆跡であるかは検証し得なかったが、筆の入り方・文字の太さには違いがみられた。土器表面が摩耗し墨が

かすれた部分はあるが、全体的に流麗な筆のはこびである。

他に「天」・「宗」の墨書きがあるが、一文字であり、同種の文字の例もみられなく、現時点では意味合いについては不明と言わざるをえない。なお、年代は土師器坏の器形の特徴から、平安時代でも後半のものと考えられる。



図57 墨書き文字書体

IX. まとめ

今回の調査で得られた成果は次のとおりである。

○燕沢遺跡は台ノ原・小田原丘陵東端部の台地に位置する。調査地点は遺跡北西部の馬背状に延びる台地平坦部とそれに続く傾斜面である。造構は台地平坦部・傾斜面で確認され、住居跡11軒・掘立柱建物跡6棟・方形周溝造構1基・土壙65基・溝跡8条・溝状造構14条・ピット多数が発見されている。遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・赤焼土器・須恵器・綠釉陶器・陶器・礫・石器・砥石・鉄釘・漆紙文書がある。これらの遺物・造構から大きく下記の時期に分けることができる。

1期（縄文時代）：造構は確認されていないが、Ⅲ区造物包含層から早期・前期の土器片や石器が出土している。遺跡南西部の台地上からは縄文土器片が数多く表探されており造

構の存在も考えられる。

2期(弥生時代)：土墳(6号)が1基確認されている。弥生土器片・石器・礫が出土しているが時期は不明である。表採品であるが樹形圓式の土器片がある。昭和56年度調査の1号土墳からは石庵丁が1点出土している。

3期(古墳時代)：塙釜式期の住居跡が確認されている。T区南側の台地頂部とⅢ区傾斜面に位置し、不確定なものを含めて4軒確認されている。Ⅲ区遺物包含層より若干量の同時期の土師器も出土している。状況からI区南側の台地上に集落の場の存在が考えられる。

4期(奈良時代)：造構は確認されていない。出土瓦の分類で多賀城創建期以前・多賀城創建期に比定される瓦(平瓦1・2・3a、丸瓦1・2)があり、4期を設定した。

5期(平安時代)：住居跡・掘立柱建物跡・土壇・ピットが確認されている。調査区中央部から北側の斜面に立地するが、さらに北側へ造構が広がるものと考えられる。出土遺物の多くはこの時期のものであり、漆紙文書や墨書き土器もみられる。住居跡と掘立柱建物跡を主体とすると、[1]時期に細分される。

5a期：住居跡群で構成される。出土遺物や灰白色火山灰の検討から10世紀前半以前の年代が考えられる。

5b期：掘立柱建物跡群で構成される。住居跡を切っており、灰白色火山灰を含む層を切り込んで構築された建物跡があり10世紀前半以降の年代が考えられる。

○出土遺物を歴史時代に限定してみると、瓦は奈良時代から平安時代にかけてのものがみられるが、上器類は平安時代でも後半のものが主体を占めており、両遺物の時期にギャップがみられる。今後の調査で奈良時代に位置づけられる土器が発見される可能性もあるが、造構群の広がりとともに課題となるものである。また、墨書きされた土師器环が重なり合った状態で確認されたが、以前の調査で同様なものが検出された報告がある。墨書きの有無の確認はないが、今回^(註18)の発見を含めて遺跡の性格を考える上で一助となるものと考えられる。

○当遺跡は縄文時代から平安時代にわたる遺跡であることが再確認されたが、中心をなすものは平安時代の造構群である。性格として、從来言われてきた寺院跡・官衙遺跡かとの結論は出し得なかったが、規則性のみられる造構や出土遺物、特に漆紙文書の発見は一般集落からの出土もみられるが多くは官衙遺跡からのもので、これらから官衙施設としての考えを一步進め得るものであり、官衙(國家的施設)としての性格の一端をうかがいみることが出来たものと考えられる。さらに、造構の広がりは台地上や斜面にとどまらず北側の沖積地面に延びているものと判断され、広範囲にわたる造構群の存在が考えられる。

X. 付 章

1. 10号住居跡出土の漆紙文書について

東北歴史資料館 吉沢幹夫

今回出土した漆紙文書は全体で 6.0×5.0 cm ほどの大きさであるが、一枚の紙が 3 段にコの字状に折りこまれていて、土器面に接していた部分は複雑に折れ曲がるしづくちやの状態である。上面の部分もしわがあるが下面ほどではない。ただし、気泡の抜けたような小さな凹みが多数存在する。この漆紙文書を肉眼でみても右側上方に墨痕が認められる。これをさらに赤外線テレビカメラを通して読むと次のようになる。

□ 団 「」 |

き。 入。 會。

字の大きさは約 1 cm 画で細めの筆跡である。第 3 字より下方については墨痕らしきものもあり、また、第 1 字の上方も欠けており、現在、目にしている部分が行のはじまりであるのか終りの部分なのかについては決定することができない。

文字は左文字、すなわち紙背から文字を見ていることになる。しかし、肉眼でも墨痕が見られるほど紙質部分の残りは薄いと考えられ、表面に触ると墨が飛ぶおそれがある。第 1 字は当初「式」あるいは「式」かと思われたが、第 2 字目の「帰」が明らかに左文字であることがわかるため、第 1 字は「右」ではないかと考える。第 2 字は「婦」と読んだが、ヨの上に竹あるいは一かんむりがあるようにも見えた。しかし、凹みのための陰影と思われる。第 3 字は「ム」と見える。「ム」の字は存在するが、これ単独では 1 字となるものではない。従って第 3 字は「入」と次の字の頭が見えているのか、あるいは「合」などの可能性もありうるが、「ム」の下部の墨痕は確認できない。

さて、婦人と読むとすれば、名例律婦人有官位条、獄令決大辟条、犯徒応配居役者条などに見られるように、婦人という語は古代でもすでに存在していた。ただし、古代の文献や木簡などからは「婦人」の用例は今のところほとんどなく命婦や節婦など某婦という用い方がなされている。従って、第 3 字は「入」よりも「合」の可能性が高いことになる。第 3 字を「合」とすると、右婦合……となり、文章の面から考えて婦の合計を示すという意味になる。とすれば、書式から考えてこの行の右側には婦の歴名があるはずであるが、この漆紙文書では墨痕はない。このことはこの行に至る前文がないということであるから、この行が文のはじめか、あるいは歴名の位置が誤ったところにあるということを示すものといえよう。ただし、第 3 字を「合」と確定するわけではない。

ところで、この漆紙の出土は燕沢遺跡の性格を考えていくうえで、貴重な資料となる。漆紙文書は下宮遺跡や小染川遺跡のように必ずしも官衙や寺院とは考えられないところからも出土しているが、遺構など総合的に考えて燕沢遺跡を官衙・寺院跡とみる見方を強めることになる。もしそうであれば、今後の漆紙文書の出土が期待できるわけである。



漆紙文書実測図

2. 燕沢遺跡の灰白色火山灰

東北大学農学部 庄子貞雄
山田一郎

燕沢遺跡の火山灰の1次鉱物組成を表1に、火山ガラスの形態を表2にしました。比較のため、志波姫町掘口の御駒堂遺跡にみられた灰白色火山灰についてもしました。御駒堂遺跡の灰白色火山灰は厚さ30cmに及ぶ所もあり、基準にするのに好都合なものである。

軽鉱物含量は、燕沢遺跡の火山灰も御駒堂遺跡のものも同様96%と高い。次にその組成をみると、無色火山ガラスが大半で、少量の斜長石、風化粒、石英が含まれている。この組成は御駒堂遺跡の灰白火山灰と比較すると、石英含量がやや高いのを除き極めて類似している。また、火山ガラスの形態は燕沢遺跡の火山灰は「スponジ状」(顆粒状)「扁平状」纖維状の順となり、ほぼ御駒堂の灰白色火山灰と同じ結果である。

一方、重鉱物組成をみると、燕沢遺跡の火山灰と御駒堂遺跡の灰白色火山灰にはかなりの違いがみられる。御駒堂遺跡の灰白色火山灰の重鉱物含量は、シソ輝石>磁鐵鉱>普通輝石>角閃石の順であるのに対し、燕沢遺跡の火山灰は磁鐵鉱>シソ輝石>普通輝石>ジルコ

ンである。ジルコンはテフラ中に含まれることは極めて稀である。また、角閃石含量も宮城県内の他の灰白色火山灰に比べ、高い値である。

以上のことから、蒸沢遺跡の火山灰は、灰白色火山灰に他の堆積物が若干混じったものであると考えられる。

表1 灰白色火山灰の1次鉱物組成 (0.1~0.2mm部分)

| △ | 重鉱物組成(粒数%) | | | | | 軽鉱物組成(粒数%) | | | | | 重鉱物含量(重量%) |
|-------|------------|------|------|-----|------|------------|-----|-----|-----|-----|------------|
| | シソ輝石 | 普通輝石 | 角閃石 | 斜長石 | ジルコン | 黑色火山ガラス | 斜長石 | 石英 | 風化殻 | 重鉱物 | |
| 蒸沢遺跡 | 39 | 4 | 10 | 46 | 1 | 71 | 14 | 5 | 10 | 4 | |
| 御物堂遺跡 | 58 | 21 | 11以下 | 22 | | 76 | 15 | 1以下 | 8 | 3 | |

表2 火山ガラスの形態

| △ | スピンドル状 | 纖維状 | 扁平状 | 粗粒状 |
|-------|--------|-----|-----|-----|
| 蒸沢遺跡 | 55 | 9 | 10 | 29 |
| 御物堂遺跡 | 72 | 5 | 1 | 22 |

参考文献

- (註1) 右田 茂作：「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』 1934年
伊東 信雄：「燕澤古瓦出土地」仙台市史3「燕澤古瓦出土遺跡」『仙台の文化財』宝文堂
- (註2) 渡部 弘美：「燕澤遺跡」仙台市文化財調査報告書第39集 1982年
- (註3) 氏家 和典：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会 1957年
- (註4) 阿部 義平：「東國の土師器と須恵器」『帝塚山考古学』 1968年
- (註5) 桑原 淳郎：「ロクロ土師器杯について」『歴史』第39輯 東北史学会 1969年
- (註6) 森 貢喜：「水入遺跡」・「佐内屋敷遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集 1982年・第93集 1983年
- (註7) 渡部 弘美：「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第55集 1983年
- (註8) 土岐山 武：「安久東遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集 1980年
- (註9) 白鳥 良一：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅳ』宮城県多賀城跡調査研究所 1980年
- (註10) 原田 良雄 編：『東北古瓦図録』雄山閣 1974年
- (註11) 宮城県多賀城跡調査研究所：「多賀城跡」昭和53年度発掘調査概報 1978年
- (註12) 進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行：「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所 1975年
- (註13) 佐々木 茂 植：「宮城県古川市伏見廐寺跡出土の古瓦」『歴史考古』第19・20合併号 1971年
- (註14) 丹羽 茂：「三輪田遺跡」古川市文化財調査報告書第4集 1980年
- (註15) 古窯跡研究会：「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国古窯跡群Ⅱ』 1976年
- (註16) 新庄屋 元晴：「角田郡山遺跡」角田市文化財調査報告書第3集 1980年
- (註17) 進藤 秋輝：「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要Ⅴ』宮城県多賀城跡調査研究所 1978年
- (註18) 註1に同様・仙台市史3
- (註19) 平川南・後藤勝彦・白鳥良一：「宮城県下庄遺跡の漆紙文書」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所 1980年
- 興野 義一：「大木式土器理解のためにⅠ～Ⅳ」『考古学ジャーナル』 1967～1968年
- 岡田茂弘・桑原淳郎：「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
- 木村 浩二他：『郡山遺跡Ⅰ～Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第29・38・46集 1981～1983年

- 宮城県教育委員会：『亀岡遺跡発掘調査報告』鳴瀬町文化財調査報告第1集 1977年
- 岩淵康治・田中則和：『安久東遺跡発掘調査概報』仙台市文化財調査報告第10集 1976年
- 青沼一民・長島栄一：『中田畠中遺跡』仙台市文化財調査報告書第53集 1983年
- 篠原 信彦他：『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集
1984年
- 丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志：『清水遺跡』宮城県文化財調査報告書第77集 1981年
- 宮城県教育委員会：『今泉野遺跡』宮城県文化財調査報告書第33集 1973年
- 宮城県教育委員会：『宮下遺跡』名取市文化財調査報告書第1集 1975年
- 丹羽茂・柳田俊雄・阿部恵：『西野川遺跡』宮城県文化財調査報告書第35集 1974年
- 石田 広美他：『山田水谷遺跡』日本道路公団・山田遺跡調査会 1977年
- 宮城県教育委員会：『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集 1979年
- 塩野 博：『土器（土師器）製作遺跡について』『月刊文化財』 1979年

写 真 図 版

図版1 遠野市河原空字真（昭和32年、○印 焼失面積）



図版 2
遺跡航空写真



- ① 調査対象地区
② 56年度調査区

3
遺跡遠景 (北より)



4
1号住居全景



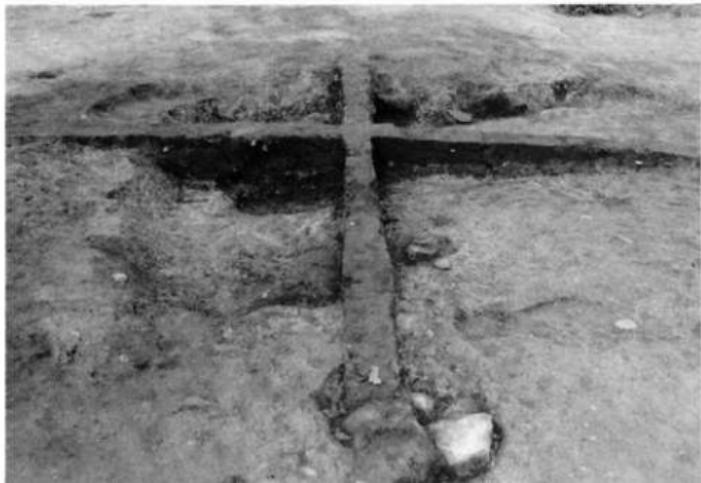
図版 5
1号住居断面



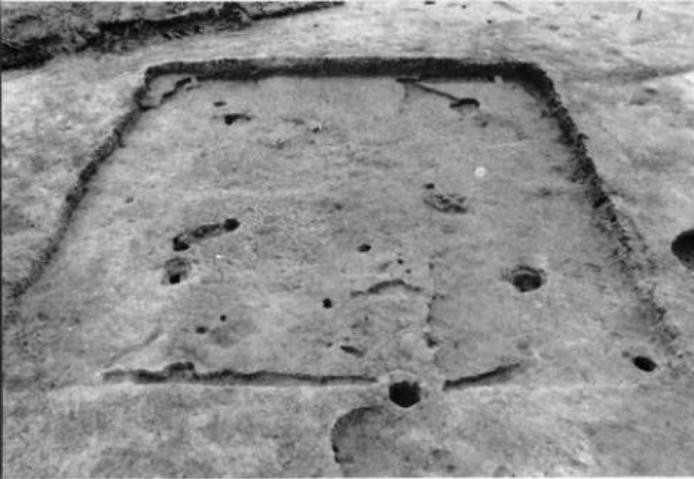
6
4号住居全景



7
4号住居断面



圖版 8
5号住居全景



9
5号住居遺物出土状况



10
5号住居断面



图版11

6号住居全景



12

7号住居全景

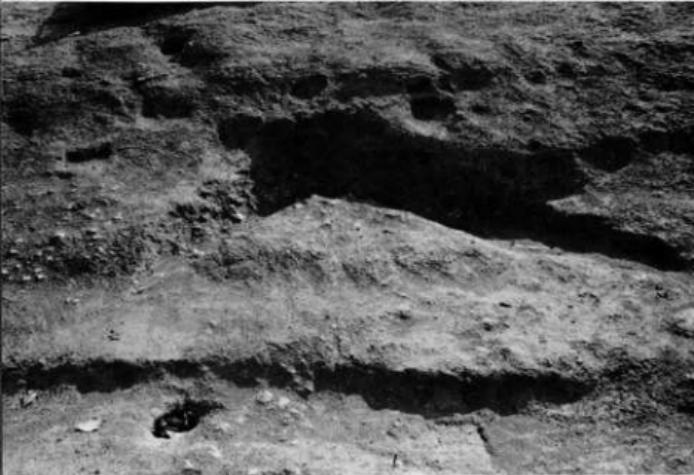


13

7号住居断面



圖版14
8號住居全景



15
8號住居斷面



16
9號住居全景



図版17
10号住居全景



18
10号住居断面



19
11号住居カマド全景



图版20
12号住居全景



21
14号住居全景



22
1号建物全景



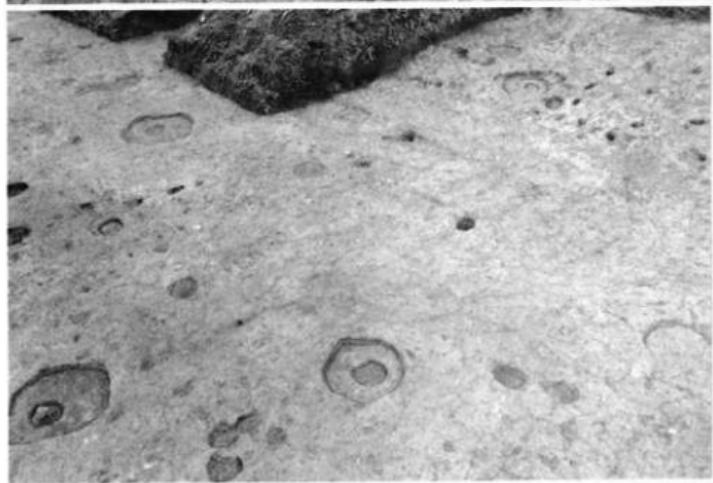
图版23

1号建物 P. 4



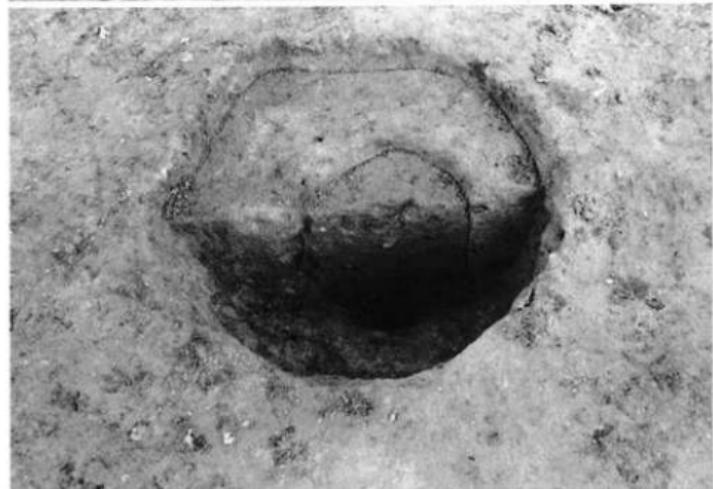
24

2号建物全景



25

2号建物 P. 2



図版26
3号建物全景



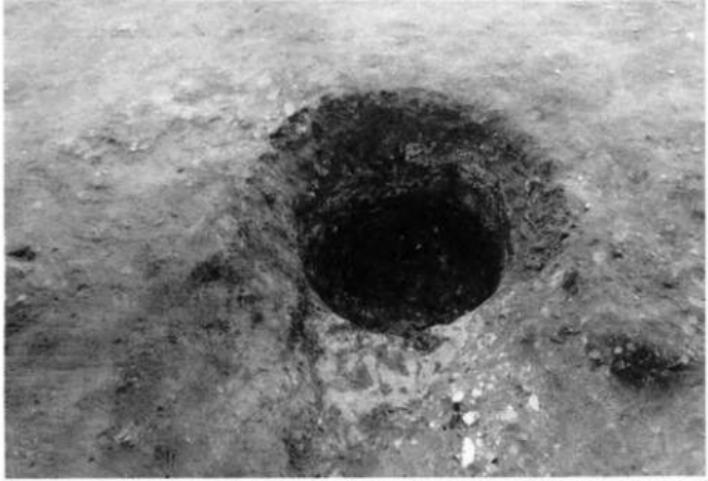
27
4号建物全景



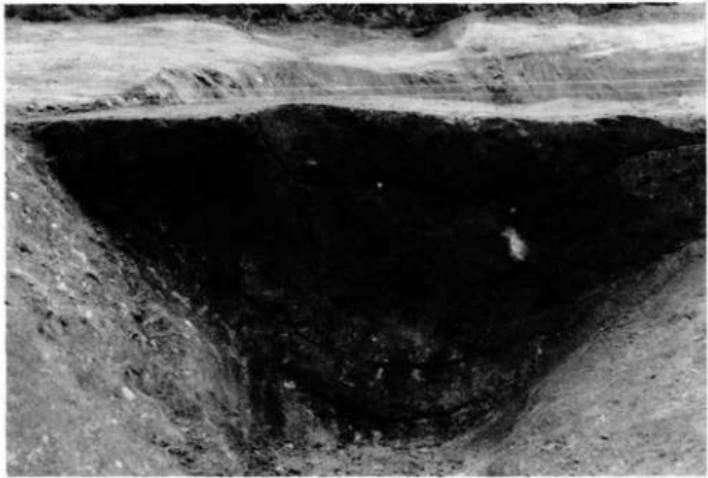
28
方形周溝全景



圖版29
方形周溝內土壤全景



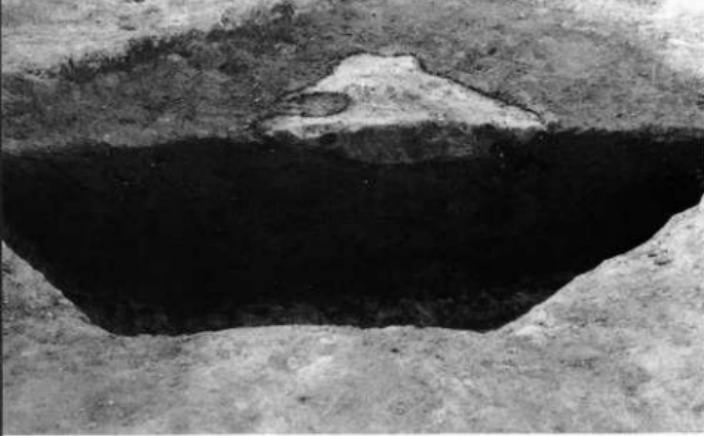
30
方形周溝斷面



31
2號土壤全景



图版32
7号土壤全景



33
55号土壤遗物出土状况



34
3号溝状遗構全景



図版35

4号溝状造構全景



36

V区7トレP232

墨書き土器出土状況



37

I区中央部全景



図版38
I区西侧全景



39
I区東側全景



40
III区全景



図版41
IV区D-14トレンチ



42
V区9・10トレンチ



43
III区南壁





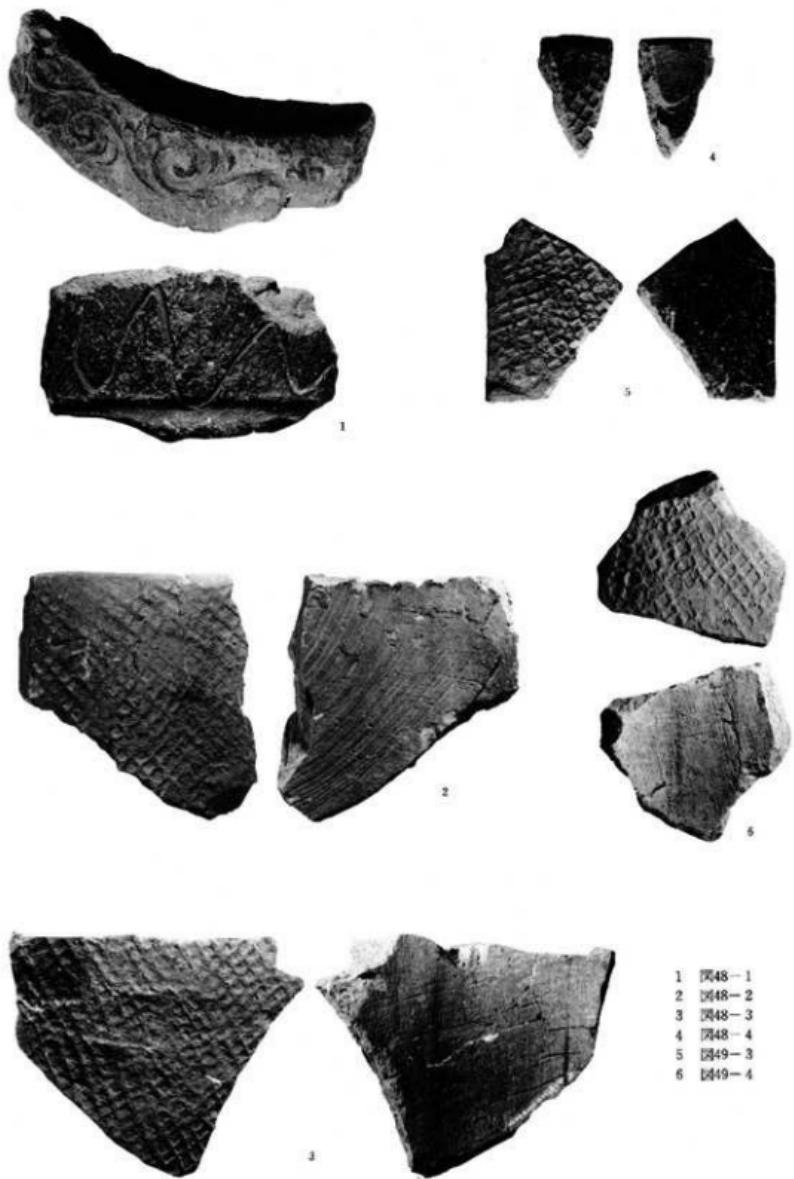
図版44
Ⅲ区遺物包含層



45
V区17トレ北壁北側

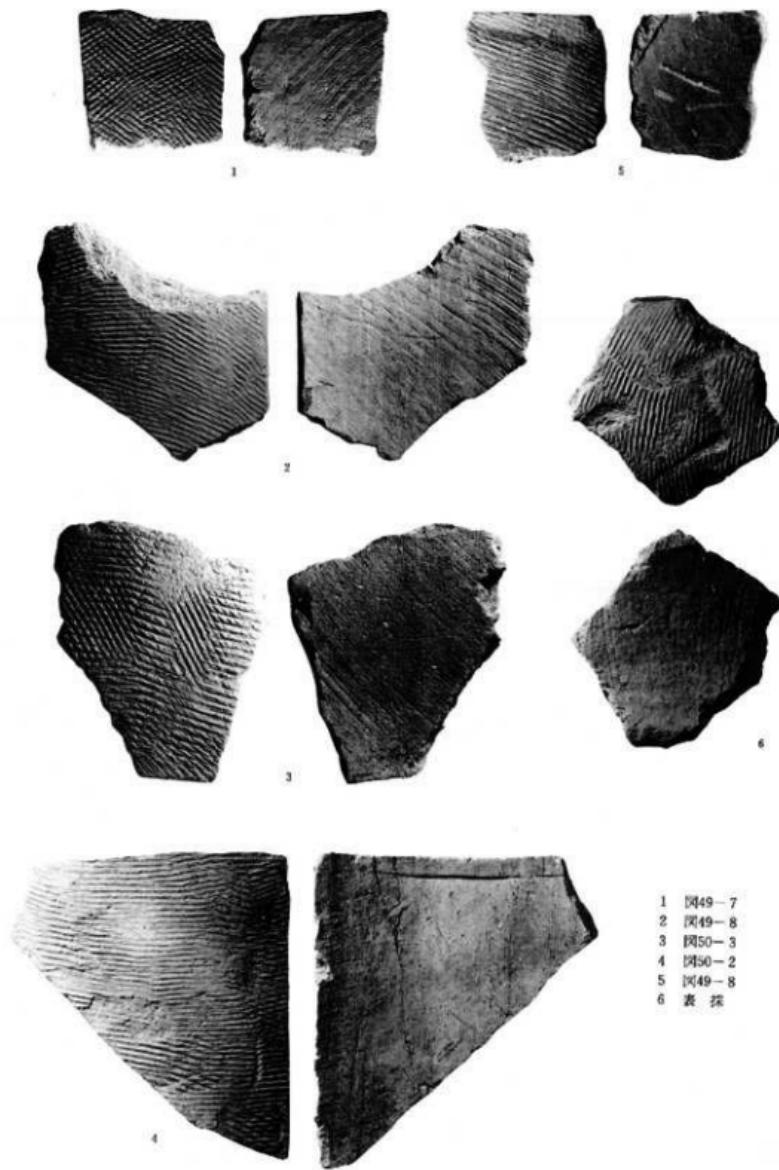


46
V区17トレ北壁南側



図版47 出土遺物(軒平瓦・平瓦)

- 1 図48-1
- 2 図48-2
- 3 図48-3
- 4 図48-4
- 5 図49-3
- 6 図49-4

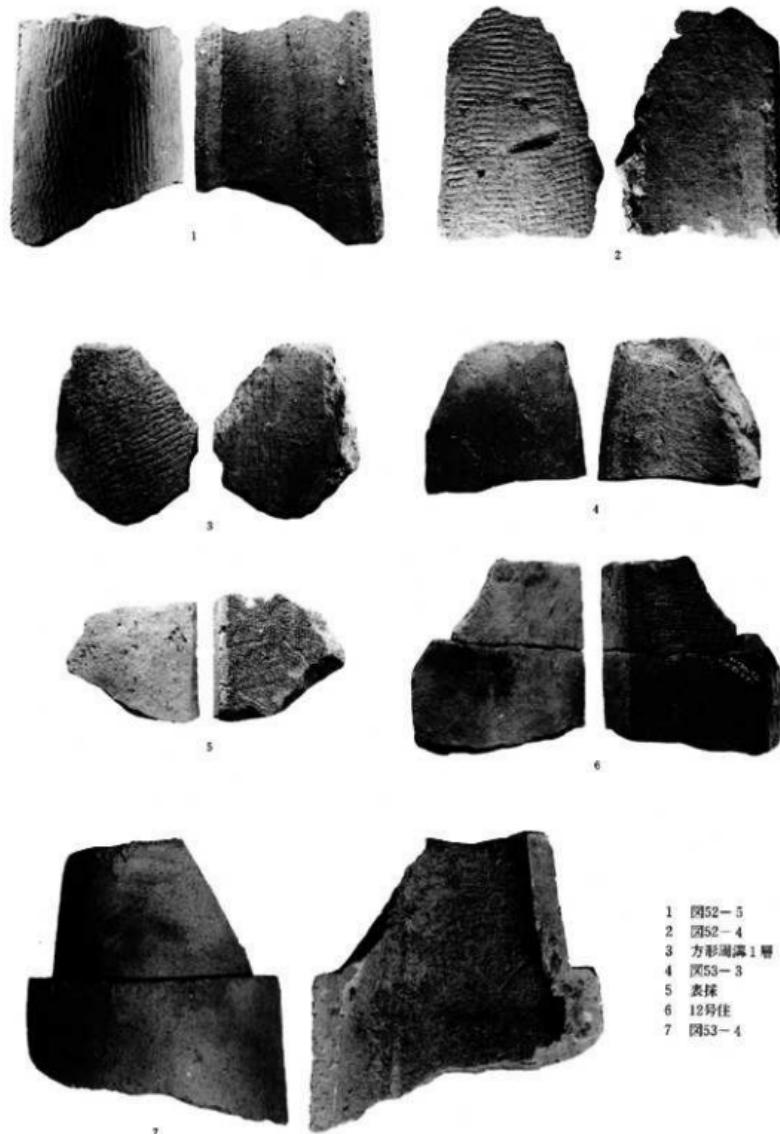


圖版48 出土遺物 (平瓦)



1 V区12トレ1層
 2 図51-4
 3 図51-5
 4 方形周溝1層
 5 I区1層

図版49 出土遺物（平瓦）



图版50 出土遗物（瓦）

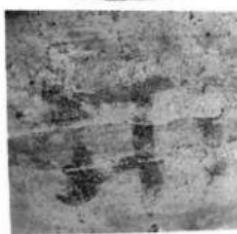
- 1 圆52—5
- 2 圆52—4
- 3 方形漏滴1号
- 4 圆53—3
- 5 表样
- 6 12号住
- 7 圆53—4



1



5



2



6



7



3



8



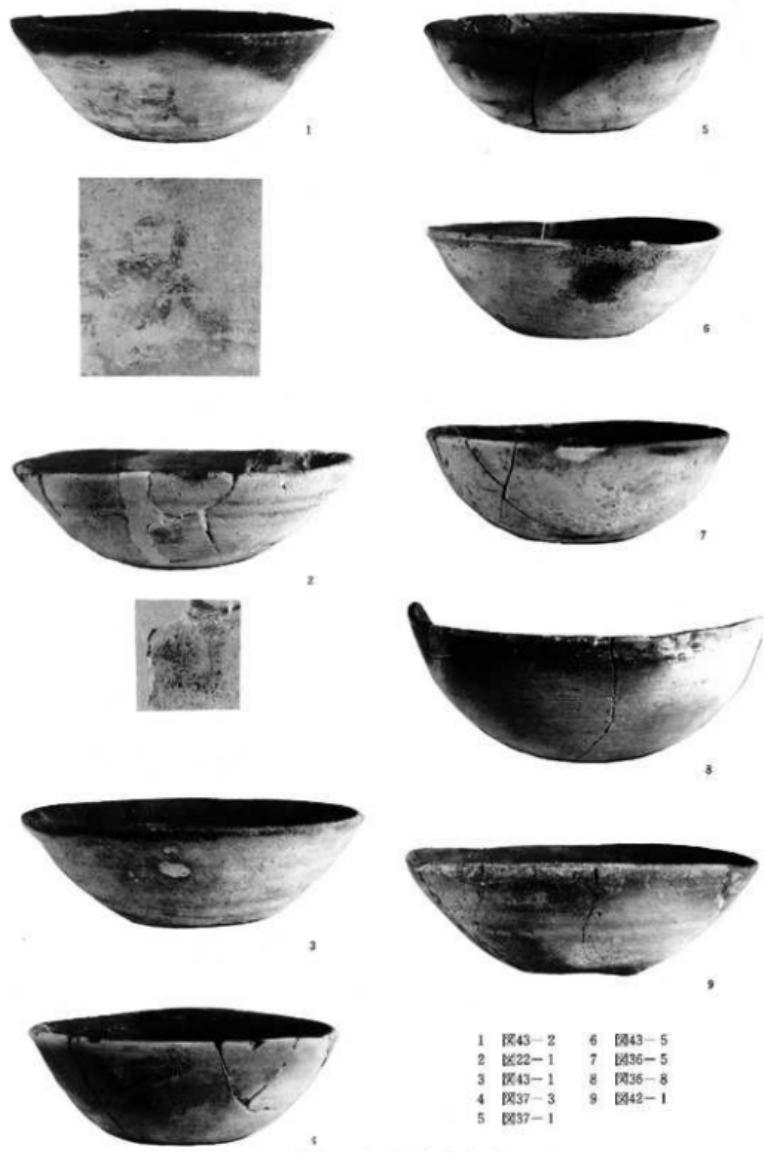
4



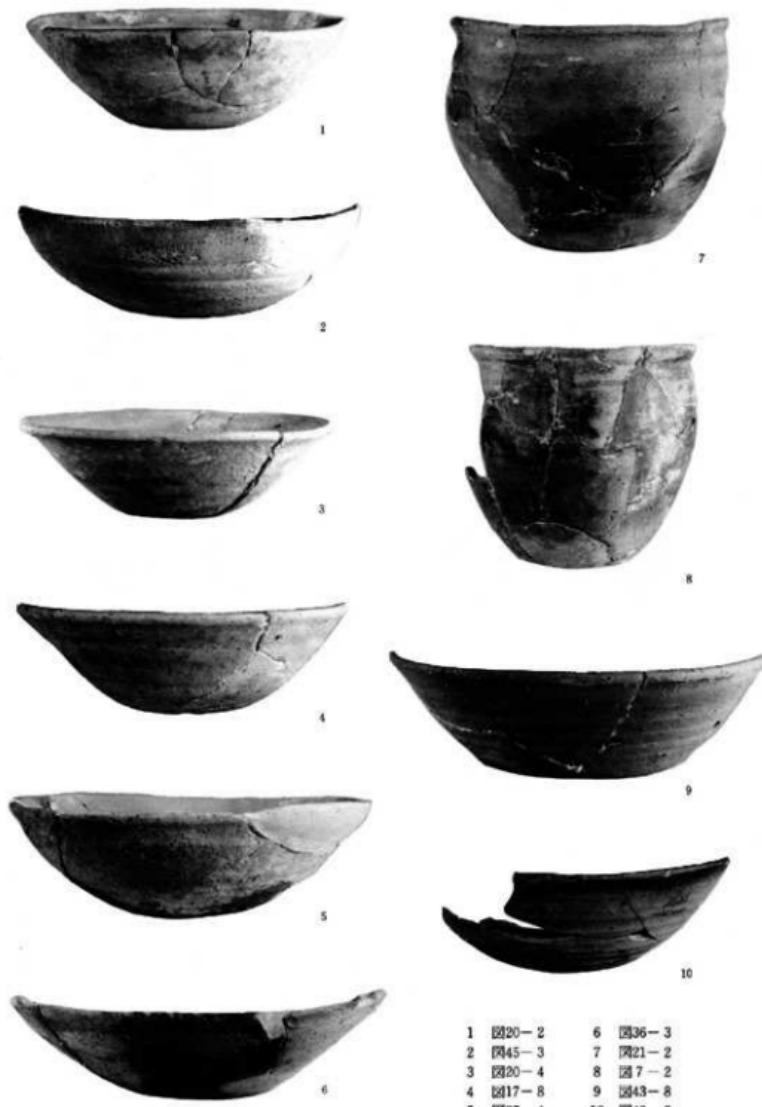
9

- 1 図41-1 6 図41-6
2 図41-2 7 図41-5
3 図41-7 8 図41-4
4 図41-3 9 図41-9
5 図41-8

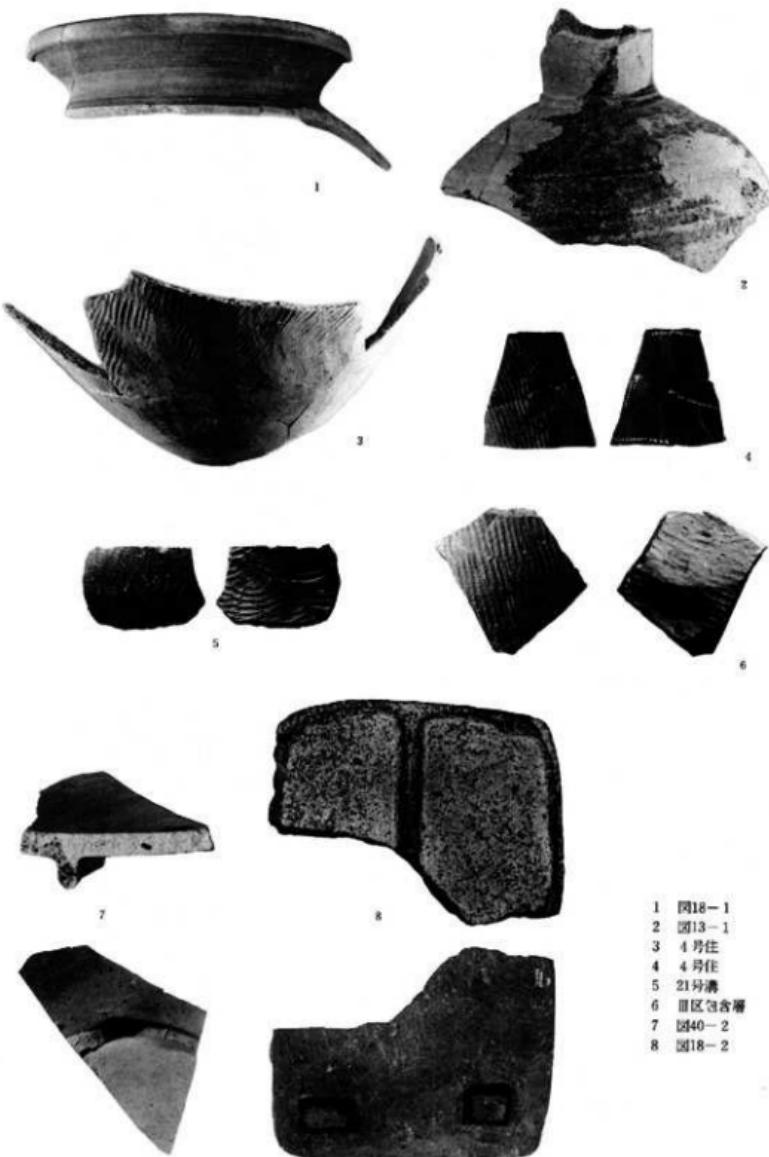
图版51 出土遗物(土器)



图版52 出土遗物（土师器）

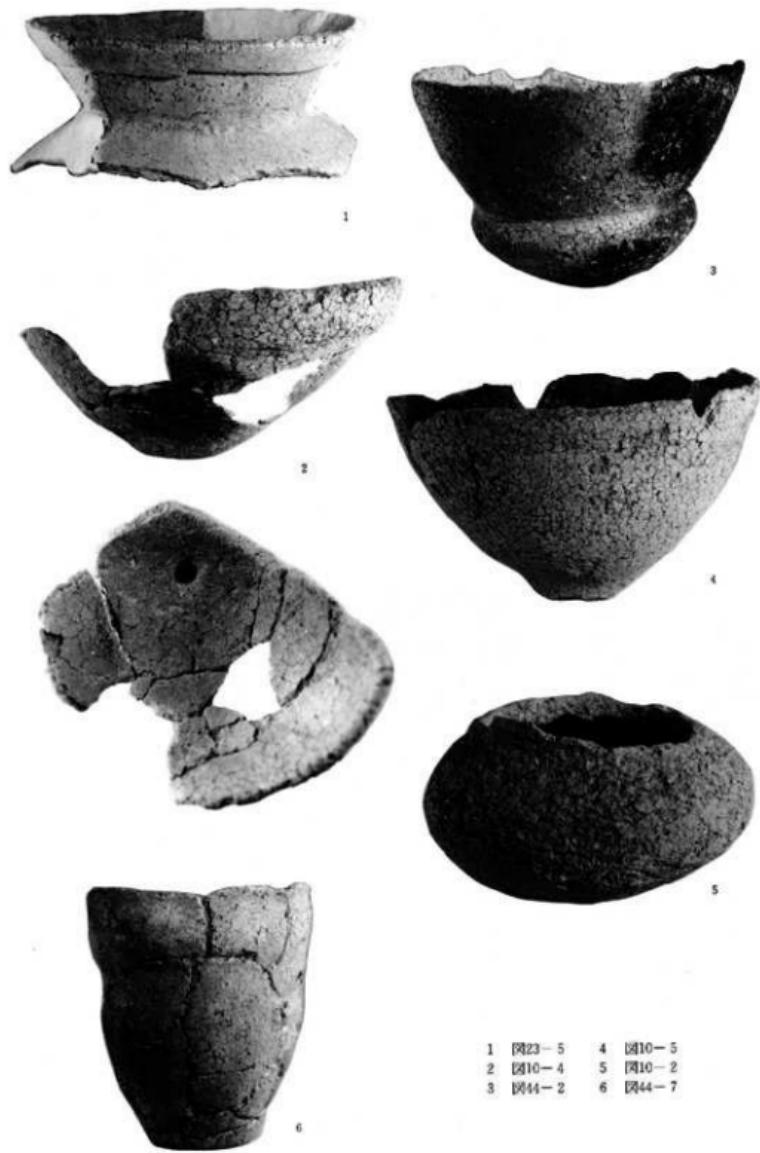


図版53 出土遺物（土師器・赤焼土器・須恵器）

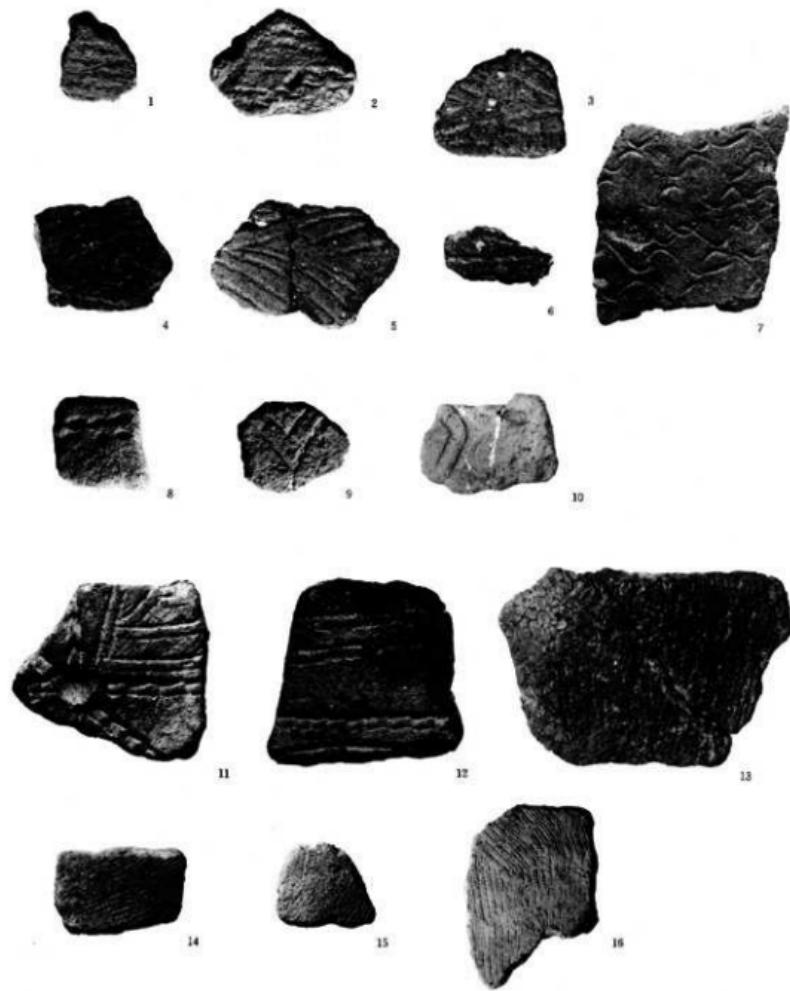


図版54 出土遺物(須恵器・緑釉陶器・甌)

- 1 図18-1
- 2 図13-1
- 3 4号住
- 4 4号住
- 5 21号溝
- 6 Ⅲ区3号窯
- 7 図40-2
- 8 図18-2



图版55 出土遗物（土器）



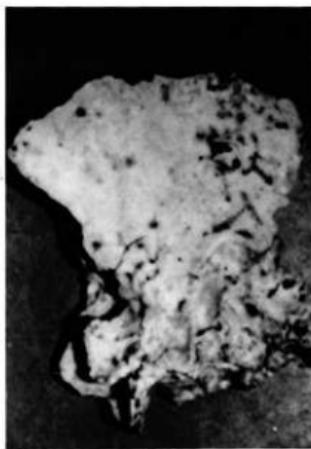
図版56 出土遺物(縄文土器・弥生土器)

- | | | | |
|----------|---------|----------|----------|
| 1 図46-2 | 5 図46-9 | 9 図46-5 | 13 箕 掃 |
| 2 図46-1 | 6 図47-2 | 10 図46-6 | 14 図47-4 |
| 3 箕 掃 | 7 図46-3 | 11 図46-8 | 15 図47-5 |
| 4 図46-10 | 8 図46-4 | 12 図46-7 | 16 図47-3 |



- | | | | |
|---------|----------|------------|----------|
| 1 図54-1 | 7 図54-6 | 13 図54-11 | 19 図55-5 |
| 2 図54-2 | 8 図55-2 | 14 図54-10 | 20 図55-7 |
| 3 図54-3 | 9 図54-8 | 15 国55-1 | 21 I区 |
| 4 国54-4 | 10 国55-3 | 16 6号土梗 | |
| 5 国54-5 | 11 5号住 | 17 国55-4 | |
| 6 国54-7 | 12 国54-9 | 18 III区包含层 | |

图版57 出土遗物(石器·核·砾石)



赤外線テレビカメラによる撮影



図版58 出土遺物（釘・漆紙文書）

職 員 錄

仙台市文化財調査報告書刊行目録

社会教育課

課長 水野昌一
課主 総括 幸坂泰一

文化財管理係

係長 大沢隆夫
係主 事若沢克輔
・ 山口 宏

文化財調査係

係長 佐藤 隆
教諭 渡辺 忠彦
・ 佐藤 指
主事 田中 刑和
・ 結城 慎
教諭 成瀬 茂
・ 菅原 和夫
・ 青沼 一民
主事 沢村みどり
・ 木村 浩二
・ 篠原信彦
・ 佐藤 洋
・ 金森 安孝
・ 佐藤 卓平
・ 吉岡 春平
・ 工藤哲司
教諭 渡辺 弘美
主事 佐浜 光朗
・ 斎野裕志
・ 長島栄一
派遣職員 高橋勝也

- 第1集 天然記念物蕭屋ドセコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
 第2集 仙台城（昭和42年3月）
 第3集 仙台市燕派善店守護櫻穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
 第5集 仙台市南小泉法師塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
 第6集 仙台市荒巻丘本松窓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
 第7集 仙台市高沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
 第9集 仙台市根岸町京押守櫻穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
 第13集 南小泉遺跡一範例確認調査報告書（昭和53年3月）
 第14集 粟遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
 第17集 北里遺跡（昭和54年3月）
 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
 第22集 繩ヶ峯（昭和55年3月）
 第23集 年報1（昭和55年3月）
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
 第25集 二神塚遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
 第27集 史跡陸奥國分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
 第28集 年報2（昭和56年3月）
 第29集 郡山遺跡I・昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
 第30集 山手上ノ台遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
 第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告書II（昭和56年3月）
 第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
 第33集 I-II遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
 第35集 南小泉遺跡I・都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
 第36集 北浦遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第37集 仙台平野の遺跡群I・昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第38集 郡山遺跡II・昭和56年度発掘調査概報（昭和57年3月）
 第39集 熊沢跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I（昭和57年3月）
 第41集 年報3（昭和57年3月）
 第42集 郡山遺跡・宅地造成に伴う緊急発掘調査（昭和57年3月）
 第43集 素遺跡（昭和57年8月）
 第44集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
 第45集 茂庭一茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第46集 郡山遺跡III・昭和57年度発掘調査概要（昭和58年3月）
 第47集 仙台平野の遺跡群II・昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
 第49集 仙台市文化財分布調査報告I（昭和58年3月）
 第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
 第52集 南小泉遺跡I・都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
 第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第54集 神明社麻塚跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第55集 南小泉遺跡I・青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）

- 第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）
第57集 年報4（昭和58年3月）
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
第60集 南小泉遺跡－倉庫建臺に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第61集 山口遺跡Ⅱ・仙台市体育館建設予定地一（昭和59年2月）
第62集 燕沢遺跡（昭和59年3月）

仙台市文化財調査報告書第62集

燕 沢 遺 跡

昭 和 59 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市若林区分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

